
Dear Love Propose

* SHUL *

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D e a r L o v e P r o p o s e

【Nコード】

N 6 9 0 2 B

【作者名】

* S H U L *

【あらすじ】

男嫌いのあたし、神埼陸の最近の悩みの種は“あいつ”そんな“あいつ”は学年1の『たらし』おまけにナルシスト。でも、そんな“あいつ”に、あたしの心は動いてく。

第1話＊クラス替え

あたしは男の子より女の子が好き。

中学1年生の2月頃になったら、周りの女の子はみんな好きな人のバレンタインの話で盛り上がっていた。

あたしは友達の『好きな人』の話を聞いて、うんざりしてた。

言えなかったけど・・・

『好きな人』って、やっぱり男の子なんですよ？？

男の子って、好きになんてなれるの？？

“男嫌い”のあたしには、男子なんて、好きになれなかった。

「あ——！！真奈美ちがうクラスじゃん！」

それは、あたしの中学2年生のクラス替えだった。

“神崎 陸”の名前は3組に、“南園 真奈美”は2組にちよこんとあった。

「真奈美が一緒じゃなきゃあたし仲いい人なんていないよぉ！」

あたしは泣きそうになった。真奈美は昔からの友達で、小学校から中1までクラスがずっと一緒だった。今年も一緒って勘違いしちゃってさ・・・あたしは人見知りだったから、ほかの小学校からくる中学校では友達なんてともつくれなくて・・・。

「真奈美・・・絶対ムリなんだってえ！真奈美がいないクラスなんてえ！」

あたしはとうとう目の全体が曇ってきた。

「ふん。いいじゃんあたし以外の友達つくれるし」

『あたしは関係ありません』という風にそっぽ向いて気楽そうに答える。

「男の子とも仲良くなれるんじゃない？・・・彼氏とか」

真奈美の言葉が『反射』して大腦に渡らずせき髄へ走った。

「かかかかかか・・・彼氏い??」

あたしの目は回っていた。この13年間彼氏なんて考えたことなかった・・・。

「そんな驚くこともないでしょ!? 中2になったら結構彼氏みんないるよ」

平然として答える真奈美に対してあたしは冷や汗だらだら・・・。

「そついやそうだった・・・あんたはまずその“男嫌い”を治しなさい!!」

格好良く決まっている真奈美に対して脅えてるあたしって・・・。

「ほら、もうみんな教室行つてんじゃん! あたしたちも行こ!」

真奈美はくつ箱に向かってあたしの背中を押す。

「ええ!? あたし教室行つても誰も話す人なんて・・・」

あたしは抵抗して通学靴を地面に体の重みをまかせ、摩擦を起こさせた。

「ちよつ・・・ちよつと——!!」

「じゃああたしはここだからね。ちゃんと女の子と仲良くなりなよ？」

あたしも2組の教室真奈美と一緒に入りたいよ。

「本当につらかったらあたしのところ来てもいいからね？」

今すぐ行きたいよ。

「じゃあね」

真奈美は2組の教室に入っていった。

あたしはというと・・・3組の教室の前ですくんでいた。

「・・・・・・・・」

このドアを開けたら、友達になれる人なんている？

『彼氏』と呼べる人なんて、見つかるのだろうか？

ガララッ。

ドンッ！

ん？何の音？

あたしは教室に足を1歩踏み入れた。

ゴンッ！

「ごほっ！」

あたしの顔面にはドアを開けた勢いで掃除道具の扉が開き、モップの持ち手があたった。

「いつ・・・いつたあ・・・」

あたしは半泣きで鼻の頭をさすった。

「何してんの？」

あたしは顔を上げた。鳥肌が立ち、泣き目になってきた。

それは1人のクラスの男子。

ワックスで立てたと思われるつんつんの黒い髪の毛。

学ランのホックは開けている。

細い目をしてあたしを見下ろしている。

・・・怖い。

あたしのこと、睨んでる？見ないで・・・怖い・・・。

あたしは目をそむけた。これ以上男子なんて見たくない！

「わ——ん！——！」

クラス中がざわめいた。あたしはダッシュで自分の席を見つけ音を立てて座った。

クラスの視線があたしに一点に集中し、あたしはもう耐え切れなかった。

キンコンカーンコン。

始業式が終わり、あたしは教室を飛び出した。

もう嫌だ、真奈美のどこに行きたい！

教室を急いで出ようとドアをい勢いよく開けた。

ゴンッ！

「ったあ！」

また掃除道具からモップが飛び出してきて次は後頭部に直撃……。ところどころではくすくすと笑い声が。

バカにした笑い方じゃなかったけどあたしはとても嫌だった。

「っもう！モップのバカ！！」

1人漫才を終えて教室をやっと出た。

それを、見ていた北村 海は、

「プツ……。何あの子？おもしろえ……。てかかわいかったよな？啓」

海に啓と呼ばれた人物は帰ろうというそぶりも見せず、机にひじをついていた。

「別に……。興味ないし」

「まあ、た、そう言っつて、この『たらし』。お前が1番初めに目え合っつてたじゃん」

「だつて、たまたま掃除用具箱の近くにいただけだつて」

啓はワックスで立てた、つんつんの黒い髪の毛をさわる。

「あんなの・・・ただのお子ちゃまだろ・・・」

啓は、前髪を上げながら、つぶやいた。

第2話＊2度目の恥

「・・・おはようございます」

自分でも声がどよんでいたのが分かる。

「わっ！？陸、どうしたの！？顔死んでるよ」

「うえ——ん！！真奈美い！！」

あたしは泣きついた。

「・・・・・・で、そのクラスが嫌なわけね」

カバンを振り回しながら真奈美は歩く。

「男の子に睨まれたり一人で漫才したり・・・初日から最悪」

「そりゃー男嫌いの陸が男子に睨まれたんじゃないやねえ・・・」

「あ、それよりさー！」

ピョンツと真奈美はあたしの目の前に飛んできた。

「あたし実は学級委員することになりましたあー！！」

『イエーイ』の擬声語が似合うそのピースのポーズはカッコいい・・。

「学級委員って・・・」

あたしがつぶやくと真奈美は満面な笑顔を見せた。

「学級委員ってクラスで一番輝くよお！クラスまとめたり大掛かりな仕事したりとか」

「へえ・・・」

あたしは少々興味なし。

「・・・陸、学級委員やってみれば？」

真奈美のひと言にあたしは後ずさった。

「・・・何よ？」

「がががが、学級委員とか無理にきまってるじゃん！」

「なーに言ってるの！そんなじゃ男嫌い治らないよー」

真奈美は余裕であたしのがたがた揺れる肩に手を回す。

「男の子にこんなことされたらあ？？」

真奈美のあまーい言葉に背筋に冷たいものがはしった。

「ああああ・・・あたし！先行ってるから！！」

あたしは耐え切れずに学校までダッシュで走っていった。

「はあ・・・はあ・・・うう・・・」

学校の門についた時はあたしの息はもう切れていた。

今日から普段通りの授業・・・あんまスタミナ使いたくなかったんだけど・・・。

「・・・う、今日委員会にするか決める授業あるじゃん・・・学級委員も・・・」

あたしは1人言をぶつぶつ言いながらくつ箱へ向かった。

あたしはくつ箱の棚から真新しいシューズを出した。

あたしがその場でボーっとしていたら、隣でボスンと音がした。

振り返ってみると、シューズを手荒く床に置いた、“男子”だった。

「！！」

あたしは少し後ずさった、その“男子”とは、昨日あたしを睨んだ“男子”だった。

そいつは無言でシューズのかかとを踏みながら、教室へと向かっていった。

「・・・・・・・・」

あたしはそれを何を言わずに口をポカンと開けて見ていた。

そう言えば・・・・・・・・あたしあいつの名前知らないや。

まあいいか・・・・・・・・。

教室に入るのは重かった。昨日のことも・・・

あたしは教室をドアを重く開けた。

やけに教室静か・・・

あたしはふとうつむいていた顔を上げた。

「・・・・・・・・」

3秒間状況が分からなかった。

でも4秒目からはあたしの目は輝いた。

「やったあ！！教室だれもいなあーい！じゃあいいや！おっはよー
！！」

あたしのテンションは1人で盛り上がった。
が。。。。。

「・・・何言ってるの？」

「え。。。、！！！！！」

あたしのすぐ隣にあった机には・・・“あいつ”がいた。
じゃあ今の訳分かんないテンションこいつに見られてたの?? 恥っ
つ!!

「あんたまさか俺いないと思って1人で盛り上がったの？」

口の端をつり上げて苦笑い。

コレって笑われてんの?? あたし昨日この人に睨まれたんだよね・・・
???

「あああああ・・・あたし・・・えと・・・」

あたしは勢いあまってドアを勢い良く閉めてしまった。

ドンッ!! ガラッ・・・

「っへ？」

あたしの目の前にはモップの大群が迫ってきた。

「キャ——！！！」

忘れてたよ・・・モップ君。

あたしはモップに取り囲まれてしまった。てか臭いよ・・・。
うんざりとしているあたしとは逆に“あいつ”は大笑いであたしを
見た。

こんなに笑う人だったんだ・・・。

あたしは昨日の睨まれた顔と比較してみた。

「くっ・・・お前・・・うける・・・」

腹を抑えて笑いをこらえながらコメントをひと言。

恥ずかしさは増してきた。顔が熱くなってきた。

でもしばらくして“あいつ”の笑いはおさまり何も言わずにあたし
の周りのモップを1本ずつ拾って掃除用具の中に戻した。

「あ・・・ありがとう」

あたしは小さな声でお礼を言った。

「おっはよ——！！」

あたしはひざをついたまま教室のドアを見上げた。

元気なあいさつをしてきたのは小さな男の子。

たしか小学校で同じクラスだった・・・北島 海だったけ・・・？

海は『カイ』って読むんだけどみんな『ウミ』って呼んでたなあ・・・。

「おお海、おはよ」

誰かの次の言葉が出る前に、あたしは立ち上がって自分の席に向かった。

「あつれえゝ??教室2人だけだったの?あつやゝゝ」

あたしは思わず北島のほうを振り返った。

そこには怪しい笑顔であたしを見ていた北島がいた。

「別に・・・2人きりだからって俺はボ——ってしてただけだし」

「啓のことだからさあ、ハハッ」

あたしは『けい』を漢字に変換できなかった。

『啓』じゃなくて『刑』かと思った・・・(笑)

カバンから教科書・ノートなどを取り出すと机の中に押し込んだ。

「陸・・・だっけ??」

「え?」

隣の席でニコニコ笑う北島はさっきの笑顔と違った。

「たしか6年の時同じクラスだったよね?1年になって何組だったの?」

次々とする質問攻めはあたしは大の苦手だった。しかも男子と喋るなんて・・・。

あたしの目は回っていた・・・。

「海、やめとけて。そいつ困ってんじゃん」

その“刑”・・・じゃなかった。“啓”は止めた。

「あれ？今日お前らしくないじゃん。女の子と喋らないの？」

その言葉は“啓”はかわした。

「まつ、いつか……。そういやお前委員会何にすんの？一緒ならうよお」

北島は“啓”の肩をゆする。

「俺は……。1番楽しいやつかなあ……。」

ひじをつき、あくびをする。

1番楽なやつ？？じゃあ学級委員には無縁だね！……。じゃなくて！！あたし何で学級委員のこと考えてんのよ！あたしだって無縁なのに……。でも……。

「やってみようかな……。」

「は？」

あたしの突然の独り言に北島と“啓”はびびったらしい。疑問の目であたしを見ている。

それにあたしは気づいたけど何も言えないので顔をそらした。

そうこうしているうちにぞろぞろクラスの人間が教室に入ってきて授業が始まった。

1時間目の数学は気が重かった。理数で理科は得意なんだけど数学は苦手……。

最初の真新しいノートは、黒板の文字だけしかうつさなかった。

2時間目は、委員会決め。担任の春野 由香里という女の担任が黒板の前に立った。

『学級委員』『体育委員』『学習委員』……それぞれの委員会
が書かれる。

「ではまずは学級委員から決めましょうね……立候補から聞こうかしら？」

教室で手が上がる気配はない。こういう時1人で上げるのはなおさら勇気がいる。

あたしは拳を机の下で振り上げ右手を大きく上げた。

「あああ、あたし、学級委員やりたいですー!!」

前が見えないほど目を固くつぶっていた。ゆっくりと目を開くとクラスの見線は半分あたしにあり、もう半分は……“あいつ”にあった。

「俺、学級委員します」

右手をだるそうに上げながら答えた。

「え……」

あたしは混乱した。

第3話＊女たらし

「俺、学級委員します」

“あいつ”は右手をだるそうに上げて答えた。

あたしは右手の力が抜け、すっかり机に落ちてしまった。
クラス、先生も驚いている。

「他に立候補はいませんか？」

先生はクラスを見回す。

手を上げようとする生徒はいない。

先生も諦めたようだった。

「川崎くん、学級委員頼んでもいいですか？」

先生は笑顔で聞く。

「大丈夫です。まかせてください」

余裕の表情で手をひらひらさせて答える。

勢いにまかせすぎてつい席を立ってしまっていたあたしを先生は見
た。

「神崎さん、座ってていいですよ」

先生の笑顔に言われると、足の力が一気に抜け、イスに一直線に座
り込んだ。

あ……あたし、学級委員立候補したんだよね？？
でも……何で“あいつ”も立候補なの！？

朝は楽な仕事がいいって言うてたのに！！学級委員メツチャ大変じやん！

ええ……やだよお、こんな人と学級委員やるなんて。誰か他手え上げてくれないかな？

「———でいいですか？神崎さん」

「えっ？」

あたしが頭の中でマイナス思考しているうちに先生があたしに問いかけることを話していたようだ。でもあたしは全く聞いていなかったが……。

「あ、はい」

こう答えるしかなかった。『聞いていませんでした』なんてとても言えない……。

「じゃあ学級委員は“川崎くん”と“神崎さん”に決まりですね」

へ？

先生は『学級委員』という欄にあたしの名前と“あいつ”の名前を書く。

あたしはようやく気づいた。

『川崎くんと、この1年間学級委員でいいですか？神崎さん』
って聞いたんだ・・・たしか。

あたしのマイナス思考がどんどんマイナスの方向に加速して進んでいく間に、その他の人は自分になりたい専門委員に立候補して・・・

キンコンカンコン・・・

授業が終わりました（泣）

休憩時間になると、あたしは真奈美のもとに飛んでいった。
そしてついさっきの時間のことを話した。

「学級委員すごいじゃん。・・・でも、唯一男嫌いの陸が川崎と・・・」

真奈美はうつむいて黙り込んだ。

「え？やっぱ問題でもあるの？」

あたしはますます学級委員なんか立候補したことに後悔を感じた。

「川崎ってね、学年1の『たらし』なんだよ？」

『たらし』？？いや、『たらし』か？？

「陸、あんた分かってないでしょ・・・『たらし』＝『女好き』ってわけ」

『女好き』って……。女の子好き？

……。『女たらし』??

「あんたたちは対照的なのよ。女好きと男嫌い。陸には耐え難いことだと思うけどなんかこれで陸の男嫌いが川崎のよって治りそうだから面白いと思うけど」

ええ！？……。それは……。

キンコーンカーンコーン……

休み時間終わりのチャイムが鳴った。

「じゃあ後は頑張って、陸」

真奈美は廊下から教室へと笑顔で帰っていった。

あたしは廊下に取り残されてしまったが、諦めて教室へ戻った。

説明し忘れましたがあたしの左斜め後ろは“あいつ”の席です。

あたしが席に座ると、後ろの席からゴトツと席をはずす音が聞こえた。

「おい」

このひと言にあたしの心臓は一気に縮まった。

すぐ隣から聞こえてきたので、びくびくしながら顔を上げた。
すると、目の前にはプリントの束。

「は・・・はひ？」

「これに各専門委員の名前書けてさ」

体育委員やら学習委員の細かい欄に専門委員の部長を書いた。

あたしの字は自分じゃ言わないけど綺麗なほう。

丸っぽくもなく、角ばってもいない国語の教科書のような字。

突然、右肩に重みを感じた。

おそるおそる右肩を見る。そこには心靈写真に写っていそうな置き方で、大きな手があった。

「神埼・・・だっけ？何度も呼んでんのにシカトすんなよ！」

眉を逆のハの字に上げながら肩に置いている手の力を強くする。

男子だけあって少し痛いとも思ったが、あたしには重みしか感じなかった。

重みしか感じなくても今あたしの肩の上に乗っているのは“男子”の手。

男嫌いのあたしには痛み以上の大ダメージだ。

置いてある手から、猫のように肌を逆立てさせて、体全体に広がった。

「お前・・・震えてんの？」

川崎は顔を少しゆるめて言うが、あたしには答えることができない。いつのまにか喋ることすら困難になった。

あたしの頬には冷や汗が伝った。あたしの視線は鋭く川崎の手に集中している。

「あ……悪い……」

川崎はやつと手を放した。

あたしは解放されたかのように1つ、大きなため息をついた。

「お前全然喋らないじゃん、朝と大違い……」

川崎の目はあたしを見つめる。

男子と目を合わせるなんてもつてのほか！！絶えられない！

「まさか、男嫌いとか？」

川崎は冗談で聞いたつもりだった。

でもそれも違った。あたしは川崎を横目で見ながら大きく首を縦に振った。

川崎の目は一瞬で丸くなった。

「へーえ、おもしろいじゃんあんた。やっぱこの1年間楽しくなりそう」

え？

すると、川崎は何をしたか？あたしも一瞬理解できなかった。

「あれ？反応しないの？ならもう1回やってあげようか？」

何のことか理解ができなかったが、あたしが答える前に川崎は行動に出た。

CHUッ。

この効果音が似合う行動はあたしにとってもっとも刺激的で未体験のものだった。

やわらかい感触で、この効果音が聞こえてきたのは額だった。頭ならまだましも、額となると顔が近すぎて倒れそうになった。

「1年間、ヨロシクなッ」

スキップするような言い方で、川崎はあたしの額をポンツとたたいた。

あたしはこの反応が脳にいくまでに時間がかかった。

額を押さえて自分の席へ帰っていった川崎を見つめていた。

ようやく、川崎のしたことが分かった。

でこチュー……。

あたしの顔は熱くなり、恥ずかしさが溢れ出てきた。

「いっせー」

「!」

普段のあたしからは想像できない声が、教室中に響かせた。

番外編 1 * 男たちの会話（前書き）

少し本編とは見方をずらしてみました。まあ続いてもいるんですけど・・・海と啓の陸に対しての会話ですね。

番外編1*男たちの会話

その日の5時間目の授業になると、あたしの疲労はピークに達していた。

川崎のでこチューの後の叫びで体力の50%は使い果たしてしまった。まだ川崎の唇の感触が額に残っている。あのやわらかさ、ぬくもりが・・・。

つて、これじゃあたし変態みたいじゃん！！でこチューなんて嫌に決まってんじゃない！

「啓〱陸ちゃん俺狙ってたのに学級委員なんて一緒にやるなよなあ！」

放課後の誰もいなくなった教室では正反対の体格の2人がいた。

「海・・・狙ってたのかよ」

背が高い啓、背の低い海。この2人が並んでいると兄弟にも見える。机の上に座ると、座高の違いがすぐ分かる。

「大体さあ、啓は楽な仕事とるっていつてたじゃん。それとも啓も陸ちゃん狙い??？」

海の顔には合っている無邪気な笑顔が啓の心をついた。

「まさか、言つたろ？あんなお子ちゃま俺は本気じゃねえよ」

眉をゆがめて口の端をつりあげ、余裕の表情で答える。

「やっぱ、啓はルックスがいいからな。『たらし』にもぴったりだよ」

「『たらし』って言われんのは嫌いじゃないけど・・・男から言われんのは嫌」

「俺も啓みたいになろっかなあ」『たらし』

「バアゝ力、お前はまず身長伸ばせ！」

啓は海の頭をポンツとなでる。

「ほら、部活行くぞ」

「おう！」

2人は共にバスケットシューズとマイボール、カバンを持ち、体育館へと向かった。

音の違う足音だけが、誰もいない放課後の廊下に響いた。

第4話＊ストレス＆川崎

あたしの体の中には少しずつストレスがたまっていた。

時間がたつていくうちに体が鉛のような重さになってきた。

肩にダンベルでも乗せてる感じ・・・。

体だけでない。頭もバットで殴られたみたいにガンガン痛む。

このストレスの原因・・・それは、

『女たらし』川崎 刑。・・・じゃなかった、川崎 啓だ。

昨日あいつと学級委員になった時からあたしの男嫌いの症状が出まくっている。

これ以上あたしが“あいつ”と関わるとあたしの体と精神が危険だ・・・。

特に今日の朝はだるい。頭痛と鉛の重さの症状が顔にもう出ている。

「ちよつとお陸、大丈夫なの？ 顔色悪いって・・・」

真奈美は心配してくれるがあたしの耳には聞こえていない。

あたしはただひたすら長い長い通学路を歩いていくだけだった。

あたしの歩き方は周りから見たらクリヨン人だったという。

その長い長い・・・道のりを歩ききり、ようやく学校のくつ箱にいた。

よく考えたら今日あたし声を発していません・・・真奈美とも喋らなかったな・・・。

上履きを床に丁寧に置くあたしに対して・・・

ボスッ。

変わらぬ音で“あいつ”はあたしの隣で床に上履きをたたきつける。

また“あいつ”か・・・。

あたしは心の奥底では分かっていたが、ストレスのため、体が勝手に動く。

あたしは首を動かし、横目で“あいつ”を見た。

すると、“あいつ”はあたしの視線に気づいたのか、眠そうな目をあたしに向けた。

目が合った瞬間あたしは反射的に目をそらした。

「おはようさん、男嫌い」

耳元で聞こえる音量であたしの横を通り過ぎ、教室へ向かっていった。

また1つ・・・ストレスが、増加した。

昨日と同じように静かな教室に入ると誰もいない。

あれ・・・川崎教室にいなかったのかな・・・？

なんでいないの??

あたしは疑問に思いながらも自分の机へと席ついた。
その時、

ガラッ。

教室のドアが開き、入ってきたのは北島だった。

「あれ?陸ちゃんもう来てたの?啓はどこいった?」

突然の北島の質問は首を縦か横に振るだけじゃ答えにならなかった
のであたしはあせった。

「ま、無理させないほうがいいね。男嫌いだし」

北島・・・あたしが男嫌いつて分かってたんだ・・・。

「じゃー俺とも喋るの嫌でしょ?首振るだけでいいからさ」

「・・・・・・・・」

「啓にでこチューされた時、嫌だった?」

あたしはおそろおそろ上目使いでゆっくり首を縦に振った。

「あいつも超女つたらしだからなあーいろんな女子に手え出すもん
ね。陸ちゃんまで手えだすとか・・・。これから、“あいつ”と学
級委員やってける?」

首は縦に振ろうとしたが、迷いがあつた。

本当に・・・大丈夫なのかな・・・？

対照的なあたしたちが男女共同作業できの・・・？

ガラッ。

「あ、啓。どこ行ってたんだよ」

「わり、職員室にプリント取りに行つてたんだ」

そう言つて北島に大量のプリントを見せる。

「ほい、お前の分。配つとけよ」

川崎が差し出すプリントをあたしは震える手で受け取つた。

が、

あたしがプリントと川崎の手を引き離そうとしても離れない。
川崎は力任せに何故かプリントにしがみついている。

「！？」

あたしははっと顔を上げて川崎を疑問の目で見た。
これ以上あたしが引く張るとプリントが破れてしまう。

それでもあたしは負けずにプリントを離さなかった。

その時、手に暖かいものが触れた。

やわらかい感触だったのでまさか・・・とは思ったが、見てみると鳥肌が立った。

「――！！？」

手には手が、川崎の手が重なっていた。

あたしはこのいきなりの困難に体が反射しなかった。
手をほどこうとしても川崎の手は動かない。

「お前、男と手えつないだこともねえの？」

川崎がやっと口を開いた。

「う・・・う・・・うん」

あたしの言葉もやっと出た。

「さすが男嫌い」

『さすが』の意味が分からなかった・・・。いい意味なの??

「その『男嫌い』、俺が治してやるよ」

・・・は？

あたしの口はあんぐりと開き、手が重なっているのも忘れてしまっ

た。

「えー！啓陸ちゃんの男嫌い治しちゃうの？？」

「この『男嫌い』治さなきゃ一生男と付き合えないぜ？もちろんお前とも」

これは陸に聞こえないように海の耳元で言った。

「そうちゃん！！」

あたしの『男嫌い』治すって・・・

「俺に任せとけて、陸」

CHUッ

次は身に覚えのある感触が、頬に來た。

3秒後、あたしの背筋には冷たいものがはしった。

ほっぺにチュー・・・。

「あれ？反応なし？コレは最初からいけるんじゃない？？」
「のほほでもない。」

「うっ
きゃ

「！！」

あたしの叫びが教室・・・いや、学年中に響きわたった。

こんなやつが、あたしの『男嫌い』なんて治せるの？！

第5話＊陸ちゃんぶっ倒れ！！

展開が信じられなかった・・・。

どこまでを夢と持ってくればいいだろう。

でこチューといい次はほっぺ・・・ありえない。

あたしは机にひじをついたままうわの空だった。

そんなあたしが先生に指されなかったことがありがたい。

「落とす為の作戦さあゝ」

昼休み。唯一あたしの心が落ち着く場所、図書室で真奈美と向かい
合わせて椅子に座った。

「落とす？どこに？」

「まあ鈍感だからいいけど・・・」

真奈美の言葉が理解できない。落とすって、落とし穴？？まさかあ
・・・。

「でも陸の男嫌い治してくれるんだ♪あいつも結構いいところあんじやん♪」

「でもあたしには迷惑なんだよぉ・・・」

あたしの不安とストレスは増大するのだ。迷惑しかない。

「ホント、あんた朝より顔色悪いよ。保健室行けば？」

「頭痛い・・・帰ったほうが楽かも」

あたしは頭をさするがもちろん痛みはやわらげられない。
鏡を持っていないから顔色は判断できないけど手の甲を見ると青白い。

川崎のことを話していても考えるほどの力がない。

「やばいつて陸・・・今すぐ保健室行っただほうがいいよ!」

「あたしはそうすぐばてるやつじゃあないよ・・・」

「いやいやばてるの問題じゃなくて・・・」

「・・・5時間目の理科まで我慢する」

あたしは椅子から立ち上がった。ちょっとふらつとしたけどそれほどダメージはない。

「陸理科好きだもんね・・・でも今日ぐらい我慢しろ!」

「ダメなの——。学級委員の仕事があるしそれに——」

あたしは後を言わずに図書室から出た。

教室に戻ると北島がいた。そうじの時間が近づいたため運動場から帰ってきたのか。サッカーでもして遊んだのだろう。ジャージには砂をたくさんつけていて、汗もあふれ出ていた。

北島の隣には川崎がいた。

「あ、陸ちゃん。もー俺のジャージ砂まみれ。陸ちゃんのジャージ貸してほしーなあ」

ゴンッ。

笑顔で言ってきた北島の後頭部を川崎はグーで殴った。

「こんな普通の女子でも貸さねえのにこんな『男嫌い』が貸すわけねえだろ！」

そう言っであたしをチラリと見る。

『男嫌い』で悪かったわね！！

あたしは言いたいことをこらえてジャージに着替えに行こうとしたが・・・

物が二重に見える。北島が2人いる・・・。

そう思った瞬間、あたしの目の前には教室の天井が現れ・・・真っ暗になった。

「陸ちゃん!!」

北島の声が聞こえたが応答できない……つか最初っからできないか……。

気がつくとも保健室にいた。

ベッドの周りには仕切りがあり、1人なので落ち着く。

保健室の何にもない天井を気が遠くなるような時間、見つめていた。

「神崎さん？」

ハッ。

その声の主は保健の先生の成田先生だった。

「ずいぶん無理したみたいねえ・・・顔真つ青だったわよ。でも今は・・・少しひいたわね」

あたしは頬を手のひらでさする。まだ冷たいけど・・・。

「教室には戻っちゃダメよ」また倒れて運ばれてくる運命よ」

「え・・・あたし、運ばれて来たんですか？」

「彼氏い??カッコ良かったじゃない」

「え・・・どんな・・・」

先生はもう後を聞かず、薬品の整理をし始めた。

「コラ!まだ寝てないとまたぶっ倒れるわよ!」

「・・・ハッイ」

彼氏じゃないんだから分かんないんだけどな・・・。

運んだの先生じゃなかったんだ・・・。

近くにいたのって川崎か北島だったよね?

でもあんな2人があたしなんか運んでくれるのかなあ?

お礼・・・言いたいな。

『ありがとう……っで。』

第6話＊心のお礼

気がつくといつの間にか眠っていた。

体を起こすとまだだるい。

カーテンの仕切りはそのままきっちり閉まっていた。

カーテンを開けると保健室には誰もいなく、あたし1人だけだった。頭の痛みはもうとつくにひいた。でもまだちょっとガンガンするかも・・・。

あたしはブーツとしてまた保健室の天井を見つめた。

ガラッ。

「！！」

あたしはびっくりして布団を頭までかぶった。

コツコツコツ・・・・・・・・。。

耳を澄ませて床に響く足音を聞く。

先生が履いているようなスリッパの音ではない。生徒が履いているシューズの音だ。

その足音はだんだんあたしの方へ近づいてきて・・・止まった。

飛び出そうなほど動いているあたしの心臓。

シャ——・・・。

あたしの隣の仕切りのカーテンが開いた。
あたしはまぶたを固く閉じる。

「寝てるのか——・・・」

この声にあたしは布団の中でパツチリと目を覚ましてしまった。

この低い声・・・まさか・・・。

その声の主は仕切りのカーテンを閉めた。

あたしはようやく暑苦しい布団の中から顔を出すことができた。
が、

シャ——・・・。

再び仕切りのカーテンが開いた。

「!—」

あたしも再びあわてて布団をかぶった。
あたしの横で立っている人は、あたしの頭に手を伸ばしてきてさす
った。

そして―――耳元で声が聞こえた。

「こんななるまで頑張んなよ。あとは俺に任せとけて」

その言葉に息が詰まりそうになった。男嫌いの症状が表れ始めている。
体が少し震えてきている。

「寝ていても『男嫌い』はあるんだな。大丈夫、俺が治してやるから」

声の主はあたしの頭をポンポンツと軽くたたくとカーテンの仕切りを閉めて、保健室から出て行った。

急いでベッドから起き上がった。

頭の痛みもない。ガンガンもしない。

時計を見ると3時10分。さっき5時間目が終わった後だった。

あたしは教室に戻ろうとした。

でも・・・あの声って本当に・・・。

あたしを運んでくれた人って・・・。

保健室から教室までの道のりは、いつもと違って長かった。眠った後の校舎は初めて来た学校風景だ。

途中左右の壁にぶつかりながらもようやく教室のドア前に辿り着いた。

あたしが教室に静かに入ると誰も反応しない。
帰る準備をする人でいっぱいだった。
でも“あいつ”は違った。

「やっと帰ってきたの？寝ばすけさん」

斜め右後ろには川崎がひじをついてニッコリしていた。

あたしは小さくうなずいた。

「啓！！さっきどこ行ってたんだよ！！」

横からはいきなり北島が川崎に飛び込んだ。

「トイレ行くなら俺も一緒行ったのに！！！！」

北島は頬を膨らます。

「トイレじゃねえよ・・・ちょっと遠出してきた」

「遠出・・・？」

川崎はあたしと目が合うと笑った。

「重かったぞ！お前！」

あの声・・・やっぱり。

男子の前ではめったに笑顔を見せなかったあたしも笑った。
急に元気が出てきたから。

ストレスなんてどうでもいい。なんかスッキリした。

——あたしは笑顔でお礼を言った。

——言葉じゃ言えないから、心の中で小さく。

ありがとう。

運んできてくれてありがとう。

心配してくれてありがとう。

『男嫌い』、治してくれる？

……川崎

——ありがとう。

第7話＊心の動き

「あ．．．あり???ペンケースがない．．．」

新学期が始まって2週間目。

あたしの愛用のペンケースが無くなりました。

ピンクに白の水玉模様。チャック式。中1からのお気に入り。机の中を探ると固い教科書の感触しか手の甲に残らなかった。

「1時間目英語なのにいゝ．．．」

あたしは半泣き。英語はもっとも多くのシャー芯を消費する。

幸いだったら教科書の発音練習だけで済むが昨日発音練習をしたばかり。

今日は書き取りだ．．．．．最悪。

こんな時に限って．．．。

しかも次は美術でデッサン。その次は数学で計算問題。改めて、今日の時間割最悪．．．。

「陸さん．．．どうしたんですか?」

カバンの中を探したあげく、机の下にもぐりこんでまでペンケースを探しているあたしに声をかけてきたのは．．．あたしのすぐ後ろ

の席で“あいつ”の隣、倉木 夏海だった。

夏海は小学校5年生のころからクラスが一緒。でも夏海はあたしと一緒に男子とはあまり会話を交わさず、さらに女子にまでなので、あんまりまともに会話を交わしたことがない。

「あはは・・・ペンケース忘れちゃったみたいで・・・今日結構使うのにさあ・・・」

あたしが答えると夏海は自分の席に戻りペンケースを探った。

「あたしのシャープペン貸してあげます・・・」

右手でパンパンのペンケースの中を探りながら答えるが・・・

「あ、見つかりました。・・・あ」

夏海のお然とした顔を見てあたしは不安を感じた。

「え？夏海？どした・・・」

あたしの予感は的中した。

「あたし、これだけしか持っていないんです・・・」

夏海のがっかりした表情。色白で栗色の髪をしたそんな表情は可愛い・・・。

でも大問題！夏海が持っていないなら他に声かける人なんていない！あたしは周りをキョロキョロ見回した。

その時、あたしの目にはふと“あいつ”が止まった。

って、何で“あいつ”なの！？あたしが男子に借りられるわけないじゃん！！

『男嫌い』なのに・・・。

昨日の“あいつ”のことから頭が離れない。

“あいつ”があたしの体に触れた――

男子とも会話も交わせないあたしの体にあいつが――

記憶は覚えてない。でも、温もりがこの腕に残ってる。

あたし・・・“あいつ”の・・・

「陸さん!!」

ハッ!!

あたし何自分の世界に行つて・・・てかもう1時間目始まつちゃう！
あたしはもう我を忘れて床にシャープペンの落し物がないか必死に
探した。

すると突然だった。

カチャンッ。

あたしの目の前にはピンクのシャープペンが落ちてきた。

「!!」

あたしはとっさに顔を上げた。

そこにはひじをついて目であたしを見下ろしている“あいつ”、川崎 啓がいた。

「それ・・・使えば？」

ご丁寧にシャープペンには一緒に消しゴムと定規、赤ペンがゴムでくくりつけられていた。

「・・・！」

「・・・何？使わないの？」

両手で“それ”を持ってひざついて黙っていたわたしに“あいつ”は手を伸ばしてきた。

「つ・・・使うよ」

あたしは自分にも聞こえないくらいの小さな声で答え、首を横に振った。

キンコンカンコン・・・。

ギリギリ・・・セーフ。

英語の時間は予想通り単語の書き取り。

美術は飽きるというほどの時間でデッサン。

数学は頭が痛くなるほどの計算問題だった。

ようやく4時間目の体育になって更衣室に着替えに行こうとしたと

きは肩の荷がおりていた。

「あれ？陸ちゃん体育やって大丈夫？」

「うん、もう体調は大丈夫だし——・・・！！」

今あたしは誰と話していましたか？

「うつわあゝ！初めて陸ちゃんと会話しちゃった！」

『感動』という言葉を背中に背負って目を輝かせていた・・・北島。

「！！！」

あたしはとつさに口を押さえた。

「これからももっと話そうよぉ??？」

あたしはちよつと距離をおいて大きく何も言わず大きくうなずき・・・逃げた。

「あゝあ、いつちゃった」

北島は残念そうに頬を膨らます。川崎はそれを眺めていた。

「・・・バカ？」

体育は飛び箱。あたしは運動神経はいい方なんだ！

マットでもバスケ・バレーでもこいつて感じ！！

でも・・・長距離走は苦手・・・。

昔体操教室に通ってたから飛び箱の8段までは飛べてたんだ。

でも、それも小学2年生までのお話。

今は体が忘れてます・・・。

1・2・3組の体育は合同だ。

だから真奈美とも一緒♪

「あゝ陸飛び箱昔得意だったよね。何段飛ぶ???5ゝ8まであるけど」

あたしは迷う・・・迷いに迷った。

「6段いくか」

あたしは6段を飛ぶ人の最後尾に並んだ。

「あつれえゝ陸ちゃん6段なんて飛べんの?意外だね」

お前が陸ちゃんって言っな!

あたしの次に並んできたのは川崎だった。

「運動神経は結構いいって聞いてるけど」

「あ・・・あたしだって・・・」

「ん？何？聞こえない」

「あたしだってこんくらいチョロイわよ！」

自分でも何を言ってるのか分からなかった。

それで前がいなくなったからあたしは走り出した。

そして軽がると・・・6段を飛んだ。

「へえー意外とかつこいいじゃん」

川崎は陸の姿に感心して見ていた。

「じゃあ俺もいつちよ行つとくか――」

あたしは川崎の飛び姿を見ていた。

縦向きの飛び箱の前方に手について、足を広げる――と思ったが、

川崎は後頭部を手の間についた。

「え？」

川崎はそのまま倒立した。

そして腹筋を使ったのか、体をすぐ弧の字に曲げ、マットに着地した。

「おお――！！！」

川崎を見ていた人々から歓声が聞こえた。

その中には拍手も・・・。

川崎は余裕の表情で鼻を鳴らしている。

『えー？川崎ただのたらしかと思ったけどかつこいいところあるじゃ
〜ん』

周りの女子は関心。男子はちょっと悔しそうな顔。
でも・・・

「こらあ〜！！川崎！誰がそんなこと指示したあ！？開脚だけって
いったろお！」

先生の怒鳴り声。

「俺開脚なんて楽勝なんですもん。しかもださいし」

川崎は余裕でかわす。

先生は川崎には何も言わなかった。

多分自分が川崎がやったこと手本にできないからだと思っけど・・・。

「どうだったあ〜？？俺のかっこいい飛び方」

得意げの川崎の顔はイタズラ大好きのカキンチョにも見えてきた。

「まあ・・・いいんじゃない？」

あたしはあいまいに答えた。それでも頑張った方。

「何それ〜？？喋れんならもつとハッキリ言ってよ〜」

「ハッキリッて・・・??」

「かつこいいとか」

・・・バカかこいつは。ホント、噂通りナルシスト。噂ってスゴ・
。。。

「・・・・・・・・」

「まあゝた黙ったあ。つとに『男嫌い』だなあ」

あきれた声で川崎は笑顔で言つて、どこかの列へ消えた。

まあ・・・消えたといつても他の列でまた会ったけど・・・。

でも・・・ただのかつこつけかと思つてたけど意外とかつこ良かった・・・。

しかも男子と話したのつて久しぶり・・・。

しかも“あいつ”つて・・・。

なんかあたし、あいつと話すの・・・嫌じゃないかも。

戸惑う時もあうかもしれない。でも、なんかいろいろ知りたい。

てかさあ・・・

あたしあの・・・保健室の日あたりから・・・

あたし・・・なんか最近おかしくない???

第7話＊心の動き（後書き）

感想・評価くださったら嬉しいです。今後の執筆の頑張りに、つなげられます。

第8話＊メールのお誘い

あたし最近ヘンかなあ・・・。

川崎のこと知りたいって・・・あたし何言っただか・・・。

「陸・・・なんかおかしいね。口説かれるよ」

「いや、そういう意味じゃなくて」

「反対はしないよ。でもヘンなとこまでいっても知らないよ」

「ヘンって・・・あたしがそんな口説かれるはずないじゃん。男嫌いだし」

「それを治すって川崎が言ってるんだよ。意味ないじゃん」

「あ・・・」

「ま、陸が否定しないのも珍しいけど・・・いつか」

真奈美は物珍しそうな目であたしを見て、教室へ入っていった。これが朝の登校時、あたしたちの会話だった。

教室に入ると予想したとおり、てかいつも通り、教室には川崎と北島がいた。

「啓！昨日メール送つといたのに何で返してくんねえのお??」

北島は川崎の机に手を置いて、必死に訴えかけていた。

「きの・・・ああ、だって女子5人とやってたから。女子優先」

「そりゃゝないだろ啓・・・。俺時間割聞いたんだぜえ？俺のが優先だろお??」

「ゴメンさあ。でもさすがに5+1は厳しかったんだって。疲れたし」

「じゃゝメールすんなよ！」

まあ川崎らしいね女子5人って・・・あたしでもないよそんな人数。

「お、陸ちゃんおはよう」

毎朝変わらない笑顔で北島はあいさつしてくる。

「・・・あ、おはよ」

あいまいなあいさつはこれでもあたしは慣れてきたという証拠。
前まではうなずくまでで済ませていた。

「なんかだんだん慣れてきたんじゃない??もつと話そうよ」

あたしはすぐに首を縦に振れない・・・。

「じゃ〜メールは??」

「お、それいいんじゃない?」

川崎も賛成意見。

え?メール??あたし男子とやった事な・・・

「じゃ〜紙書くからあ、陸ちゃんシャープペン貸してえ」

小さな手のひらをひらひらさせて言うのでしかたなく筆箱からシャープペンを出そうとした。

「あ・・・」

小声で言うから聞こえないが筆箱には昨日川崎に借りたままのシャープペンが入っていた。

そっぴや借りたまんまだったんだ・・・返すの忘れてた。

あたしは別のシャープペンを出して北島に渡した。

「ありがとう」

北島は究極のスマイルでノートの端にアルファベットを書き始めた。

「あー、俺も書くー！」

川崎がわりこむ。

「ハイ」

渡されたのはノートの端。それに無数のアルファベットが書いてあった。

「じゃあヨロシクね」

川崎が言う。

「え・・・え・・・」

あたしは焦った。

「ん？どうした？」

北島は心配そうに聞いてくる。

「あ・・・いや、あたしから送るのかなあ・・・って・・・」

川崎と北島は顔を合わせた。・・・考え中。

「じゃー俺にはお前から送ってよ」

川崎がねだる。

「陸ちゃんには俺から送るから安心して」

やっぱメールすんのお・・・??

「ん？お前、そんなに俺たちとメールするの嫌か？」

あたしの心の不満に川崎は気づいたご様子。

「え？そうなの??」

あわてて北島も聞いてくる。

「いや・・・そういうわけでも・・・」

あたしのあいまいな返事。

「んだよ」ハッキリしろよなあ。そんなだから『男嫌い』が治んねえんだよ！」

川崎のとどめの一発。

まいりました・・・。

「分かった。メール・・・するよ」

「じゃー陸ちゃんのメアド教えて」

あたしは仕方なくメモ帳に長々とした自分のメアドを書いた。

「とーぜん『男嫌い』を治してもらったからなあ。当たり前だろ」

いつあたし『男嫌い』治してって言ったっけ・・・??

これはもうあたしは完全な『男嫌い』と言えないのでは・・・??

「じゃー今日もこれでおひらきってコトでまた今日の夜だなあ」

今日もってこの前はいつ集会したんだよ。

あたしは自分の席についた。席についても近くだからあんま意味ないけど・・・川崎は近い。

あとから登校してくる人も来て、授業が始まった。

授業中うわの空のあたし。

今日の夜がちょっと楽しみ・・・。

いやいや・・・なんで楽しみになるんだよ・・・。

この頃あたしおかしいからな・・・川崎のことで

今日はどうすればいいんだろう、あたし。

第9話＊男子との初 メール

その日の夜、あたしは北島からのメールを待っていた。

川崎には送らないのかって？？北島からメール来てからにする予定・
・。。

でもどんな会話すればいいんだろう・・・。

♪♪♪

メールの着信音が鳴った。

見たことのないアルファベット・・・北島からかな？

あたしは受信ボックスでメールを開いてみた。

が、それは・・・

『件名：川崎です。』

本文：お前からのメールが遅いから待ちくたびれて海から聞いたから、メアド。』

え？？か、川崎？？

時計を見てみると10時を回っていた。

「やばっ、こんなに待ってたんだあたし！」

あたしは急いで返事を返す。

『件名：遅れてすみません！』

本文：北島からのメールが来たら送ろうと思ってた。ゴメン――。
――。』

顔文字なんて入れたらヘンかな・・・？メールでギャップ変わるって思われるかもね。

でもあたしは消さなかった。なんか気持ち伝わりそう。そしたら2分もたないうちに着信音が鳴った。はやっ！！

『件名：』

本文：ったく・・・そんなだから『男嫌い』なおんねえくんだぞ！あ、ちなみに海は今日メール送れないくらい疲れてて塾だったから悪いけど寝るってさ』

『本文：うん分かった。』

『本文：おう』

・・・。

会話が続かない。もう途切れちゃったよ。

『本文：話題、途切れたね』

話題出してくれるかなあゝ??

『本文：じゃあ何かある?』

『本文：・・・ナイ』

完全に話題が途切れたよ・・・。

『本文：お前さ、何で学級委員なんかになった?』

話題が出てホツとしたがこれには答えずらい・・・。

『本文：自分を・・・変えるため』

『本文：変えるためえ??ヘンなやつ(・3・)』

この絵文字にはあたしは噴出した。

川崎がこんな顔してたらおかしいっ。

『本文：そういえば・・・川崎はどうなの?』

頭にはコレしか返す言葉がなかった。

でもどうせ、『やってたら特でもするんじゃない??』ってきそつ。

今まではやかった川崎の返事が少し遅れてきた。

『件名：お前となると楽しそうだったから』

・・・へ？

『楽しそう』ってどういう意味？
あの初日のモツプのこと？

『本文：あゝあれはドジッただけだよ』

でも返事は、

『本文：ふゝん、あのモツプがなくともお前と学級委員しなかったかもね』

え？

それ、どういう意味？

あたしはそれを、川崎に聞きたかった。

第10話＊恋の予感？？

あたしはあのまま川崎とのメールを終えた。
今思うと夢のようだった。

あの川崎の言葉が頭に叩き付けられて残っていて離れない。

『モップのことがなくてもお前と学級委員したかったかもね』

何？？『したかった』？？それはどういう意味なん？

なんか、言われた瞬間ヘンな気持ちになって離れんやん。

ホント、最近あたしおかしいよ。川崎に対して？？

「おはようさん、男嫌い」

教室に入ると川崎のいつもと変わらぬ言葉が待っていた。

「・・・はよ」

話しかけられただけで、あたしの胸が締め付けられた。

「おはよー！陸ちゃん！」

北島のあいさつ。

「あ、おはよ」

普通に答えられる。

「昨日はゴメンネ陸ちゃん。ムツチャ俺疲れてたから・・・」

北島は手のひらを合わせて申し訳なさそうな顔で言う。

「あ・・・いいいいいよ」

何この気持ち？北島にはないのに川崎に・・・。

川崎が話しかけてくると胸がキュンと鳴って、ほかの女子と楽しそうに喋っていると胸は締め付けられるように痛い。

またあたし病気かな・・・『川崎病』??（笑）
そんな病気があるのだろうか・・・。無いと思うけど。

どうか悪いのかなあたし・・・何で目が勝手に川崎ばっかを追うんだろ??

「お前だいぶん慣れてきたんだな」

川崎の一言。

「は？」

あたしは何のことはさっぱり。

「ほら、今だって。前は首振って目えそらすだけで精一杯だったろ？」

「・・・・・・・・」

えっと・・・何言ってるんだろ・・・??

「やっぱ俺のおかげか？『男嫌い』薄くなってきたの！」

川崎は親指を突き立て自分に刺す。

「はぁ・・・」

あたしは混乱しながらも答えた。

すると川崎の肩越しに北島の頭が出てきた。

「えー?? 陸ちゃん『男嫌い』 治しちゃうの?? 俺そのまんがかわいくていいのに」

かつ・・・かわいい?!

男の子でも普通女子にそんなこと言えるの??

「海、お前は黙ってるよ」

川崎は北島に耳打ちした。

「啓ばつかずるい! 俺も陸ちゃんと話したい!」

「お前は素直でいくな」

何に羨ましがってるか分からないが、川崎のその言い方は棒読みだった。

「何かこいつの『男嫌い』 って珍しくて治すにも何かやりがいありそゝだからさあ、学級委員立候補しててよかったかもなあ」

川崎は笑いながら言う。

そうか・・・別にあたしに気があったわけじゃなかったんだね・・・。

『モップのことがなくともお前と学級委員したかったかもね』

そうだよね・・・そうだよ。『たらし』だもん、思わせぶりなメルは基本か。

あたしのさっきまで上がっていた肩は、一気に下へ落ちた。

つて、別にガツカリすることもないじゃん！

川崎が自分に向かってきたら嬉しくって、他の女子のところへ行ったら悲しいの。

そんな気持ちって・・・もしかして??

第11話＊『スキ』を知った

「恋だねそれは」

図書室で勉強してたつもりが、真奈美の言葉によってラブトークへと変わる。

「やっただあゝ何い？恋って、誰に??」

あたしは笑いながらシャーペンの先っちょを真奈美に向けた。

「さあ・・・その様子じゃ啓じゃないの?」

真奈美はしらつと答える。

「え？啓つて川崎！？てか『じゃないの』って真奈美自分のことでしょ？？」

「あたしはあいつなんか嫌いだよ。あんただよ、陸」

今度は真奈美が分厚い本の角であたしを指してきた。

「は？」

あたしは混乱状態。

「あんたが“あいつ”のこと好きじゃないの？って言うてんの！」

真奈美はほんの角で机をたたいた。

「っは、あたしが？！『男嫌い』の・・・あたしが？？」

あたしは眉をゆがめながら笑った。

「じゃゝあ何なのよ！そのノートは！！」

真奈美はあたしが目の前に広げていたノートをびしっと指差した。

「何よノートって・・・！！！」

あまりのすごさに驚いた。

線ばかりの大学ノートにかわいらしくハートのマークがたくさん書かれていた。

「うわっ！何このノート！？気持ち悪っ！！」

あたしはノートを手で払った。

「その気持ち悪いノートを作ったのはお前だろーが！意識もつろくに書いてたんでしょ！頭の中のことそのまんま書いてんだよ！」

え・・・？あたしの頭の中あ？

「あんたが好きになるとしたら、おそばにいる学級委員の川崎刑、じゃなくて啓しかいないでしょ！！」

真奈美のとどめの一発。

「え、でも・・・あいつのことなんて全く知らないし、好きになっただとしてもどこを好きになったか・・・」

「チツチツチ」

真奈美は舌打ちをしながら人差し指を立てて左右に振った。

「陸・・・あんたには人を好きになる理由なんて知らなくていいんだよ。そのうっとおしい『男嫌い』が治ってくれたら」

両手をあたしの肩に置いて顔を近づけてくるだけで怖い。しかも笑顔なのでなおさら。

——人を好きになる理由なんていない。

あたしにはもったときっかけとかあって好きになるって思ってたけどな。

あたし、本当に“あいつ”のこと好きなのかな？

——でも、嫌いじゃない。

教室に戻るとグラウンドでサッカーを終えてきた川崎たちがいた。川崎と目が合うとすぐにそらす。

『スキ』を知ってからなんかあたしきこちない。

「おい」

川崎の呼ぶ声。

あたしはさつと振り返った。
でも……
目が合わせられなかった。

「……神崎？どうした？」

昨日と今のあたしの反応の違いに川崎は気づいた。

「え……『男嫌い』、復活？？」

あたしは何も答えない。

「まあ……治ってたわけじゃねえけどな……」

川崎は肩を落とす。

——違うの。

「まあ時間はまだまだあるさ」

——今のは『男嫌い』じゃないの……。

「そうだ、今日の専評会だけどさ——」

—— 顔が熱いよ、胸が苦しいよ。

—— 『スキ』ってこんなに苦しいことなの？

—— 『愛しい』ことなの？？

初めて人に『スキ』を知った。

しかも、こんな『たらし』に。

何が『スキ』なのか分からない。でも、なってしまった。

—— 川崎が・・・好きです。

第12話*大晦日の日に（前書き）

いきなり行事が飛んで12月になってしまいました・・・。

読者のみなさまには各行事のエピソードが気になる方もいらっしゃると思います。

ですが、各行事に関してのエピソードは、この物語の最終地点でご覧いただけます。

第12話を読んでくださって本当にありがとうございます。

第12話*大晦日の日に

あたしが『スキ』を持ち続けたのは、長かった。

歓迎遠足が終わり、体育大会もあって、夏休みが来て、終わった。

夏休みが終わるとすぐに合唱コンクール。

それでそのあとは修学旅行があつて――・・・・・・・・。

そこまであたしは、この気持ちを持ち続けることができた。

川崎との週でのメールの日にちも増えていた。

でも、あたしは『男嫌い』をまだ見せていた。

ソレが治ると、川崎はもうあたしに何もしてくれないから。

変におちよくられる時もあったけど、やっぱり『スキ』だから許しちゃう。

学校でもよく話すようになり、あたしも明るくなり友達が増えた。

1 番の友達 は 倉木夏海 だった。

しかも、女子からも、男子からも、あたしと“あいつ”は仲が
いいと見られていた。

北島も一緒だった。

あたしはこのまま時間が止まってもいい。そう思った。

今なら川崎に一番近いかもしれないんだ・・・。

「告れば？」

真奈美の軽そうな言葉はちょっとおいといた。

告白なんてして振られたら、あたしはまたただの『男嫌い』に
戻ってしまうかもしれない。

怖かった。

だから、そういうことは避けて、川崎の傍に
いることだけを考えていた。

冬休みに入って、大晦日前日の日だった。

『本文：好きな人って誰??』

それはある1通の文から始まった。

—— 30分前

『お前好きな奴とかいね?もう恋ぐらいできるんじゃない?』

『やだなあ。かつこいいっていう人はいるけどさ・・・』

『へ。かつこいいんだ』

『分かんない。でも・・・スキかも』

『好きな人って誰??』

これは何なんだろう。“好きな人が俺だったらいいな”？“へえ、応援してやるよ”？

『告れば？？』

真奈美の言葉がよみがえってきた。

これは・・・チャンスなの？？

告れっという、チャンスなの？？

『明日教えてあげるよ』

・・・送ってしまった。

『マジ？明日って大晦日だよな』

これ以上川崎とメールしていたら明日への影響があるかもしれない・・・。

あたしは『オヤスミ』と川崎に告げてその日のメールを終えた。

明日・・・あたしの初恋が決まる。

第12話*大晦日の日に（後書き）

ご評価してくださいましたら頑張りにつながられます。どうぞよろしく願います。

第13話＊陸が泣いた日

『さあゝ教えてもらおうか??』

午後8時38分、川崎からのメールが来た。

冬休みだから川崎に会えないものの、メールがほとんどだから寂しくない。

会えない寂しさを忘れてしまった。

『さあゝ何のことかな?』

とあたしがとぼけたから、

『最低』

と送り返してくるのがおもしろかった。

『ちゃんと覚えてるから・・・』

『誰!?!』

『まだ言わな』

『じゃゝ今年中に言えよお!』

『忘れてるかも』

『俺が言うけん!』

今日はいよいよ大晦日。お母さんは買出しから大忙しで疲れていた。年越し蕎麦をあたしの目の前におくと、手を合わせて一人で勝手に食べていた。

「メールばっかしてないでえ、今年を精一杯すごしなさいよお」

と言い、お母さんはまた麺をすする。

ふと気がつくと11時30分!やばい、もうそろそろ言わんばかも・・・。

『好きな人がいるなら頑張れよ』

これが川崎とのさっきのメール内容。

あたしは打ち始めた。あたしの『スキ』という気持ちを・・・。

でもなんて伝えたらいいの??『スキ』なんて直球に言えない・・・。

『好きな人に頑張れって言われても頑張れんし・・・』

あたしは目を痛くなるほど閉じて送信ボタンを押した。

まだキャンセルボタンは押せるよ・・・まだ・・・まだ・・・。

“送信完了しました”

これが表示されたたん、あたしの上がっていた肩は下がった。

川崎の返事は遅かった。

もうすぐで、年が明けるのに・・・。

♪
♪
♪
♪

着信音が鳴った瞬間、あたしは携帯に飛び出した。

『は？』

時間をかけて返してきた言葉が・・・『は？』??

『分かってよ・・・』

だんだんと、川崎の返事が遅くなることが予想できた。

5分で返ってきた短い返事。これ以上長い分はないかもしれない。

『分かるよ』

分かるの・・・？あたしが『スキ』って、分かってくれたの？？

『良かった』

あたしは安心した。でも、不安が残っていた。川崎の気持ち、聞いてない。

『ありがとう。嬉しいよ。でも・・・』

え・・・でも??

『俺はお前と付き合うのは不安だ』

目の前には黒い雲が広がったようだった。

『不安』は、いい意味ではない。

『安心』のほうがずっといい。

どういう意味なの川崎———！！

あたしの目の前のテレビでは、すでに来年までのカウントダウンが始まっていた。

5・・・3・2・1———HAPPY NEW YEAR
R。。。。

あたしにとって去年は、幸せな年にできなかった・・・??今でも、
そうなの??

目から何かが出てきた。

水・・・??いや、涙か・・・。

久しぶり泣いた。『男嫌い』の症状以外で。

泣きじゃくった。振られた、という意味で。

そのあとは、メールの返事は・・・送れなかった。

第13話*陸が泣いた日（後書き）

起承転結、『起』が終了いたしました。

陸の告白はあいまいなものでした。川崎の返事の意味も分かりません。

いずれこの物語を読んだけたら、解かると思います。

ご評価よろしく願います。

第14話*陸の失った心

黒に染まったつんつんの髪の毛。

ホックはいつも開けていた。

最初に出会った時にはだるそうに見下ろす目。

『たらし』の有名さは大きかった。

学級委員に何故か立候補してきてしまいにはあたしにチュー……。

『男嫌い』には耐えられない感触が、頬に残った。

あたしが倒れたときには、保健室まで運んでくれた。

『たらし』の規則が知らないけど、優しい言葉をかけてくれた。

メールした時にはあいからわず気があるような文送ってきたり……。

体育大会の時なんて、クラスのことひっぱって優勝までできた。

夏休みには部活の練習すつごいがんばってて、『たらし』の余裕もなかったみたい。

汗を流して笑ってた姿、カッコ良かったな……。

あいつがボールを床につく姿、輝いてた。

あたしが試合って言った時には、『頑張れ、応援してやつから』と言ってくれた。

言葉では言えなかったから、あたしは“あいつ”の試合のときはメーイルで送った。

『頑張ってね』・・・と。

合唱コンクールでは練習ではぜんぜん出さなかったくせに本番では1番声出てたよね。

“あいつ”のおかげなのかなあ・・・金賞得れちゃったね。

修学旅行でもいろいろあったし・・・本当に楽しい時間だったよ。

このまま時間が止まればいい、もう少し、川崎との時間を増やして・・・。

——でも、今はそれを一瞬ですべて失くしてしまった。

『俺はお前と付き合うのは不安だ』

『不安』って・・・それが川崎の気持ちなの？？

どっという意味なの？？

1月1日午後6時48分

ブルルルルルルル

あたしの部屋にあつた子機の電話が鳴った。

「——もしもし」

取ってみると声の主は真奈美だった。

真奈美は今まで“あいつ”のことでいろいろ協力してくれた。
でも、もうそんな必要はないかもしれない。

「啓から聞いたよ……。告つたんだってね。メールで来たんだ」

真奈美の静かな声。

あたしは小さく「うん」と答える。

「啓ね……。一昨日は陸が好きな人教えてやるって言ったからすごい楽しみにしてたんだよ。『男嫌い』のあいつが人を好きになるってどういう奴なんだろうって。もしかして、俺かも！？とかふざけて答えてたけど……。本人はそれが当たるとは思わなかったんだって」

「ふーん……。」

もう・・・“あいつ”の話はしたくない・・・。
思い出したくない、振られたこと。

「でも啓を悪く思わないで・・・あ、別にかばうつもりじゃないんだよ、“あいつ”、言ってたんだ・・・・・・・・」

『俺はあいつの言葉を受け止めて付き合っただとしても、告白を断るよりもあいつを傷つけてしまいかもしれない』

・・・・・・・・え？

「それどういう意味？って聞いたら、答えてくれなかった・・・。
多分、元力ノのことがあるからだと思うけど・・・」

元力ノ??

「元カノと前いろいろあったらしいんだ。啓は、それを怖がってるんじゃないかな・・・？」

頭はもう、限界だった
――。
。

第14話＊陸の失った心（後書き）

物語の起承転結、『承』に入りました。

陸の失ってしまった心はどうなるんでしょうか。

川崎と元力ノとの間に何があったのでしょうか。

それが、『承』でのポイントです。

ご評価、よろしくお願いします。

第15話＊復活

新学期が始まった。

肌寒い通学路を、あたしと真奈美は並んで歩いた。

交わす言葉がなかった。真奈美もあたしをなぐさめるのには無理な
んだろう。

あたしの中では静かに、“あいつ”を忘れ、“アレ”がよみがえっ
てきていた。

クラスの靴箱に向かう。シューズを下に落とした。

ボスッという音はなんか懐かしい。

ボスッ。

隣からも同じ音が聞こえてきた。

「えっ・・・」

顔を上げてみると、“あいつ”の横顔が見えた。

かわさ——・・・・・・・・。

心の中で声が止まった。

目も見開いたまんま。

背中に1本の棒が平行に突き刺さってるみたいに、背筋がのびる。

・・・・・・・・動けない。

そう思うと同時に、あたしの目からは涙が数的腕と足からは鳥肌が立つ。

何コレ・・・・？

すぐにあたしは気づいた。

『男嫌い』の症状・・・でも、前よりもひどい。

川崎はあたしが見ていることに気づいた。

泣いてると思ったあたしを見て、川崎の目は丸くなった。

「お、お前つ・・・何泣いて・・・」

川崎のあせる顔。

心の中では見続けていたのに、体が抵抗する。

「おい、どうしたんだよ・・・」

川崎は手をあたしの肩に近づけてくる。

「いやぁー！」

．．．．．へ？

自分でも驚いた。あたしは、川崎の手をはたいた。

川崎は驚くばかりで何も言わない。

「あ．．．あたし．．．」

あたしが言いかけると、

「お前、『男嫌い』．．．復活したのか？それも．．．前よりひどく．．．」

川崎の声は抜けた声。

あたしの目には涙がたまるばかり。首を振るのも難しい状態。

黙ってあたしは教室へと走りぬけた。

川崎の後ろから叫ぶ言葉を、背中で受け止めながら。

第15話*復活（後書き）

陸の『男嫌い』が前よりもひどく復活してしまいました。

陸の失いかけた心から、川崎に対しての抵抗がより強くなったんでしょう。

これには川崎はどのような行動をみせるのでしょうか。

ご評価よろしく願います。

第16話＊深刻な話

ガララツ・・・・・・・・。。。

「あ、陸ちゃん久しぶりだね。おはよ〜」

あたしは北島のあいさつを聞こえぬふりしてまた教室を出て行った。

「えっ??あれっ・・・陸ちゃん!？」

北島はあせった顔をしてただろう、あたしは泣いていたから。

「はよ・・・」

俺は陸ちゃんに対してあせっていた。

でも啓は平然とした顔で教室に入ってきた。

「おい啓!陸ちゃん泣いてたぞ!？何か知らねえのかよ!？」

俺は必死で聞きかかった。啓はいつものものたるそんな表情とは違ったから。

でも啓はそう簡単に答えない。下を向いていただけで黙っている。

俺はあきらめなかった。啓の肩をつかんでゆすってみる。

身長差はあるものの今はそれどころじゃない。

「あいつ・・・消えたと思ったのに・・・また元に戻っちまった。・・・前よりもひどく」

啓の眉はハの字型になり戻らない。

どうしたんだよ・・・。何が消えたんだよ・・・何が戻ったんだよ・・・。

「自然に消えたはずなのに・・・『男嫌い』が・・・」

え？『男嫌い』??・・・が、戻っただけ？

なんだ、もつと重い病気かと・・・。

いつのまに俺の固い表情はやわらいだ。

「お前、安心してるだろ??」

うん・・・ただ単に『男嫌い』っただけじゃん・・・。俺あんぐら
いだった『男嫌い』の陸ちゃんが良かったよ。

俺はうなずく。

「言っただろ？前よりもつとひどくなっただ。話どころか、今は
顔さえ見れない」

・・・え？

「あいつの体は男子拒否だ。そばにただでいいは壊れちゃう
んだ・・・」

何それ・・・そんな『男嫌い』ってあり？？

「俺のせいなのかな・・・」

曇った表情で啓はうつむいて独り言を言った。

その言葉を聞いた瞬間、俺は啓を責めた。

「おい・・・それどういう意味だよ！？お前のせいで陸ちゃんがあなつたのかよ！？」

もう一度、さつきより強く啓の肩をゆする。

啓はうつむいたまま俺にゆすられ続けた。

「分からない・・・俺、あいつに告られたんだ・・・」

俺は頭の思考がストップした。

告られた？？啓が？陸ちゃんに？

一瞬、頭の中に陸ちゃんと啓のツーショットが見えた。

「それで・・・お前どうしたんだ？」

俺も曇るような表情で啓に問いかけた。

啓はさつきよりも深々とうつむき、そして答えた。

「断ったよ」

啓のあつさりとした声に俺は呆れた。

「何でだよ・・・お前ら俺が羨ましすぎるぐらい仲良かったじゃねえか・・・」

啓は何も言わずに顔を上げない。

「俺はっ・・・啓なら陸ちゃん諦めようかと思ってた。でも少しは心残りはあった。陸ちゃんが啓が好きで無理で——立ち直れるようなら良かった。また次を目指せるなら良かった。でも・・・なんで断って、陸ちゃんあんなにしたんだよ？可愛そすぎるだろ？」「男嫌い」も、前の感じなら元に戻っても良かったんだよ・・・俺が治してやるから。でも、今は・・・陸ちゃん自体が全部否定するじやんか・・・啓——！！」

言っているうちに生暖かいものが頬をつたった。

俺は久しぶりに泣いていた。

人のことを思っていないいた。

目の前の視界は狭くて分かりずらかったけど、啓が顔を上げたのは分かった。

「俺はあいつをからかってるだけ……。本気じゃない。でも……何でこんなに切ねえんだろうな……………」

啓の言っていたことは本当だった。演技じゃなかった。

何でかって？啓が泣いてるの、久しぶり見たから。

あたしは真奈美の教室に来ていた。

「もう、啓には近づいてもできないんだね。良かったんじゃない？」

あたしは答えない。川崎に心残りはまだある。

体が小さく震えてきた。体は抵抗するけどやっぱりまだ――
――。

「あたし……。川崎じゃなきゃダメなんだ……。何でか知らないけど！あたしは本気で“あいつ”に惚れてんの！」

真奈美は目を丸くしていた。

あたしは勢いで机を拳でたたいていた。

「陸……。あんた何で……」

「何で“あいつ”に惚れたんだろ……。いっぱい悪口言っ
てやりたいのに……。『バカ』っていっぱい叫びたいのに……。“あいつ”
だから言えないんだっ……。！」

近くに男子がいたわけでもないのに、あたしは泣いた。

感情を持ってないんだ。

川崎の、想いに対して――……。。

第16話＊深刻な話（後書き）

啓にも陸にもお互い心の隅に想いがあるみたい。
でも、啓にはつらい過去があった。
時期に、分かるはずです。
これからよろしくお願いします。

第17話＊元カノのコト

あたしの『男嫌い』は半端じゃなかった。

川崎以外の男子にも体が受け付けない。

顔を見るだけでも、目が合っただけでも、鳥肌が立ち、涙が出る。

仲が良かった北島でも、ほかの男子と同じ。

やだよ……。こんなあたしやだよ……。

放課後、あたしは屋上にのぼり空を眺めていた。

あたしはもう放心状態。何言っても無駄。

そよそよ吹く風だけが、あたしに抵抗する。

「陸」

声の主は真奈美だった。

「……何？」

あたしは体のどこも動かさず、声だけで反応した。

「啓のことで、話そうと思っただけど」

真奈美の言葉と重なって、あたしの体はビクッと動いた。

「啓の断った事情も・・・聞いてほしいんだ」

正直言っただけ聞きたくない。でも、聞かなければならないんだろう。

「分かった・・・話して」

そう言っただけ真奈美はあたしの隣に立って、空を見上げた。

「あいつには・・・中1の時は彼女がいたんだ」

傷つく話題から切り出してくる真奈美。

「その子、啓から告白されてね・・・。あたしは最初啓が遊びのつもりだと思ってたんだ。でも、逆だったんだね・・・」

「え・・・?」

逆???どういうこと?

「啓・・・本気で惚れてたんだ。でも、その相手が遊びだったみたい。付き合いは長かったんだけど別れを告げられて・・・啓、かなりショックだったらしいよ」

「それからもつとひどくなっただ。啓の『たらし』癖は」

ひどくなつたと聞いた瞬間、その元カノにあたしは恨みを感じた。

「そこらへんに女子がいると輪の中に入って会話し始めるし・・・女子にはみんな、よりかかっていくようになったんだ・・・」

「え・・・」

でも2年生になったらそこまで『たらし』はなかったような・・・。

「でもね、2年になったら何故かやわらいだ。構う女子も少なくなつたような・・・」

それって・・・あたしに構つてたから??

「てか、1番聞きたいことがあるでしょ、陸」

真奈美は真剣なまなざしで見つめてきた。
あたしは一瞬何のことが分からなかった。
でも、すぐに分かった。

「・・・その元カノの、名前・・・知りたい・・・」

あたしは『勇氣』というものを振り絞った。

「それはね・・・」

真奈美の眉はハの字に曲がった。

「陸の近くにいるよ」

あたしの近く??真奈美しかないじゃん。

「違う!そういう意味じゃなくて、存在がよ」

「え??」

存在って、それも真奈美しか・・・!!

真奈美もあたしの反応に気づいたみたい。
そして、ゆっくり口を開いた。

「夏海だよ」

第17話＊元カノのコト（後書き）

夏海とはどういう意味？？

対照的なあの2人が付き合ってたの！？

夏海が川崎の恋の遊び人だったの・・・？？

読んでくださったかた、感想・評価よろしくお願いします。

第18話*夏海の本性

夏海

一言ではかわいい女の子。

おとなしすぎて話しかけずらかった。

男子とはもちろん・・・でも、女子ともあまり会話を交わさなかった。

夏海と出会ったのは小学校5年生。

きれいなピンクのランドセルで転入してきた時だった。

そのときから、会話は全くといってほどせず、中学2年生を迎えた。

ペンケースがなくなったときは、やさしく声をかけてくれた。

貸すシャープペンがなかったときは、ガツカリした顔がかわいかったよ。

それがもとで、いろいろ話せるようになり、親友にまでのぼりつめた。

でも・・・もう雰囲気には耐え切れなくなるかもしれない。

「夏海が・・・川崎の元カノ？」

あたしは拍子ぬけた。すっごい意外だったから。

1年生のときは夏海と川崎は別のクラスだった。

しかも1組と5組。夏海はそのときはまだ人とは会話はしなかったから・・・。

何が原因で??

「夏海さ、小学校のころバスケやってたじゃん？啓も小学校は違ってたけどミニバスケット部に入ってた・・・顔合わせるときとかなかったけど・・・試合とかあったとき夏海、メアドとかいろいろ男子と交換してて・・・もちろん、川崎ともメールしてたらしいの」

そのころからなのかな・・・？川崎が夏海のこと好きなの。

「中1の入学式に啓が告白して、OKだったとき・・・」

まるでハッピーエンドのような言い方。全然違うけど。

「それが・・・夏海の本性なの？」

「夏海は逆の『男たらし』なんだよ。啓は本気で、夏海は遊びだったんだ・・・」

「夏海は・・・なんであんなおとなしいの??」

「メールとのギャップを見せるためなんだよ。そういうのいいって言う男子いるでしょ?」

確かに・・・夏海はあの『たらし』だ。

「啓はね、もう本気の恋なんてどうでもいいって思うよ。『たらし』として、女子の周りで生きていくって・・・」

本気の恋なんてどうでもいい??

じゃあ“あいつ”はもう、1人の女子のものになることはないの・・・?

夏海の・・・夏海のせいで・・・

あたしは屋上から出た。長い階段を音を立てながらあたしは下りる。

そして、教室に1人でいた夏海。

「・・・・・・・・」

「わっ、びっくりした。陸、どうしたの？」

夏海は上機嫌の笑顔で問いかけてきた。

「あたしが聞きたいくらいだよ・・・」

あたしは聞こえない声でつぶやいた。

「てかさあゝ陸」

「へ？」

夏海 of 笑顔の意味が変わった。

笑顔ではなく、人をばかにするような、笑い。

「陸ってば・・・啓に告ったんだってね」

あたしの肩はビクツと震えた。

口元は笑い、眉は苦笑いの夏海。

「知ってるでしょ？あたしと啓が付き合ってたって。まあ・・・あたしは遊びだったんだけどね。全然知らなかったけど、あっちから告ってきてさ、顔が良かったからOKしてあげただけ。何かや

っぱ疲れるねえ。あつちはまだあたしのコト未練があるみたいだけど」

夏海の嫌味たらたらの言い方。あたしは怒りを抑えた。

「何それ……」

ぐつと拳でこらえた。

「何って、断つたらなんかもつたないじゃない？まあ、ボランテイアってやつ？」

そして、あたしを嘲笑うかのように大声で笑った。

中2のはじめの夏海と比べたら大違いだ。

天使のように、素直で優しくった子が、今は黒々とした心の悪魔。

「何よそれ……」

「別にそんなあたしの勝手でしょ？？啓って意外ともててたんだね。他学年の女子にも告られてたしね。まあ『たらし』だからね。アレだけのルックスもあるし。でも断つたの損だなあ。あたしから告ってみよっかなあ。どうせOKだし。ま、また遊びのつもりでね」

夏海の無神経な言い方に、あたしはついに切れた。

「いい加減にして!!」

夏海には少しこれがきいた。目を丸くして立ちすくむ。

「夏海は・・・夏海は無神経すぎる!!」

言葉と一緒に、汗が流れてきた。

「本気で人を好きになるって、こんなに愛くるしいことなの!切ないことなの!だから・・・遊びでそんな簡単に人の気持ちを受け取っちゃいけないの!」

汗と思つたら、今度は目から雫がたれてきた。

“それ”の正体を知る前に、あたしは言葉を続けた。

「あたしは遊びじゃないから・・・本気で“あいつ”に恋してる。気持ちだけなら誰にも負けないから!!」

そしてあたしは来た方向に振り返り、走った。

納得のいかない顔してる、夏海を背中に残して。

第18話*夏海の本性（後書き）

夏海は啓の逆、『男たらし』だった。

天使のような女の子が、こんな形で悪魔に変わってしまった。

啓のことは本気にしていなかったが、また啓を狙い始める・・・？
陸のライバルに？！

第19話* 啓の言葉

しばらく学級委員は無言の日々が続いた。

川崎とは一言も口をきかなかった。

ただでさえ話すのも無理なのに、このままだとあたし壊れちゃうよ・
・。

あなたの声がききたいの。あなたからのからかいや優しさの言葉が
ほしいの・・。

もう全部・・無理なのかな・・。

1月31日

さよならの挨拶も終わり、帰る準備をしたあたし。
このまますぐ帰れるかと思った・・が、

「このプリントの整理頼んだ」

先生からの久しぶりの雑用。
学級委員後悔……。
って、学級委員ってことは……。

あいつがいた。

バチンッ、バチンッ

妙に教室響くこの音。

あたしたちには耳元の大工事に聞こえた。

何も会話を交わさずに、ホッチキスでプリントをとめる。

こんなに近くにいるのに……。どうして体は動かないんだろう。

どうしてあたし、『男嫌い』なんだろう……。

どうして・・・どうして・・・・・・??

バンッ！！

ホツチキスの妙な音より響いたこの音にはあたしは声をもらしそうになった。

「何でなんだよ！！」

川崎の突然の大声の独り言。

「何で俺・・・こんなにあせってんだよ・・・」

川崎の独り言はあたしは理解できなかった。

誰に向かって言っているのか、何に後悔を感じているのかさっぱり分からなかった。

「いつもの俺なら・・・告られたら付き合つか断って・・・断ったら『また告られたあゝ』とか・・・自慢話だったのに・・・さっば

りできたのに・・・何でこんなもやもやなんだよ!」

あたしはこの言葉に切なさを感じた。
意味は分からなかったけど、心に染み付いてきた。

「俺がお前の『男嫌い』ひどくしたのなんて俺にはどうでもいいことなのに・・・」

川崎がとうとう机に顔をしずめた。

「何で俺の心の中に、お前がいるんだよ・・・」

川崎の瞳は、あたしを捕らえていた。

つぶらな瞳には、あたしが映っていた。

悲しそうな目。つらそうな目。

何でそんなに後悔してるの??

『男嫌い』の症状は出ず、無意識にあたしは川崎の瞳を見つめていた。

「俺、お前のこと・・・好きではない。でも・・・だからって嫌いつてわけじゃねえんだよ!」

川崎の辛そうに言い切った言葉。
あたしの心にやきついた。

『好き』ではない。でも、『嫌い』じゃない。

気持ちはどうかなの・・・??聞きたいけど口は動かない。

「最近のお前見てたら、悲しそうで、辛そうで・・・見てられねえ

んだよ……。気楽に話しかけたいのに『男嫌い』がひどくなつた
っていつたら……。これ以上お前に関わったら……。お前が壊れそ
うで……」

何て言うか……。体の底で、もう1人の“あたし”が、川崎を見つ
めていた。

体に抵抗し、気持ちだけ豊かな、心の“あたし”が。

「俺お前のことなんて見捨てねえよ……。見捨て切れねえんだよ・
……。お前のこと見てたら」

突然、どこからか声が聞こえてきた。

「嫌いになれるのが……。怖いよ……」

それは、あたしの『声』だった。
体の抵抗に勝ち、ようやく湧き出てきた、あたしの“想い”が。

川崎はあたしの声に驚いていた。

やがて、ふつ、と笑みをこぼし、安心したかのような声であたしに言った。

「嫌いになんてなんねえから・・・な？ホントだよ。お前はそういう奴じゃねえから」

お前・・・は？他に・・・誰かいたの・・・？？

「大丈夫って・・・。だから、この先も俺のこと見ててくれたら・・・嬉しいな・・・」

川崎はあえて声に力を入れず、見つめていた側の、顔で、笑って感情を表現した。

川崎・・・あたしのこと『嫌い』じゃないんだよね・・・。

まだ希望はあるんだよね・・・。

まだ、気持ちは伝えられるんだよね・・・。

あたし、頑張れるかも・・・。

第19話＊啓の言葉（後書き）

啓は今の気持ちを陸に伝え、陸も心の調子を取り戻した。
だから陸は、次の挑戦に・・・出る。

第20話*予告

『好きじゃない』でも、『嫌いじゃない』

『男嫌い』の症状がやわらいだ。

胸の力がふつと抜け、涙も出なかった。

“あたし”が、よみがえってきたような気がする。

本当の“あたし”

『男嫌い』じゃない“あたし”

普通に男子と話せて・・・何でもできて・・・

自分の気持ちを素直に言える“あたし”

『バレンタインデー』

それは去年のあたしには全く無縁のものだった。

でも、今年はそうでもないかもしれない。

渡せたらいいな、という気持ちから、渡したい。という気持ちに移り変わってきた。

バレンタイン当日は、もうすぐそこに迫ってきていた。

でも、『いらない』とか言われたらどうしよう・・・。

それでも、あたしは“あいつ”のこと諦めきれないんだよ・・・。

久々にあたしは川崎にメールを打った。

こんなに日にちがあいたのは、初めてだった。

『本文：あのさあ・・・バレンタインチョコ、いる？』

本人に聞いていいかどうかわからなかったけど、あたしは勇気の塊を送った。

返事がどうくるのが怖くて、怖くて・・・あたしはつい携帯から離れた。

でも、乙女心なのか、着信音が鳴るとすぐにとんでいった。

『本文：おゝ久しぶりだな。チョコ??お前渡せんのかよ』

期待はずれだったけど、久しぶりのメールが嬉しすぎてならなかった。

『本文：分かんないけど・・・』

『本文：じゃあ無理だな』

なぜか心の中の『期待』は消えていた。

ちっばけな返事は、『いらない』って思ったから。

『本文：そうだよねえ、あたしじゃ渡せないから』

自分でこういう事を言うと、辛くてたまらなかった。

自分の成長が、全然なかったと思うと。

『本文：そんなこというなよ。でも、お前のチョコ、食ってみたいなあ』

これは『期待』の言葉なんだろうか。

味なんて自信ないけど・・・食べてもらいたい。

『本文：うん！じゃあ待つてね！オヤスミ！』

これだけを送ると、あたしは寝た。

眠れなかった。“あいつ”の言葉があたまにやきついていたから。

「あれ？啓、誰とメールしてたの？」

塾帰りの俺の隣にいた海が、不思議そうに俺を見た。

「このごろ誰ともメールしなかったじゃん。ショックでさあ。立ち直れたの？」

海はまだ俺が神崎にいろいろ言っただことを知らない。

「神崎とだよ」

海の表情は嬉しそうで、苦笑いだった。

「おお・・・何とかなくさめられたのかよ。良かったな」

「あいつの『男嫌い』も少しましになったしな」

海の顔は輝きだして、自転車だったのに足元からジャンプしそうな声で言った。

「まじでえ！？やったあ！いつも通りの陸ちゃんだあ！」

「神崎のことまだ諦めてないだろ？」

「もちろん、てか今マジでやる気出てきた」

「・・・神崎もそうだったらしいのにな・・・」

「ん？何か言った？」

「いや・・・、何も」

神崎も俺をまた振り向かせてくれたらしいのに、そしたら俺、気持

ちが変わるかもしれない。

夏海のこと、忘れるかもしれない。

何で気になるんだ？

何で神埼に、振り向かせてほしいんだ？・・・俺。

番外編 2 * 陸の独り言 (前書き)

陸は啓に渡すものは・・・???

番外編 2＊陸の独り言

あたしはさっそく川崎に『チョコ』をあげると決め付けた。

でも・・・何が好きだろう。

甘いもの好きなのかな・・・??

男子って、甘いもの苦手そうだし・・・

手がこんだものがいいよね？それよりも愛情とか？？

「ダメだ・・・あたし才能ないや・・・」

目の前に広がる失敗作の数々。

エクレアにマカロン、プリンにモンブラン・・・全部ダメでした!!
失敗。

「うつわあ・・・エクレアとか生地ふくらんでないし。あゝあ、マカロンとかチョコでベタベタだよ・・・。プリン固まってないしモンブランも生地が・・・」

材料は意外とまだたくさんある。

でも、問題は時間。

部活もあって忙しくって作る時間もなくて買出し行ったりしてたら・・・

2日前になりました・・・。

「やばい・・・やっぱ買ったほうが確実にいいかなあ」

あたしはひじを机につき、お菓子の本をばらばらめくった。

次々とおいしそうなメニューが出てくる。

でも、目の前には同じものを作ったはずが・・・残飯にしか見えな
い。

ばんっ。

いきなり反射的にあたしの腕が本のしおりをした。

「あ・・・コレって・・・？」

目に止まったのは1つのお菓子。

あたしはそれを作ったことなかった。むしろどんなものかも知らなかった。（それはやばい）

でも、一目惚れしてしまった。それに。

材料の欄を見てみると、意外と少なく作りやすそうで、材料もそろっていた。

「決まりだな」

あたしは独り言を自信満々につぶやいた。

番外編2＊陸の独り言（後書き）

番外編ということで本編からの見方をずらしてみました。

本編では陸の渡すものはもう決まっています。

これからも読んでいただけたら嬉しいです。

第21話＊勇気のメール（前書き）

この話では陸と啓のメールのやりとりでそれぞれ2人の想いを書いています。

第21話＊勇気のメール

あたしは携帯をクッションの上にうずませてその前に正座して座っている。

手をのばそうとするが、亀のようにまたすぐ引っ込めてしまう。

「どうしよ・・・あたしが決めないと渡せないじゃん・・・」

頭をかかえるあたし。そして首を振る。

5秒間目の前で足を組んでいるような携帯をジッと見ていた。

ガシッ!!

カメレオンの舌のようにすばやく携帯を捕らえた。

そして、新規メールを作成する。

『本文：あさつての日曜日渡したいものがあるんだけど、時間ある？』

送信ボタンをふるえる指で押さえつけた。

『送信完了しました』

この文字が出るとあたしは一息ついた。

受信者??そりゃあもちろん・・・

ピリリピリリ。。。

女子からのメールを返信中、新たな新着メールが届いた。

いたって俺には普通のこと。女子からのメールなんて毎日がかかせなかった。

でも、“あいつ”のことがあってから1週間ぐらい、女子からのメールでも無視した。

やる気がなかった・・・てか、やっても『たらし』としてできなかつた。

他学年も俺のこと『たらし』って、分かってるけどそれでも俺は自分でも思っようにモテる。

告白された数も数えられなかった。でも、告白した数は少ない。

カチッ。

そのメールをようやく送ると俺は新着メールを見た。

女子用のフォルダを見てもさっきの女子からのメールしかない。

「海かな・・・」

『海』用のフォルダを見たが昨日しただけのメール。

ということは・・・

あげくの果てに俺はボタンを下に動かした。

そしてそのフォルダを押してみる。

「・・・やっぱり」

俺が押したのは『男嫌い』のフォルダ。

そこに新着メールがあつた。時間も日にちも合ってる。

『本文：あさつての日曜渡したいものがあるんだけど、時間ある？』

渡すもの？？なんか俺“あいつ”に物貸したっけ？？

まあいいか、“あいつ”からこういう事言ってくんの勇氣いっただろっし・・・。

『本文：いいけど。何時くらい？？』

俺は、送信ボタンを押した。

着信音が鳴るとすぐにあたしは携帯に飛び込んだ。

本文を見るとあたしは考え込んでしまった。

「そつだ・・・時間決めてない」

『本文：何時ごろが空いてる？』

『本文：5時から』

『本文：じゃあ5時でいいよ』

『本文：分かった。場所は？？』

『本文：役場前の公園！』

『本文：分かった。じゃあまたあさつてな』

そして、メールは終わった。

とうとう渡してしまわなければならない。

なんて言って渡す？服装は？？

あたしは、静かに、そして身振りは激しく、決意を固めていた。

俺に渡したいものって何なんだ？？

お返しのビンタとか・・・？？（笑）

まあ、あいつがあれだけ勇気だしたんだからなあ・・・。

でも役場前の公園なんて人通り少なすぎだろ・・・。

それはあさって分かることか。

眠くなってきたので俺は『寝ないですよ』という女子が言う中、『オヤスミ』と送った。

そして、深い眠りについた。

第21話＊勇気のメール（後書き）

勇気を出して待ち合わせを決めた陸。

果たして・・・渡すものを渡せるのか？？

これからも応援よろしくお願いします。

第22話＊勇気を出して

私服オツケイ、髪型オツケイ、持ち物オツケイ、・・・渡すもの、オツケイ・・・。

待ち合わせ時間まであと1時間。

待てずに待ちくたびれたけど1時間以上前からあたしはココ、役場前公園にいる。

グラウンドの周りをうろうろしたり、落ち着こうとベンチに座るけど体が浮く。

トイレの鏡で繰り返し自分の容姿をチェックする。

「・・・怖いなあ・・・」

あたしの勇気は時間が近づくにつれて小さくなってきた。

何て言って渡せばいいか

受け取ってもらえるのだろうか・・・。

自分でもこれは『マズイ』とも思えた、渡す物。

「帰りたいな・・・」

あたしはボソリと呟いた。

「・・・神崎？」

「!!!？」

あたしはその言葉だけに驚いてベンチから勢いよく立ち上がった。

「えと・・・待たせた？」

走ってきたかのような荒い声。

時計に目をやるといつの間に5時をもう回っていた。

「や・・・全然、あたしもさっき来たし」

精一杯の笑顔を作り、川崎に送る。

「で、用件は??」

さっそく本題に入った。

あたしのバッグの中に、『それ』はある。

でも、取り出すのに時間がかかり、言葉のタイミングがつかめなかった。

「あ・・・あの・・・」

小さな震えた声しか出ない。

このまままた逃げるつもり??

自分から前に進まないつもり??

そんなの・・・嫌だから。

「コレ・・・作っただけど・・・」

あたしは自分の目の前に持つ。

「・・・もらっていいの?」

川崎の冷静な声。

「・・・うん」

言ってよかったという思いから、あたしの声のトーンは高くなった。

「ありがと・・・」

呟くように言うが、声のトーンからして優しい声。

『ソレ』を受け取ると、自転車にまたがった。

「お、マフィンじゃね。じゃあ食べたら感想いつから♪」

「う・・・うん！」

「・・・じゃあな」

「・・・ばいばい」

川崎は、去った。

それと同時に、あたしにはほんのチョット、達成感が湧き出てきた。

渡せた・・・。あんなに『男嫌い』ひどくなつたのに・・・渡せた。

良かった・・・受け取ってもらえてよかった。自分から声出してよかった・・・。

あたし、お疲れ様。

第22話＊勇気を出して（後書き）

陸がやっとの勇気で渡せせた『マフィン』

川崎は喜んでる？？

陸に贈るその感想とは何でしょう・・・??

これから応援よろしくお願いします

第23話＊感想＆期待の一言

『本文：マフィンありがとね～。さっそく食べたよ。おいしかったよ』

お風呂からサッパリした後に携帯を開いてみると、その文があった。
送信者は、川崎。

そのひと言にほっとした。おせじでも、嬉しい。

渡せたことだけにあたしはもう安心感を抱いているから。

『うん、おいしいならよかった。ゴメン、全然喋らんで・・・』
「（。）」

『たつく～お前の『男嫌い』には困ったもんだよね』

『仕方ないやん・・・』

『正直、お前からバレンタインなんてもらえるとは思わなかったよ』

♪
『』

『あゝ・・・マフィンは作ったの初めて・・・』

『男子にやったことないと??』

『うん。初めてだよ』

『俺のためにわざわざ慣れないことしてくれてありがとう』

『恥ずかしかったけどね・・・』

あたしは、初めて川崎に自分の感情を伝えた。

『お前・・・俺のコト、まだ好きか?』

突然の質問。

何て答えたらいいだろう・・・あたしまだ川崎のこと・・・

「好きなんだ」

『うん・・・好きだよ』

自分の感情に嘘をつかなかった。

『それじゃあ俺は、お前がどうやって俺を振り向かせてくれるか楽しみにしてるから』

期待がかかっているのか分からないけど、期待してしまう言葉。

楽しみにしてるって、『嫌い』って思ってるわけじゃないよね？？

『楽しみにしといてよ』

積極的に川崎に、まだまだアタックしてもいいんだよね？？

第24話＊絶対に振り向かせてやる

一步一步を踏み出したい。

ちよつとずつでも近づきたい。

“あいつ”心に、近づきたい。

「お・・・おはよう」

この一言の勇氣。

前のあたしにはかけらもなかったはず。

でも、やっと言えたんだ。

あたしの目の前にいる“あいつ”は、あたしのこの一言に目を丸くしていた。

当然、あたしは『男嫌い』だから。

男子に話しかけるのなんてもってのほか。あるわけなかった。

でも、今なら『勇氣』がある。

「おす・・・」

返してもらった言葉だったから、あたしは笑顔になれた。

「お前・・・1日で変わったな」

川崎のやわらかな笑顔。

それって褒めてるの？

「良かったよ・・・お前の『男嫌い』消えて・・・」

そう言いながら、川崎はあたしの腕を掴んできた。

ゾワッ！！

鳥肌となみだ目。

「・・・そうでもないな」

川崎の呆れた声と顔。

あたしもつられてしゅんとしてしまう。

「それ直さないと俺なんて振り向かせれねえぞ」

背中を向けてあたしに言う。

「・・・分かってるよ」

先を歩く川崎の後に、あたしは着いていった。

歩きながら、心の中で川崎の背中に言った。

絶対に、振り向かせてやる。

あたしは驚くように積極的を意識した。

頑張って川崎に話しかけたり、笑ってみせたり、部活前に『頑張ってる』と言ったり……。。

メールもほとんど毎日した。

でも、あたしの体は耐えられなかったのかもしれない。

そんなことを一週間続けていたらあたしの体はおかしくなった。

無理に抵抗する体を扱っているから……。限界になってきたのかもしれない。

3週間後の放課後、あたしは教室の中で死んでいた。（死んでないけどね）

窓際から2番目の机に座り、腕を組んで、中央に顔をうずませる。

もう意識がもうろう・・・やっぱあたし・・・疲れてるんだ・・・。

3週間も『男嫌い』の症状出すのがまんして・・・川崎といろいろ話して・・・。

ふっと、あたしの意識は消えた。

教室にはあたしの寝息だけが聞こえていたのかもしれない。

部活が終わって俺は忘れ物を取りに教室に戻ってきた。

あとで着替えるから俺は学校ジャージ状態。

でも汗だくで着るのはさすがに暑かったからダセエけど腰に巻きつけていた。

教室に入ると、ぎよっとした。

人がいた。俺の隣の席に。

動かない状態からして寝ているのだろうか・・・。

でも俺は忘れ物を取りに来ただけ・・・。

あ・・・俺の隣の席って・・・。

早足で教室に入って俺の隣の人間の正体を見た。

「やっぱり・・・」

気持ちよさそうに寝息をたてていた神埼。

寝顔には俺の良心がチクツとした。

このまま寝かせといたほうがいいのか・・・

起こした方がいいのか・・・

腰に手をあて考えた。そのときパツとジャージに手がいった。

ジャージは今日は腰に巻いてただけ・・・汗くさくもないし、教室に置いていこうと思った。

「・・・・・・・・」

俺は結んでいたジャージをほどき、そつと神埼の背中にかけてやった。

「お前最近よく頑張ってるよな」

頭をそつとなでる。でも、『男嫌い』の症状は出ない。

自然に、笑顔が溢れてきた。こいつに『勇気』を分けてもらったのかもしれない。

「俺——・・・」

生徒下校のチャイムが鳴ったとき、あたしはようやく目を覚ました。

「やばっ・・・！」

あたしは勢いよくイスから立ち上がった。

パサッ。

その時、一緒に何か落ちた。

「あれ？ジャージ？？」

自分がかけたと覚えのないジャージ。

でも、そんな余裕なかったはず・・・。

「・・・！」

『川崎』

と、ジャージには刺繍してあった。

あたしは川崎じゃない。神埼だ。

なんで川崎のジャージがかかっているの？ココにあるの？

覚えがある・・・。

頭をさすられて・・・『お前最近よくがんばってるな』って、言われたように・・・。

あとは・・・あとは・・・。

『俺——・・・』何て言ってたっけ・・・分かんない・・・。

でも、このジャージは川崎がかけてくれたんだ。

あたしはそのジャージを握り締めた。

川崎の香りがする・・・。

正直、川崎の香りなんて知らなかったけど、あたしには分かった。

あ、でも変態じゃないからね……。

嬉しすぎて……困るんだ。

第25話＊聖なる日の悪事

翌日、ジャージを洗ってきれいにたたんで、学校へ行った。

くつ箱に時間通りに行くと、“あいつ”がいた。

「おはよ！これありがとね、返すよ！」

あたしは川崎の前に差し出した。

「お・・・おう」

川崎は目を合わせなかった。

恥ずかしいことしたのかな？？顔が赤い川崎がかわいい。

あたしが笑ったら川崎は照れるのを止めた。

「な～に笑ってんだよ？」

「別に」

こういう事が、延々続けてくれるだけで、あたしは幸せなのに――
|。

とうとう早いものであたしの『勇氣』から1ヶ月が経った。

3月14日。ホワイトデー。

バレンタインのお返しをする日。

でも、あたしには無縁なのかな??

川崎は普段通りだったし、何も言われてない。

携帯の新作メールもゼロ。

やっぱ忘れてるんだ……。

期待はそんななかったけど、ショックは大きかった。

なんだか、1ヶ月前を思い出したくなって、自然と体が役場前の公園へと向かった。

役場前の道路沿いを、とぼとぼ歩く。その時、携帯が鳴った。

メールかと思ったけど、それは電話だった。

主は、『川崎 啓』とあった。

「もしもし??」

『あ……もしもし……』

「え？どうしたの？」

『あ、いや・・・今さ、どこかいる？』

「え・・・役場前だけど・・・」

『役場前！！？分かった、お前そっから動くなよ！すぐ行くから！』

ブツと電話は切られた。

待ってると言ってもここは役場前。暇つぶしも何もない。

でも、『すぐ行くから』という川崎の言葉を信じてあたしはそこに突っ立っていた。

「ハアハア・・・ゴメン。待ったろ？」

「え？？いや・・・」

時計を見るとあれから15分が経っていた。

15分ならそれほどでもない。

「てか・・・いきなりどうしたの？」

「あのさ・・・」

川崎の目が地面に落ちた。

エナメルバッグから小さなリボンのついた箱を取り出した。

「ゴメン、忘れてたんだ。コレ、あの時のお返し」

顔が赤い。でも、それをよそにあたしの目の前にそれを突き出してきた。

「え．．．？」

「分かんねえのかよ！ホワイトデーだろ？今日」

戸惑っているあたしに川崎は恥ずかしそうに説明する。

「あつ．．．ありがとう」

あたしは涙が溢れて、止まらなかった。

「泣くなよ．．．中身、開けてみ？」

川崎の言つとおり、あたしはその箱を開けた。

「．．．指輪？」

そこには、ちいさな輪に、小さなリボンが付いてる．．．リング。

「結構高かったんだからな！大事にしるよ、『男嫌い』！！」

川崎の目はあたしをそらしていた。

それでもあたしは嬉しさで涙がまた溢れてきた。

何も言えない。この指輪に意味がなくても嬉しい。

それだけで・・・思いが溢れてくる・・・。

「それでさ・・・俺さ・・・」

川崎は横目で頭の後ろをかく。

「あ、その前に・・・その指輪、俺が付けてやるから・・・」

「え・・・いいよ！自分ではめられるし！」

川崎の肩はガクツと下がった。

あたしは川崎の言葉からしてバカにされてるのかと思った。

でも——・・・

「俺がはめたいんだ」

川崎はハッキリと言い切った。

あたしが持っている箱の中から太陽で銀色に光る指輪。

それを、川崎は震える手で取った。

そして、あいている左手で、あたしの左手を上げ、支えた。

「お前、左の薬指につける指輪のコト、どっいう意味か知ってるか？？」

「え・・・??」

正直、知らなかった。

指輪はあたしならどこでも付けても同じと思っていた。

「あの・・・エンゲージリングっていうんだよ・・・」

そう言っつて、震えていた右手で指輪をはめようとした。

が、

カチャンッ。

指輪が地面に落ちて、そのまま縦に転がっていった。

「あ、やべ・・・。買ったばっかなのにっ・・・」

川崎は急いで指輪を追っかけた。

でも、指輪はなめらかな動きで川崎との距離を縮めてくれない。

指輪の逃げ道の先は・・・役場前の道路だった。

そうとも気づかず、川崎は下を見て指輪を追いかけるだけ。

このまま行ってしまったら、車に突っ込んでしまう。

とうとう指輪が道路に出た。

川崎は全く気づかず追いかける。

そして、やっと指輪をつかんだ。

「よっしゃ、良かった・・・」

あたしはその時やっと声を出した。

「川崎！！ダメ！！！」

「えっ・・・・・・・・！！！」

川崎は、ゆるやかな弧を描いて飛ばされた。

血が、急な弧を描いた。

あたしはそれを、見つめているしかなかった。

血の中で倒れている、川崎を。

第25話＊聖なる日の悪事（後書き）

啓の想いがこもった『エンゲージリング』を追いかけたはずみで、
啓は事故に・・・。

果たしてこの後陸はどうなるでしょう・・・。

これからも読んでくださったらうれしいです。

第26話＊運命

川崎・・・川崎??

どうして道路なんか倒れてるの??

周りにある赤い液体は何??

何で、目を覚まさないの??

何で・・・何で――・・・。

ポトツ。

手に持っていた、川崎からもらった箱を落として、ようやく我に返った。

目の前の川崎の事態に気づいたあたしは、すぐに携帯を取り出した。

「えっ・・・ウソ、やだっ・・・川崎・・・」

電話を片手に川崎のもとへ駆け出した。

ひざをつくと血がついたが、今はそんなことどうでもいい。

川崎の無事を確かめたい。

ねえ・・・川崎・・・。

川崎はまぶたを半分開けた。

「っ・・・」

あたしは呼びかけようとしたがその前にあたしのもとに、川崎の拳が突き出てきた。

「え・・・」

あたしは『男嫌い』なんて気にせず、川崎の拳に触れた。

パツと拳が開き、その中からは、さっきの指輪が出てきた。

「コレ・・・」

あたしが川崎の顔を見返したときには川崎は目を閉じ、眠っているかのように動かなかった。

拳は、また閉じ、指輪は見えなかった。

「やつ・・・やだ・・・川崎・・・！！ヤダ！！」

揺すりたいけど揺すれない。

キズがひどくなる気がして、怖かったから、川崎に触れることができなかった。

川崎は病院で集中治療室に運ばれた。

あたしは泣きつかれて手術中眠ってしまいそうになった。

川崎のお母さんはあたしの隣で泣き崩れ、あたしの片方の肩をギュッと掴んでいた。

『何で啓はこんなことになったの??』

『あなたは啓の何なの??』

あたしは・・・答えることができなかった。

こんなことになったのはあたしのせいでもあるし、あたしは川崎の何でもない。

嫌だ・・・嫌だ・・・川崎・・・。

縁起悪いけど、死んだりなんてしないよね??

あの時言おうとしたこと、聞きたいんだよ・・・。

俺・・・何なの??

何を言いたかったの??

聞かなきゃ・・・あたし、前に進めない。

このままで終わらないでよ・・・??ちゃんと生きて。

川崎の手術は長引いた。

そして、ようやく7時間経った頃、川崎は治療室から出てきた。

「川さ——・・・」

「啓—!!」

あたしが立ち上がる前に、川崎のお母さんが川崎の元へ行った。

そうか・・・あたしが出る幕でもないか・・・。

あたしが行っても、どうしようもない。

一人の医師があたしのもとへきた。

「あなたが・・・陸さんですか??」

「え・・・」

あたしは医師の顔を見つめた。

何であたしの名前知ってるの・・・?

「啓くんはコレを渡したかったようですね。ずっと握り締めていましたよ」

そう言っ、白い白衣のポケットから小さな袋を取り出した。

そしてそれを、あたしに渡した。

まさかと思って袋を破りそうな勢いで中身の正体をたしかめた。

「かつ・・・かわ・・・さき・・・」

同時に乾きかけていた涙が出てきた。

出てきたのは渡しそびられたあの指輪。

医師があたしの名前を知っていたのも分かった。

その指輪の内側に、『R i k u』と刻みこめられていたから。

『結構高かったんだからな！大事にしろよ、『男嫌い』！！』

川崎のあの時の言葉がよみがえる。

ちゃんとあたしから伝えたい……。

『ありがとう』って——……

「安心してください、手術は成功しましたから」

医師の落ち着いた声。

あたしはその声で心の荷を降ろせた。

「じゃあ今から会って——……」

「そうですね……。意識が戻るまで、ついていてあげてください」

「そうね、あなた陸さんですっけ？一緒にについていてください」

医師の肩越しから聞こえた川崎のお母さんの声。

「目が覚めたとき、あなたがそばにいと、啓は喜ぶかもしれない」

お母さんの目は優しくかった。

「・・・ハイ。喜んで」

川崎の病室は、広く、白く・・・むなしかった。

窓側にベッドがあつて、そこにやっとめぐり会えた、川崎がいた。

数々のチューブで川崎の体は埋め尽くされていた。

「良かった・・・本当に・・・良かった・・・」

あたしは川崎の手を握り締めた。

手の温もりが、体全体に広がった。

聖なる日に奇跡は起こった・・・そういうコトになつてた・・・

でも、それは・・・違った・・・。

病室の外では川崎のお母さんと、医師が話していた。

「啓の・・・啓の普段の日常生活には害はないですよね？」

川崎のお母さんは戸惑いながらも聞く。

「ええ・・・ですが・・・」

医師のその一言の接続語に、川崎のお母さんは不安を抱いた。

「事故のショックで頭を強打していて・・・」

「そしたら・・・そしたらどうなるんですか・・・」

「・・・それは――・・・」

暗い病室の中で、あたしはいつの間に眠っていた。

「あ．．．もう夜なんだ．．．」

窓越しに星を見つめた。

「星が綺麗．．．」

あたしの夜の記憶はこれだけ．．．あとは、意識がない。
いつの間に、眠っていた。

そしていつの間に日差しがにまぶしい朝になっていた。

「今何時だろ．．．」

あたしはベッドにうずめていた顔を上げた。

「!」

顔を上げたら川崎が目を開いていた。

何で起こしてくれなかったの．．．??

起きたなら早く起こしてよ．．．。

でも様子が変だった。

目を開いたままうつろで視線がまっすぐを見つめている。

「・・・目え覚めたんだね・・・良かった・・・」

川崎に話しかけるが川崎の反応はない。

「・・・川崎??」

それと同時に肩をゆすつた。

「っ・・・」

やっと気づいたのか、あたしに視線を向けた。

そのままジッとあたしを上から下まで見ていた。

何で喋らないの?何か言つてよ・・・『たらし』のように、やさしい言葉をかけてよ・・・。

何分ぐらい経つたんだろう。あたしと川崎はただ見詰め合っただけだった。

そして、やっと川崎は口を開いた。

「お前・・・誰？」

『啓くんは頭を打ったショックで、記憶が失われているかもしれません』

第26話＊運命（後書き）

「お前誰？」って、川崎の言葉の意味は何？

第27話＊啓の抵抗

「・・・え？」

『お前・・・誰？』

この言葉があたしの頭に残るだけ。

そして、嫌なほど繰り返す。

目の前にいるのに、こんなに近くにいるのに・・・川崎が・・・遠い？

お前誰って・・・さっきまで一緒にいたじゃない。

エンゲージリング？？ゲージリング？？とか訳わかんないこと言っ
てさあ・・・。

忘れたの??

「川崎・・・どうしたの・・・？なんか変だよ・・・？」

「ヘン・・・？ってか俺、『川崎』っていうんだ・・・」

あれ？ホントおかしいんじゃないの？？

自分の名前も思い出せないなんて・・・、

こんな場面、どっかで見たことある。

えっと・・・テレビだったっけ？

確か主人公とかが、“記憶喪失”になる
…………。

「！？」

あたしはハッとして川崎を見た。

あたしを見て川崎は見慣れない顔をしている。

今にも・・・『お前誰?』と、もう1回言われそう。

川崎・・・ねえ、まさか・・・。

「俺、何も思い出せない」

予想していた展開。これが本当になるとは思わなかった。

これは神様のバツ? だったとしたら何で??

——大切なものを救うためには、1つ大切なものを失わなければならない。

大切な存在の川崎を取り戻して、大切な思い出があったあの記憶を失われた。

一時的な後遺症かもしれない。

そうも思ったあたしは明るくなろうとした。が、

「やっぱり、そうですね」

うしろから、感情のこもった悲しい声が聞こえてきた。

川崎の担当の医師だった。

手術後は輝いていた白衣が、今は黄ばんで見える。

ゆっくりと歩き、あたしたち2人に近づいてきた。

そして――

「啓くん、君の今の言葉からして君は、……記憶喪失になっているよ」

川崎を横目で見つめると、話しが呑み込めていない状態で、ボサッと医師を見ている。

そして、やっと口を開く。

「そうみたいです」

川崎のうつむいた顔が目の神経をつたって大脳へ静かに移動する。

感情と共に。

そっと医師があたしの耳元で言った。

「君がどう言おうが彼は君を思い出せない。自分のことすら分らないんだから・・・」

ズキンッ!!

胸がきしむ音がある。川崎に分かってもらえないこの気持ち・・・。

2年生が始まったところと同じ。でも、何かが違う。

あたしばかり川崎のこと知ってて、あっちが知らないなんて・・・辛すぎるっ・・・。

あたしばかり川崎のこと好きで、あっちが忘れているなんて・・・切なすぎるっ・・・。

あたしばかりで・・・川崎は真っ白なんて・・・そんなのって・・・。

耐えられない――。

「川崎の記憶は・・・戻りますよね？」

「そんなすぐには戻りませんよ。最低1年弱はかかります・・・」

1年じゃダメだ。中学卒業を迎えてしまう。

ホントに・・・無理なの？

「川崎・・・思い出してよ・・・あたしだよ？」

「・・・誰だよお前」

「神崎陸だよ。覚えてないの？？」

「覚えてるわけ・・・ないだろ」

「一緒に学級委員やってたじゃない。北島と一緒に・・・あたしか
らかったりして・・・」

川崎の唇が震えていた。何か言いたげだけど声を出さない。

「それと・・・えつと・・・あたしの『男嫌い』——・・・」

「やめろおおおおお！！」

静かな病室に、川崎の言葉はこだましそうだった。

耳にスキズキと残る川崎の声。

あたしは立ちすくんだ。

「え・・・何で？」

あたしは眉をハの字にして聞いた。

川崎は今度は肩が震えていた。治まる気配が無い。

「おっ・・・お前・・・何なんだよ・・・」

「・・・え？」

「おっ、俺が記憶失ったのをいい事に・・・俺の記憶塗り替えようとしてるんじゃないのか!？」

「そんな・・・」

あたしは事実を伝えたかった。

元の関係に戻りたかった。

なのに・・・

「そんなことないですよ啓くん。陸さんは啓くんの記憶を早く取り戻してもらいたくて・・・」

「・・・そんなことない」

「え？」

「俺の今の記憶では信じていた奴に裏切られたんだ！誰も信じられないって自分が言ってるんだ！」

「啓くん・・・」

「俺は・・・俺は自分で記憶を取り戻すんだ・・・絶対に。人からの記憶はもらわない！」

「川崎つ、でもそうしたら時間が・・・」

「それでもいんだよ」

川崎の目は、あたしを捕らえ、睨んでいた。

裏切られたと言うのは夏海のことだろう。

何で夏海の記憶はあるんだろう・・・。

それがあたしには傷を深める理由の1つとなった。

「俺いつ退院できるの？」

「あ・・・1週間もすれば大丈夫だろう」

「1週間も待てつかよ。明後日ぐらいでいいじゃん」

「啓くん、それ以上わがママをいうと生死にもかかわるんだぞ」

川崎は医師からの怖い忠告を受け、治まった。

「分かったよ・・・じゃあ我慢する。でも・・・学校は・・・」

そつだ！学校・・・あと少しでもう終了式になってしまつう。

そしたらクラス替えもしてバラバラになってしまうかもしれない。

それは・・・ヤダ！！

「今日から3日ぐらいおとなしく寝てたら早く退院できるかもよ」

医師からのこの言葉を受けた川崎の目は輝いた。

「おっしや！じゃあ今日から3日間はずっと寝てる！病室から出て
」

川崎の言葉の通りあたしと医師は病室から出た。

そして川崎が寝るといふのならあたしも帰ろうとした。

川崎の病室を静かに振り返りながら。

第27話＊啓の抵抗（後書き）

啓の記憶喪失という展開は予想外でした。

誰も信じないと言う啓の記憶を取り戻すのは難しい……。

陸は、啓の記憶を戻せるのでしょうか？

これからも応援よろしくお願いします。

第28話＊あやまち

俺はひたすら眠り続けた。

早く自分を誰だかを自分で思い出したかったから。

早く学校に行きたい。

そこに何かある気がする。

“自分”を見つけられる気がする・・・。

「っ・・・っ」

まぶたが開いてしまった・・・。

今日はこのくらいでいいか・・・。

「あ、目え覚めた？」

目の前にいるこの女子はおとといから毎日俺の病室に来ている女子だ。

「別に・・・」

俺は冷たくする事しか頭に無い。

こいつは俺の記憶をぬりかえようとしてるかもしれないから。

「聞くけど、お前おとといからずっと来てるけど、俺の彼女なの？」

そいつは答えなかった。

むしろ、答えたくなかったんだろう。

でも、笑顔をこじ作って俺に言った。

「あたしはそんなんじゃないよ」

それを聞いて俺はますますこいつに冷たくすることを思った。

関係ないんじゃないじゃあ関わっても無駄だ。

でも前の俺とは何かと関係があっただらしい。

一緒に学級委員だっけ？？

まあそれは知らない奴ともやるだろう。

俺はそういつの、どうでもいい。

「川崎、調子はどう？」

俺のそんな気も知らずにこの女子は聞いてくる。

俺は底から腹が立ってきた。

「あのさぁ・・・」

「ん？」

こんなことを言ったらたいいていの女子、いや・・・みんな傷つくだろう。

でも、仕方が無かった。

「しつこいんだけど？あんたが俺の好きな奴だったら別だけど」

一瞬、彼女の笑顔は消えた。

でも、それはダメだと思ったのか、口元だけはつりあげていた。
目だけ、笑っていなかった。

「そ、そうだよな。ゴメンネ。じゃああたし、帰るから」

左手をひらひらさせた。

その時、薬指に銀色の光る物が見えた。

指輪・・・??

てかそれ・・・エンゲージリング??

何だ、ちゃんと出来てる人がいるんじゃない。

その女子は背中を向けてドアに向かって歩き出した。
肩が微妙に震えている。多分泣いているんだろう。

彼女は俺の病室から消えた。

少し、後悔した。

今になって何かなくしたような気がする。

前にもあつたような気がする。

これは・・・気のせい？

その後、親友だったという“海”が来た。

俺に同情して涙を流してくれたけど、さっきの女子のことが頭から離れない。

なんだか知らねえけど、これって俺らしくないんかねえの？

海からは俺は前『たらし』だったと聞いたが全く覚えていない。

今日話されたのはそれだけだった。

あとはただのバスケットの話で海は帰った。

もう来客は来ないと思った。

でも、『失礼します』と俺の病室のドアが開いた。

「啓、大丈夫？」

懐かしい気がした。

その容姿は一目ぼれしてしまいそうだった。

そしておとなしいしぐさでイスに座る。

「倉木 夏海だよ?」

でも、思い出せはできなかった。

何なんだ?違和感?この子は俺の何なんだ・・・?

そうすると、彼女は少し大きめの箱を俺に差し出した。

「あんたの好きなマフィン、わざわざ作ったんだよ?だから・・・はやくあたしのこと思い出してね」

俺はその目を見た。

つぶらで愛しげなまなざし。

俺は箱を受け取って開けた。

中には4つのマフィン。

「俺・・・これが好きなのか?」

「前もおいしって食べてくれたじゃない」

一口、かじった。

「・・・おいしい・・・」

彼女の笑顔は輝いていた。

俺はそれで確信してしまったのかもしれない。

「もしかして・・・俺が好きなのやって・・・お前なのか？」

彼女はもう1度笑った。

「そうだよ」

やっと思い出した・・・俺が好きな奴は、
“夏海”だったんだ。

俺の心は、
“夏海”に動き出した。

第28話＊あやまち（後書き）

いきなりの夏海の登場。

そして誤った記憶・・・。

啓の心は夏海に動きだしてしまった。

陸はどうなるんでしょうか？

これからよろしく願います。

第29話＊通じ合えたと思ったのに

『あんたさあ、しつこい』

夢の中でこの言葉が何度も何度もこだました。

あたしって、川崎にとってなんでもなかったのかもしれない。

分かってもらうようなことも・・・できなかった。

ピンポン——・・・。

ベルが鳴ったのであたしがドアを開けた。

眠い目をこすっていたがすぐに誰なのか分かった。

「真奈美・・・北島・・・」

2人が立っていたことには驚いた。

「啓に、ひどいこと言われたんだろ？すぐに分かるよ」

北島の口元が笑った。

あたしはあの聖なる日の悪事のことを真奈美と北島に全部話した。

「陸・・・つらかったねっ・・・」

真奈美まで泣き目になっている。

「あの時・・・何て言おうとしたんだろう」

「え？」

「あの時・・・何て言おうとしたんだろう。あの時事故なんてなくて“あいつ”がこんな事にならなかったら——・・・どんなに

変わってたんだろう」

「その指輪がそうなの？」

真奈美はあたしの左薬指を見て言う。

「てかそれ・・・エンゲージリングじゃねえ？」

北島が口をはさむ。

エンゲージリングって、意外とみんな知ってるんだ・・・。

「陸、それ自分ではめたの？」

「いや・・・あたしは普通右手の人差し指にはめるけど、川崎が・・・」

真奈美と北島の2人は、顔を見合わせた。

「啓は・・・それをエンゲージリングだって知ってたのか？」

「そうだけど・・・」

2人がどういう意味で聞いているのか分からなかった。

「何々？2人とも。エンゲージリングって何なの？」

「陸……意味知らないの？」

「え……うん」

「……『婚約指輪』のことなんだよ」

「婚約??婚約って、結婚するときの？」

「それって、川崎……あたしのこと……」

「啓は、たぶんもう陸ちゃんのこと好きだったのかもしれない」

「川崎が、あたしのことを？」

「一瞬心がスツキリと晴れた。」

「でも、今じゃおそい。」

「あ……でも——…」

「何？海。どうした？」

「啓、自分の好きな奴分かったって言うてた」

「——え？」

あたしと真奈美の声が重なった。

「それが……夏海なんだってさ」

あたしの心が曇った。

「夏海が昨日病院来て川崎にマフィンやっただってさ。そしたらその味懐かしいって……。もう決めちゃったらしいんだ」

「そんな……」

雲行きが怪しくなつてやがて大嵐になつた。あたしの心の中は。

第29話＊通じ合えたと思ったのに（後書き）

お互いの心は繋がっていたのに・・・。

それが思わぬ方向へ行ってしまった。

これからも応援よろしくお願いします。

第30話＊薄い記憶

俺は真っ白な世界にいた。

ここは――??

俺は誰??

「――ちね」

「え？」

誰かが叫ぶ声がした。

左右前後分らないこの世界で俺は振り向いた。

真っ白なワンピースを着ていた女の子。

どこかで見たことがあった……。でも、覚えがない。

「——わさき」

俺を知っている気がした。

声からしてかれている。泣いているのか？

太陽も光らないこの場所でその女の子の頬が光った。

涙？？何で泣いてる？俺のために？

「泣くなよ……」

そう言いながら俺は女の子に足を踏み出した。

女の子はその場から動かない。でも、なぜか追いつけない。

それでも俺はひたすら足を前に進める。

「くそっ——・・・」

俺はやけくそで走りだした。

でもその距離は縮まらない。

むしろ距離が遠のいてきている。

「何でだよっ・・・」

汗がばたばた鼻のくぼみを通って俺の着ているシャツをぬらした。

俺、何でこんなに走っているんだ？

知らない女子なんてどうでもいいじゃないか。

でも、追いつかなきゃ、『泣くなよ』って言ってやらなきゃ、何も失う気がした。

何だよ？何でこんなに俺一生懸命なんだ？？

何も思い出せない・・・何も分からない。ひたすら、“あいつ”の

ために走っている。

お前は誰なんだよ？俺、お前のこと知りたい。心が言っている。

「おっ・・・お前はっ・・・」

息切れをするのどに無理をさせて俺は走りながら叫ぶ。

真っ白の世界だと走っていても何も感じない。

景色だけは俺を馬鹿にしているみたいだった。

「だっ・・・誰・・・なんだよっ！！」

知りたい知りたい知りたい！！分かりたい！

お前は誰なんだよ。俺、お前知ってる気がする！

分からない！でも俺、お前が泣いてる姿見ると懐かしいんだ。

心が動くんだ。

お前だけが俺を知っていてもお前が傷つくだろ？

お前のこと今分からないと、全部失う気がする。

違う方向へ行ってしまうかもしれない。

失いたくないんだ――！！

「はあっ……はあっ……」

俺は気づいた。いつの間に汗は“涙”という液体に変わっていた。

伝えたいことがあったんだ……。でも、それがお前か分からない。

だから、教えてくれよ？何かあるんだ！なにかあるから！

待ってくれよ――……。――。

「はあっ・・・はあっ・・・」

俺はやわらかいベッドの中にいた。

「・・・夢か？」

夢でもリアルがあふれていた。

Tシャツは汗だくでぬれていた。

まるであの夢のように。

「あ、啓。おはよ」

玄関を出ると女の子がいた。

でも、夢とは少し感じが違った。

ロングの髪が風になびいている。かわいくて、守ってやりたい！っ

ていう感じだけど、強気のようなオーラも出ていた。

「夏海」

彼女は俺が入院したら毎日お見舞いに来てくれた。

俺の記憶が見れるように写真を持ってきて俺に見せたりしてとても楽しんだ。

しかも彼女は俺の好きな人らしい。付き合ってる・・・というわけでもあるらしい・・・。

それは夏海からすべて聞いただけ。他のやつに否定されなくなかったから。夏海が俺の彼女でよかったから。

そう思ってた。

今日から俺は学校。昨日退院した。傷は完全じゃないけどほとんど完治していた。

でもひとかけらも取り戻せていない俺の人生の記憶がある。

自分の名前すら忘れてしまったんだから。友達・家族・大切な人までも残っていなかった。

「啓が学校来てくれるって嬉しいな」

夏海は明るい笑顔で言う。

俺も無理矢理笑ってみた。

「啓、そんな無理に早く記憶なんて取り戻さなくていいんだからね？」

夏海は心配そうに言う。

「え？俺お前のこと早く思い出したいのに・・・」

「ダメ。前のあたしなんて知っちゃダメだよ。今なら優しくしてあげるから」

前の夏海が意地悪だったなら、今が優しいから思い出さなくてもいいかもしれない。

心の片隅でそう思った。

俺はあまり話さずに学校へと向かった。

全然懐かしい感じもせず、俺は夏海と靴箱へ向かった。

クラスで向かい合わせで並んでいた靴箱は、1・2組3・4組5・6組と分かれていた。

夏海に3組だよと教えられ、俺はそこへ向かった。

そこには、見覚えのある女の子がいた。

「・・・川崎・・・」

夏海と違い、肩までの髪のセミロングの女の子。

こいつは病院で俺が目覚めたとき俺の記憶をぬりかえようとした。

でも、学校を思い出せなかったのに目が合った瞬間、昔の光景が見えた。

でも俺の頭の中には、ジャージしか思い浮かばなかった。

ジャージが何なんだ？

今俺はジャージを着ない。

あまり着なかったような気がする。

頭が痛くなってきた。

思い出せばするとするほど何かなんだか分からなくなってしまう。

目の前で戸惑っている女の子。こいつ・・・誰だったんだっけ・・・
??

特別に感じた。でも、なぜか信じられない。

「啓？」

後ろで声がした。

夏海だった。

夏海は俺の目の前の女の子に目をやると顔が曇った。

「啓、行こうよ」

俺の体は勝手に動いて、俺は女の子に何も言わずに夏海の言っままに立ち去った。

夏海？何で“あいつ”を避けたの？“あいつ”と何かあるの？

“あいつ”、俺と夏海がいると不安そうな顔してた。

“あいつ”に聞いてみたかった。

でも、心にしまっておかなければならないような気がした。

……—何故だろう？？

第30話＊薄い記憶（後書き）

啓は早く思い出したいのに、それを夏海が邪魔をする。

このまま“彼女”として啓の記憶を利用する夏海。

これからが見所かもしれません。

第31話＊忘れないで

教室まで全力疾走。

夏海と川崎がいる時点であたしの心は灰色に染まった。

川崎は今夏海の彼女だから・・・

川崎が決めたことだから・・・

“あいつ”が思い出してくれないから・・・

あたしの顔は机に沈んだ。

息切れと涙。

あたしの視界をぼやけさせた。

“あいつ”があたしを信じないなら・・・あたしには何もできない。

“あいつ”の記憶をよみがえらせることもできない……。

どうすればいいの？

“あいつ”は完全にあたしが“あいつ”のこと好きだだって忘れてる。

しかも夏海の彼氏。

あたしがもう1度告白しても、“あいつ”は夏海を信じて……。

あーもう考えたくない！

あんな事故さえなければ……川崎の記憶が無事だったら……。

今のあたしたちはどんなに変わっていたんだろう？

川崎がくれた“エンゲージリング”この意味をしった時は1番悲しかった。

川崎が・・・“あいつ”が本当にそういう意味を知っていて“これをくれたのなら・・・”。

でも、もう過去は戻ってこない。

現実を受け止めるしかない。

「川崎・・・」

あたしは顔を上げた。

「・・・北島??」

あたしの目の前の席に、北島が横向きで座っていた。

「・・・泣いてたの?」

あたしの目じりを見て言う。

「ああ・・・あくびしてただけで・・・」

「無理すんなよ・・・」

北島の手があたしの頭をなでた。

触れた瞬間体がビクツと反応した。

「あ・・・ごめん。男嫌いまたか・・・」

体が受け付けないんだ・・・。

「ゴメン・・・ね?」

「あやまりたいのはこっちだよ」

「え？」

「啓のやつ、ただでさえ陸ちゃんのこと傷つけたのに、また・・・前よりもひどく・・・こんな形で傷つけるなんて・・・」

「北島・・・」

「いつそのこと陸も記憶失えば良かったのに・・・陸は記憶失っても、俺がいたのに・・・」

北島は顔をうつむかせていた。

「でも・・・川崎が決めたことだから」

「このままでホントにいいのか？」

「それは・・・」

「どうなんだよ？」

北島はいつもと違いけわしい表情だった。

「俺はこのままで終わりたいくない。陸が今まで頑張ってきて啓をあんなに变えたのに・・・俺はこのままじゃやなんだ」

「・・・」

「陸は・・・陸はどうしたいんだ？」

「あたしは・・・」

顔を上げた。

「川崎に、本当の記憶を思い出してほしい」

「その表情、いいじゃねえか」

北島の童顔が輝いた笑顔になった。

北島が席を立つてあたしに言った。

「俺のこと、海でいいから」

「あ、え・・・はい」

「あ、で、これだけは覚えといて」

「ん？」

「俺はそれでも、陸のこと好きだから」

海は、教室を出た。

『たらし』が言いそうに軽いせりふ。

あたしはぼうぜんとしていたが、やがて顔が熱くなるのが感じた。

北島じゃなくて海だっけ……が……あたしを？

本気？？たらし？？

一緒にいたぶんの嬉しさもあったけど、寂しさもあった。

海に告られても、あたしには川崎だけだから。

海のこと好きだけど、それよりも川崎のほぅが好きだから。

よし、この気持ちを忘れずにいつ。

どんな壁があっても。

第31話＊忘れないで（後書き）

ご感想よろしくお願いします。

第32話＊信用の勝負

「陸」

あたしは放課後夏海から呼び出しをくらった。

放課後の廊下には誰もいなかった。

吹奏楽部のハーモニーがどこからの教室から聞こえてくるだけ。

あとは、沈黙だった。

鋭い目つきであたしを睨む夏海。

あたしは少しひるんだが、それに耐えてあたしも弱みを見せなかった。

「なっ・・・何？いきなり」

かみそりに言い切った。

「啓のことなんだけど」

またなんか言われる。

川崎に近づくなとか？川崎があたしを嫌ってるとか？

そんなの、本人の口から聞かないと分からない。

でも実際、夏海の言う内容は違った。

「真っ白な記憶の中で、啓はあたしと陸、どちらを信用してるんでしょうね？」

余裕のある笑みであたしに問いかけた。

「そんなの・・・本人しか分からないじゃない」

「ずいぶん余裕だね。でもほとんど分かってるんじゃない？」

「え？」

「真っ白な記憶からやり直せば啓はあたしを選んでくれた。勝負はもうついたんじゃない？」

「そんなのまだ・・・分からないじゃない」

「じゃあ、その目で確かめてみるからね」

何を企んでいるのか分からないでも、いやな予感はよぎっていた。

「陸、まだ『男嫌い』なんでしょ？無理しないほうがいいよ。啓はもうあなたの『男嫌い』を直すことには協力なんてしてくれないわよ」

ドクンッ。

今思えばそうだったのかもしれない。

あの4月の当初、“あいつ”はあたしの『男嫌い』を面白半分ですすことに協力した。

あたしに『男嫌い』がなんかつたら・・・。

学級委員に立候補する勇気がなかったら・・・。

あたしは川崎と一切関係なかった。

思い出の中には夏海のおかげで関係を持てたこともあった。

自然に話せた。笑い合えた。

でも、もうあたしには唯一の昔の“味方”はいない。

あたしが・・・負け??

「夏海？」

廊下の窓からは川崎が顔を出した。

「啓、ちょうど良かった」

あたしにはなんとなく夏海がこれからすることが分かった。

てる?。」

「啓は、あたしと陸、どっちを信用し

川崎は顔の表情を変えなかった。

でも、黙ったまま何も言わなかった。

迷っているの？それとも言いづらいの？？

「俺は今は、夏海しか信じていない」

夏海には期待通りの言葉だった。

口元にかすかに笑みを浮かべている。

「さすが啓、彼女だもんね」

夏海の言葉全部が胸に突き刺さる。

抜こうとしても抵抗が大きすぎて抜けない。

痛い・・・痛い・・・。

ぼろぼろと涙が頬を伝って落ちてくる。

「陸、勝負はついたんだから。2度と、啓には近づかないでくれる？」

円満な笑みを見せる夏海。

あたしにとって嘲笑うかのような笑顔。

でも、啓の表情が変わった。

あたしのこと、見ていた。

何か思い出すような目で。

でも、あたしはその場にいることに耐えたれなかった。

すぐに教室を飛び出した。

涙が視界を邪魔する。

そういえばこの頃泣いてばっかだなあ・・・。

——もう、
“あいつ”と昔には返れ
ない。

勝負に負けたんだ・・・あたし。

「夏海、あの人誰だったわけ？」

俺は泣いたあの子が帰った後、夏海に聞いた。

「え、あの子？ううん、別に気にしなくてもいいんだよ。ただのク
ラスメイトだったから」

「ふうん・・・」

でも、俺が夏海を信用してるって言って泣いた・・・。

あの子、俺のことが好きだったのか？

何かひっかかる・・・。俺、大切なこと失ってる気がする。

一番思い出さなきゃいけないことが。

「俺・・・お前のことが好きなんだよな？なのに・・・あいつが泣
いて走ってたとこ見たら、なんか切ねえんだ・・・。何でだろ？何
でこんなに胸が痛いんだ？」

夏海は何も答えなかった。

目を丸くして目をそらし、黙っているだけだった。

何かあるのか？夏海と“あの子”の間に。

俺と“あの子”の間に。

失ってはいけなかった、大切な物が――。

第33話＊2度目の協力

雲ひとつない空をあたしは眺めていた。

左手の薬指には銀色に光るエンゲージリング。

もうこれはずしたほうがいいのか？

さっきまで真奈美が隣にいたんだが部活で去ってしまった。

今、この屋上にはあたし1人。

頭の中では分かってる。

あたしは夏海に負けたんだって。

あたしはもう川崎の“恋人”にも、“友達”にもなれない。

せめて・・・“友達”ぐらいなりたかったな・・・。

「今思えば・・・川崎のことこんなに好きだったんだね・・・」

そうだ。今思えばだ。なぜか嫌いだった川崎に心が動いた。

それはいつ？学級委員になったとき？体育祭？夏休み？合唱コンク

ール？修学旅行？

たくさんあればあるほどの思いでほど細かいことが思い出せない。

何で“あいつ”にひかれたんだろう。

「川崎・・・あたし・・・どうすればいいのさ？今のあたしじゃ、何にもできない」

あたしはのどから声を出すのが精一杯になってきた。

大好きだよ？でも、伝えられない。

触れることさえ、近づくことさえ・・・あたしは、できないんだ。

またあたし・・・泣いちゃうのかな？？

ポンポン。

「？」

誰かあたしの肩をたたいた。

真奈美かな？もう部活終わったの？そんなじか・・・

「!」

肩をたたいたのは“あいつ”だった。

口元の端に笑みを浮かべていた。

「なーにやってんの？」

ズササササッ。

ものすごい摩擦音を立ててあたしはその場から離れた。

「あ・・・あり？」

川崎は呆然としていた。

「どうしたの？ねえ・・・」

川崎の手が伸びた。

あたしは小さく縮こまってしまった。

「え？俺に触られんの、そんなにヤダ？ひどいこと言ったから？」

あたしは首を横に一生懸命横に振った。

違う、違うの！

あたしは……

「男……嫌いか？」

川崎が答えを口にだした。

あたしは何で？と川崎を見ているしかなかった。

「や……何で分かったんだろ。前にもこういう人いたような気がするから……」

川崎は頭をかく。

「誰か覚えてねえんだけど、『男嫌い』って……」

川崎の記憶の中に“あたし”はいなかったわけじゃない。

『男嫌い』として“あたし”がいたんだ……。

「お前のこと信じてないわけじゃないんだ……。俺は誰も信じられなかったから。友達と好きなやつしか信じられなかったから。お前のことはどうしても……。でも、なんか懐かしいんだよ。お前のこと見てたら」

川崎のこの言葉は本当だった。

だって、川崎のこんな表情見たことなかったんだもん。

孤独で……。寂しそうな。

「川崎つ……。あたし……。」

「なあ」

あたしの言葉をさえぎった。

「お前の『男嫌い』治してやるから俺の記憶取り戻すの手伝ってよ
へ」

地面にへたりついているあたしの前にしゃがんでニコリと笑いかけた。

あたしの『男嫌い』・・・治してくれるの？

「なっ、協力してくれる？」

川崎は握手を求めて手を伸ばしてきた。

でもあたしは手を伸ばせない。

「おっと、そうだったね」

川崎は手を下ろした。

今の川崎は『たらし』なんかじゃない。

嘘の優しさなんかない。本当の優しさだよ。

心の底から。

「協力・・・するよ」

「え？今しゃべっ・・・」

「川崎があたしのこと思い出してくれるなら、協力するから!」

あたしはとうとう立ち上がった。

川崎にはその勢いは分かってくれたみたい。

CHUッ

「よろしくなっ、『男嫌い』!」

川崎の唇があたしの頬に触れた。

その瞬間、懐かしさと『男嫌い』の症状がよみがえってきた。

「うつきや——!!!!」

放課後の屋上に、あたしの叫びは大きく響いた。

第33話*2度目の協力（後書き）

川崎の心からの優しさ。

2度目の『男嫌い』を治すといってくれた川崎。

記憶を取り戻させるチャンスも出てきました。

陸のこれからの成長を見てくれたら嬉しいです。

これからも応援よろしくお願いします。

第34話＊裏切りの正体

「おはよう。陸さん」

靴箱、あたしの横に“あいつ”が立っていた。

“陸さん”って呼ばれ方は少しぎこちなかったけどすぐに慣れた。

名前で呼ばれるの、初めてだったから。

「何か『男嫌い』って言うの懐かしいんだあ。陸さんなんか覚えてる？」

川崎はニコニコしながら聞いてくる。

覚えてる？っていうか、あんたがあたしの『男嫌い』治すとかいつてたじゃん！

と、言いたかったが

「んー、あたしもあんまよく覚えてないんだよね。川崎くん次第だね」

陸さんと呼ばれて呼び捨てで返すのが失礼と思ったから『くん』付けをする。

「そっか・・・」

やっぱりホントのこと言ったほうが良かったかな・・・？

「やっぱり違う。川崎くんがあたしのっ……『男嫌い』をつ……」

「あ……」

え？思い出した？

「今思ったけど、俺のこと『川崎くん』じゃなくて『啓』でいいよ？」

え……？？それですか？

「えと……あの……啓……くん？」

「あー、いや。呼び捨てでいいから」

け……い？

「刑？」

「漢字違うぞ」

よく分かるな……。

「……啓？」

「そうそう」

川崎・・・じゃなかった、啓は満足そうに答えた。

「俺の記憶はそんなにあせらなくてもいいから。陸さんの『男嫌い』を先に治そ」

「あつ、あたしも・・・『陸さん』じゃなくて・・・」

言葉が詰まった。

「じゃなくて・・・」

これ以上言えない。

「陸・・・でいいの？」

あたしが言う前に理解した啓。

あたしは首を縦に振った。

「俺、記憶は思い出せないけどお前のことたくさん知ってるような気がするんだ」

手をあたしの頭に伸ばしてきたが症状が出ると気づいてすぐにひっこめた。

「・・・早く、治そうな？」

「うん・・・」

「あら、啓。おはよう。ついでに陸も」

夏海の登場だった。

夏海が来た瞬間あたしの心はギュツと縮んだ。

啓と一緒にいて、何もされないだろうか。

「何で2人でいるの？」

「たまたま靴箱で会ったんだよ」

「今日はあたしを置いて行ったのによく言っわね」

「え？」

啓は夏海と学校に来てた？で、今日は置いていったの？？

「ふうん」

夏海の鋭い目があたしを捕らえた。

あたしは動けなかった。何も言えなかった。

そつだ、夏海は啓の『彼女』なんだ。

あたしはただの・・・『友達』

最悪の場合、“それ”以下。

「俺、お前とは一緒には登校しないかもな」

「っ・・・!?!?どうしてよ?」

啓はその言葉にためらったが、自信を持ってこう言った。

「今の俺の記憶が、間違っているような気がするから」

「え?」

啓?それって・・・

「俺はお前を一目見て信じ込んだ。だから、お前が言う記憶すべてが正しいと思った」

「っ……………」

「ここにいる陸。お前はこいつが『たらし』とか言つて、『男嫌い』でギャップを見せてどの男にも手え出すって言つてたよな？」

え？何それ、あたしのこと！？

「だから、俺の記憶喪失を機にして俺の記憶を塗り変えて夏海が彼女だったのに陸が啓の彼女になつてしまつて言つてたよな？」

えと……………何のこと??

「でも、実際は全然違つた。陸の『男嫌い』は嘘じゃなかった。涙も、苦しみも、笑顔も……………全部本当だった。作り物じゃなかった」

これ……………思い出してるの??

「夏海！！お前が俺を昔裏切つたやつだったのか!？」

え……………それって……………。

「ばっかばかしい」

「え？」

夏海は開き直った。

「啓、あんたは今信じられるものはないわ。その子だって、いつ変な嘘をつくか分からないじゃない。あんたが本当に信じていたなら、記憶だってすぐ戻るんじゃないの？」

「それは・・・」

「答えは後でいいわ。ここで話すのも時間の無駄だし」

夏海は笑みを浮かべて、教室に戻った。

「お前は・・・」

「え？」

「お前は・・・俺の記憶を塗り変えようとしてるのか？」

啓は突然聞いてきた。

「そんなことっ・・・」

「やつぱ・・・早く思い出してえよ」

「っ・・・」

「お前が本当にどういつやつなのか、思い出したいんだ!!」

啓はあたしの症状はどうでもよくなったのか、両肩をつかんできた。

「陸！お前はいつたい・・・何者なんだよ・・・？何で俺の心がズキズキするんだよ・・・」

啓の真っ黒な瞳は、悲しげにあたしの瞳に訴えかけてきた。

第34話＊裏切りの正体（後書き）

更新がずいぶんと遅れてしまいました。

今回も少し短いですが評価をくださったら嬉しいです。

これからも応援よろしくお願いします。

第35話＊啓の勘違い

啓の瞳はあたしの目を突き刺す。

「なあ！？俺はお前のなんだったんだ？」

追い詰めたような目で啓はあたしに辛い視線を刺し続ける。

両肩をつかんでいる手にも力が入ってきた。

・・・かなり痛い。

「っ・・・た・・・」

すると、ハッとして啓は両手を離れた。

「あ、ごめ・・・」

あたしは力が抜けてしゃがみこんだ。

「・・・分かんない」

「・・・え？」

「啓があたしの何だったか、分かんないやつ」

あたしは苦笑いで笑顔を作った。

啓の眉はよがんだ。

「何でもなかったのかもしれないね！何でも・・・」

あたしは啓から少しずつ離れた。

「待てよ・・・」

啓はあたしの左腕をつかんだ。

あたしの肩の高さであたしの手を見つめた。

「・・・」

少し間があつたが啓の手の力が抜け、自然に腕が落ちた。

「陸・・・」

「え？」

「・・・やっぱ何でもない」

啓はとぼとぼと教室へ歩いて行つた。

啓に見つめられた左手を見た。

その薬指には、きらきらきらめく啓からもらったエンゲージリング・
・・・。

「思い出したと・・・思つただけだな」

あたしの独り言は悲しかった。

あたしはずっと変わらない。『男嫌い』だった時と同じ、待っている。

好きなのはあたしのほうなのに・・・何でこんなに変わらないんだろっ？

啓がほかの女子と話していたら、心がムカムカしてくる。

こんなあたし、なかったら・・・啓の記憶さえ戻せない。

一人で机にうつむいていることしかできない。

「りーくーさんっ！」

目の前に現れたのは海だった。

そっいえば海ったらあたしのこと・・・。

急に顔が赤くなるのが感じた。

「うわっ！？そんな顔赤らめないでよ！俺まで恥ずかしくなる！！」

ふざけ半分でいうと海は顔を両手で隠した。

「バツ力だなあ・・・」

あたしは思わず笑って口に出した。

「・・・え？」

海は口をポカンと開ける。

「やっと陸、俺に本音出してくれるようになったなあ」

「え・・・？」

「だって、いつも見てて思ったよ。陸は無理してるって」

「あ・・・」

「だから放って置けないんだよなあ・・・。お前のこと。今の笑顔も嘘じゃないし」

「嘘・・・??」

「だって、いつも俺が見るときは陸の笑顔、固いんだもん。無理して笑ってる感じでさあ・・・。今は十分、陸の笑顔だよ」

成長したのか、海の座高はあたしと同じくらいになっていた。

「ん？何で分かるかって?? 『愛の力』だよ」

海は歯を見せて笑った。

こんな海は初めてだった。

愛の力・・・???あたしでも出せるの??

「陸ちゃん、頑張ってみなよ。啓の気持ちは本当だと思うから」

あたしは啓を見た。

女子との会話で楽しそうな表情を見せているが心の底は笑ってない。

あたしには分かる・・・。これが、『愛の力』?

「陸ちゃんには分かるだろ?あいつが笑ってないの。心の底では。それが、『愛の力』なんだよ」

「っ・・・」

「お互い分かり合ってなくてもいいんだよ。すれ違ってでもいいんだよ。だからぶつかり合うよう・・・頑張って!!」

ドンッ。

海はあたしの肩を強く押した。

「わっ・・・!!!??」

あたしは啓のいる方向へとよろめいた。

正直、啓とは今話せない。あたし、分かるだけで何も変わってない。

でもっ・・・

「ってゝ・・・。陸？どうした？」

見事、あたしは啓にダイブしていた。

「すっ・・・すみせん・・・」

「つく、海の仕業だろ？？大丈夫、後でしめとくから」

啓は口元をなめた。

「いつ、いいよっ！！むしろお礼言いたいぐらい！！」

あたしは両手を振った。

「え・・・？お礼？」

ハッ！！

あたしっては何てことを！？とっさの言い訳で気づかなかった！！

「いや・・・こけそうなところありがとっ・・・」

「あ、俺？？いーよ別に」

啓は顔をそらす。

「ほら、海が見てたら何て思っただよっ、迷惑だろ？」

「え？」

あたしは凝固した。

「あたし別迷惑でも・・・」

「お前が迷惑しなくても、海に迷惑だろ？」

「・・・???何で？」

何で・・・海が迷惑？

「お前ら、付き合ってるだろ？」

「え？」

あたしは何も口に出せなかった。

第35話* 啓の勘違い（後書き）

投稿がかなり遅れました！！

啓の勘違い！いったい理由はなんなんでしょう？

これからの展開が自分でも楽しみです！

感想・評価よろしく願います。

第36話＊狂い

「え？あたしが、海と？」

何で？？いきなりそんなこと？

「海のこと、好きなんだろ？」

「えっ？！」

あたしは顔が赤くなつたに違いない。

「！？」

啓があたしの反応を疑つたらしかった。

「やつ、ちが・・・」

「否定できないんじゃないの？」

「だからっ・・・」

「その・・・左手の薬指の指輪」

「・・・え？」

あたしはふいに自分の左手を見た。

「それ、海にもらったんだろ？」 エンゲージリング」

その言葉を聞いてあたしは分かった。

啓はあのとこ思い出したわけじゃなかった。

きっと、勘違いしたんだ。あたしがこれを、海からもらったって。

ガタンッ。

啓は何も言わずに席を立ち、教室を出た。

休み時間が終わろうとするとき、教室に戻ってきて、黙って席に着いた。

後で・・・後で言わなきゃ。

『啓がくれたんだよ』って……。

これ言っと思いついてくれるとは思わない。

でも、本当のことだから。

言わなきゃ……。

『お昼の、放送の時間です』

給食の最中、昼の放送が鳴った。

『各クラス学級委員1名は、放課後、視聴覚室に集まって――』
・
・

各クラス1名なので啓に相談しようとした。

でも、朝にあんなことがあって気まずい。

「川崎くんあんまり記憶戻ってないみたいだし、神崎さん行ってくれる?？」

先生の押し付け。

「・・・はい」

あたしは仕方なく引き受けた。

啓のほうをチラリと向いたが、一瞬目が合っただけでそらされた。

「っ・・・」

絶対・・・言っんだ。

「うわーん！！こんなに遅くなるとは思わなかったー！！」

時間は6時半過ぎ。

部活終了時刻は終わっており教室はガラシ。

「何でこんな遅くなるのよー！！絶対今日言うつて決めたのに・
」

あたしはカバンに教科書を急いで詰め込んで啓がまだいるか探しに行こうとした。

ピタッ・・・。

教室を出ようとしたとき、話し声がした。

なんとなく雰囲気で邪魔しちゃ悪いなあ・・・なんて思って覗いて見た。

「・・・」

啓と夏海だった。

夏海の様子が明るい。

よく聞き取れなかったのあたしは耳をこらした。

「啓、あたしにキスぐらい、できるよね？」

啓は、表情を変えなかった。

第36話＊狂い（後書き）

誤解を解こうと決意したのに、狂ってしまった陸の決意。

夏海の突然の迫り。

啓はどのように対応するのか？？

これからも応援お願いします。

第37話＊キスの痛み

『キスぐらい、できるよね?』

あたしが驚いたのはその言葉の意味じゃなかった。

キスぐらい。という言葉。

キスぐらい??それ以下には何があるっていつの?

てか、啓とキス!?

「はっ?!何で俺がお前と?!」

「そんなのっ・・・恋人同士だからじゃない!!」

夏海は頬をふくらせて言う。

「やつ、俺別に恋人同士なんかじゃ——」

。。。。。

「・・・ね？」

あたしは今見た。

背伸びをして、夏海の唇が啓の唇に重なったのを。

「っ・・・」

啓は何も言えずに放心状態。

「昔もいろんな人にキスしてたんじゃないの？『たらし』だったし？」

『たらし』懐かしい響き。

啓は思い出すどころか夏海の行動に何もいえない状況。

啓はゆっくり指先に唇をあてた。

今の感触はなんだったのかと言うように。

「お・・・俺・・・今・・・」

「何か思い出した？？あたしのことで」

あたしは耐えられなくなった。もう限界だった。

逃げたかった。でも、逃げ道は啓たちがいる廊下しかない。

「・・・誰がいる」

夏海があたしの雰囲気をとらえた。

「隠れてないで、出てきなさいよ。そこにいるのは分かってんだから」

夏海の視線はあたしがいる2・3の教室。

もうばれてる。今出たほうが身の為かもしれない。

あたしは立ち上がってゆつくり廊下に身を出した。

「やっぱり、あんたなんだ」

夏海はニヤリと笑う。

「見てたでしょ？さっきの」

「・・・」

あたしはゆつくりうなずいた。

「あたしの・・・勝ちね？」

首を横にそらして満悦の笑みであたしを嘲笑う。

啓は何も言わないままあたしたちの会話を見つめている。

「あんたも啓に自分からキスすれば？そしたら勝負も引き分けかもよ？」

「っえ……………」

あたしは反射的に啓の顔を確認めた。

目を丸くしていた。

唇を指でなぞっていた。

あたしには・・・できない。

もう啓の顔なんて見れない。

あたしは、帰る方向へとトボトボ歩き出した。

「陸――!!」

背中の方では夏海の声がした。

「あんたの負けねー!!」

あたしの頭にこきました。

靴箱までようやく来ると膝の力が抜けてくの字に曲がって膝をついた。

「夏海と・・・“あいつ”・・・キスした」

まだ受け止められない現実。

「あたしがキスすれば・・・引き分け？」

あの時の啓の表情がよみがえってくる。

「そんなこと・・・できるわけ・・・」

でも、まだ今なら間に合う。

「やめて・・・あたしなんかできない・・・」

話かけるにも苦勞する。身体が触れるのにも精一杯。

1番あたしにとって感じる部分が触れられるはずがない。

「“あいつ”だから離れたくないの。“あいつ”だから受け止めたいの。お願いだから体っ・・・動いて・・・」

あたしは1番の孤独を感じた。

「あんだ、大丈夫なの？ 隈がひどいよ？」

朝の登校。真奈美が聞いてくる。

昨日は全然眠れなかった。それも泣き疲れて。

というよりか、啓が事故にあってからまともに寝ていない。

「・・・大丈夫」

「もっつ！！とか言って前の時みたいに倒れるんじゃないの！？」

「じゃあ・・・大丈夫じゃない」

「じゃあって何よ・・・」

真奈美の呆れ顔。

「なんかあったでしょ？」

「いろいろ・・・」

「耐えられなくなったらいつでも言ってね？」

「うん・・・」

でも、真奈美に迷惑はかけられない。

自分でできるところまで、自分でやろう。

靴箱でいつも会っはずの啓が今日はいない。

「あれ？」

上履きはもう靴に変わっていた。

「あ……教室か」

教室で1人、啓は窓にうつかかって外を眺めていた。

何も言えない。それも、啓は夏海とキスしてしまったんだから。

あたしにとっては最大のダメージ。

「あ、陸……。はよ」

「……おはよう」

曖昧な啓の笑顔。

どのような表情を見せたら良いのか分からない。

「俺……ゴメン」

「え？」

「何であやまつてるか分かんねえ。でも、陸になんか悪いことした」

「え．．．？あの．．．」

あたしに？

「あのっ．．．夏海にキス．．．されても．．．思い出せねえんだよ．．．。何も」

啓は顔をそらす。

すでに赤面。

「ししし．．．しかも勝負なんてお前っ．．．『男嫌い』のくせにできないしっ！っと思って．．．」

「うん．．．できないよ」

受け止めたけれど、離れたくないけど、体が受け付けない。

キスは、勝負するようなことには使わないから。大切な、ファーストキスだから。

「気にしてないよっ！」

明るくあたしは言った。

「そうか．．．」

啓の表情は、さっきより曇ってしまった。

夏海は日常生活では普段のおとなしい、
かわいい女の子を演出して
いる。

あたしと啓の前だけで、裏の夏海を見せる。

そんなの・・・ずるいよっ・・・。

「啓」

「ん？」

「今日の放課後、いい？」

「え？」

啓の表情は朝と比べものにならないくらい曇っていた。

「別・・・いいけど」

あたしは決意して、いいそびれた事を言うことにした。

啓がくれたエンゲージリングまでの、思い出を思い出してもらおうに。

第38話*『男嫌い』が消えた日

思い出してもらっんだ。

あたしのこと、悪く思っても、昔のままの“あいつ”がいい!!

お願いだから、全部じゃなくて良いから。

あたしのことどう見てたのだけでも思い出して!!

人の気配がなくなった教室にあたしと啓は残った。

幸い今日は夏海は休みだった。これ以外もう、チャンスはない。

「・・・何？」

啓はまゆをよじらせている。

そうだ、あたしが喋れなくちゃ始まんない。

「ねえ、コレ覚えてる？」

あたしは掃除用具入れの前に立った。

「あたしさあ、2年の最初の始業式の時ドアにぶつかって・・・その衝撃でこのドア開いてモップ出てきてあたしモップまみれになったんだよなあ。そしたらそのとこ啓に顔見されててさあ。ほらこんな風につ！？」

再現で開けたつもりがモップは雪のなだれのように崩れ落ちてきた。

いつの間に、あたしはあの時のようにモップまみれ。

「いったたゝ・・・」

「プッ」

啓は今日初めて吹きこぼした。

「あ、笑った！」

「え？」

「ねえ、思い出した？」

「あ、ゴメン何も・・・」

「そうかつ」

あたしは常に明るさを保った。

まだ・・・次があるから！！

あたしは次々教室から体の表現を使って話した。

でも、あたしが啓を好きだったことは言わなかった。

啓と関わる思い出は全部、言わなかった。

だから体育大会の事、『たらし』のこと、合唱コンクール、夏休み・
・・それから・・・それから・・・。

ポタツ。

「あ・・・」

またいつもの泣き虫だ。

でも、これ以上ほかのことで話す事は何もない。

ただでさえ啓とは関わりはほとんどなかったんだから。

1番に・・・1番にあたしのことを思い出してほしい。

『男嫌い』まで啓の口からは出たんだよ？可能性は充分有るじゃない。

ダンッ！！

ビクッ。

啓は教室の壁を痛々しく叩いた。

「け・・・啓？ゴメン、あたしひどいこと言った？」

「違うんだ！！」

啓は顔を下に向け表情を見せない。

汗のような雫が落ちた。

・・・な・・・みだ？

啓が泣いたところなんて見たことがない。

や・・・絶対これは汗だ。汗なんだ——・・・

「
・ ・ ・ 啓？」

啓の顔が、あたしの肩に埋もれていた。

暖かくて、ちよつと湿っぽくて……。

悲しみが、伝わってきた。

『男嫌い』の症状が出ない。でも、あたしの心がパンクしていた。

啓の長い腕があたしの背中を縛っていた。

大きな手のひらは、両肩に乗っていた。

顔が赤くなるのではなく、意外と冷静になっていた。

両腕には力が入らずだらんと下がっていた。

「あやまりたいのは……こつちだよ」

え？

「俺……何もっ……努力しないで……人の言う事だけで記憶取り戻せると思ってさ……実際、陸の話聞いても全然、お前の事すら思い出せなかった。お前の『男嫌い』は消えたのに……俺は何にも変わっちゃいねえ……」

「え……」

消えた？あたしの、『男嫌い』が？？

本当に？だから、あたしこんなに冷静なの？

受け止められるの？何にも怖くないの？

昨日までの怖さはなんだった？

決意したから？

啓に思い出して欲しい気持ちだが、一杯いっぱいだったから・・・？

「啓に・・・一つ、言いたい事があるの」

「え？」

「あたしが左手にしてるエンゲージリング、海からもらったんじゃない」

「じゃあ・・・ほかの誰か・・・？」

啓はそつと腕をほどいた。

あたしの顔の前に、涙でぬれた顔を見せる。

その間に、あたしは左手のこうを啓に見せるようにする。

「見覚え・・・ないの？」

啓はあたしの右腕をつかんだ。

「お前これエンゲージリング・・・結婚する奴いる・・・とか？な
んか・・・見覚えあるようでないような・・・」

啓の眉は複雑にくねる。

「っ・・・・・・・・！！これは、啓がくれたものの！！」

「・・・・・・・・お、俺？」

まだ思い出せない様子。

「啓がバレンタインのお返し、ホワイトデーにあたしにくれたものなの!!」

銀色のリングは光った。

「それって・・・俺・・・え？」

「あたしが言う!!」

もう自分の気持ちなんて隠したくない。引き込めたくも閉じ込めてもいたくない。

「あたしっ……」

伝えるんだ。初めて好きになった人に、
“あいつ”に。

「啓が好きなの!!」

第39話*セカンドプロポーズ

「啓が好きなの!!」

ついに言った。初めての、口での告白。

メールでの次の、2度目の告白。

『好き』とは言葉にしたのは初めてだが。

『好き』の一言を言うのがこんなに勇気のいるものだとは知らなかった。

体は熱くなってるし、汗も出てきている。

いつの間に目からは雫がぼたぼた止まらない。

でも、ちゃんと言った。伝えられた。

啓、どう受け止めてくれるの？

啓は口を手で押さえて

「俺……てつきり陸は海が好きなのかと……」

「違うの! 啓なの!」

「だって・・・俺の前じゃ楽しそうには話さないし・・・」

「好きな人の前でそんなことできなかったの!!」

「俺、陸に・・・エンゲージ・・・リング・・・??」

思い出せそう・・・でも、虫のようにかじられて出ない答えがたくさんある。

陸の事・・・俺は好きでエンゲージリングというものを陸に渡したのか？

俺は意味を知ってて??

陸は俺に好きって言うてくれた。

俺はどうなんだ？

エンゲージリングは・・・婚約指輪じゃ・・・？

あとは俺が記憶を思い出す次第なんだ。

よく頭をこらえるんだ。

目をつむって、じっとして。

そう、かじられたところは埋め尽くせ。

全部、俺の思ったこと感じたこと・・・全て。

陸との関係が1番知りたい。

俺は、どういうやつだったのかを、思い出せ。

第39話＊セカンドプロポーズ（後書き）

えらい短い話になってしまってますみません。

でも、この物語は次から結構見所があるとおもつのでよろしく願います。

第40話*『たらし』の誕生

「啓ー！！遅刻するわよ！」

いつもどおりの母さんの声。

今日から俺は中学1年生。

最近まで最高学年の6年生だったのにまた下っぱの最小学年に戻ったのが気に入らない。

先輩と呼ぶものには敬語扱い。しかもケンカしたら内申書というものにひびく。

そんなの気にしてたら、かつこ悪りい。

毎日先輩になるまでおどおどした生活送んなきゃなんねえのかよ。

そんなのごめんだ。

ワックスでつんつんに髪型を上げて、学ランホック・第一ボタンははずしておく。

これが俺流のモテ方。

こうすれば自然と、女子は寄ってきた。

「あ、啓！」

隣にいる海も俺仲間同然。2人で悪になろうかと笑って誓った。

でも、せっかく中学生という少し大人の響きになれたんだから、女の子ともいっぱい遊びたい。

いわゆる『たらし』

でも、俺は別に構わない。

1人の女に縛られるのはお断り。

“あいつ”が現れるまでは。

“あいつ”は小学校のミニバスケットボールクラブで知り合った。

初めて会ったのは6年生の夏。

まぶしいユニホームに身を包んで彼女はまぶしい笑顔で俺のメアドを聞いてきた。

でも、期待はずれにほかの男子のメアドも聞いていた。

「つまんねえの」

“あいつ”はかわいかったから、俺は少し一目惚れしてしまった。

まあそれも、一瞬の事。

メールも全然しなかったし、もう関係ないも同然・・・。

でも、“あいつ”はちゃっかり俺の席の隣に座っていた。

「あ、もしかして、川崎啓くん?? あたしだよ。倉島夏海!」

彼女の初対面のあやふやな話しかけ方に俺は思わず心が動いた。

『たらし』よりも、この子を俺のものにしたい、と。

「好きだ!!!」

夏休みが明ける頃だった。

部活の帰りにバツタリ会った“あいつ”に俺は告白した。

遊びなんかじゃない。マジで本気だった。

夏海は何一つ表情を変えずにこう言った。

『付き合おう』

笑顔で夏海は言った。

それが、俺の後悔への始まりだった。

夏海は俺の自慢の“彼女”だった。

クラスのほかの女子とは比べものにならなかった。

しっかりしていて、おとなしくて、かわいくて、口数は少ないけど、守ってやりたい！と思ったのはこの子が初めてだった。

俺からスキンシップをすると夏海は喜んで受け止めてくれる。

そんな夏海が、俺は大好きだった。

1ヶ月が経つと、2人で遊びに行き、いわゆるデート。

最初は怖かった。でも指が触れた瞬間、俺は無意識に夏海の手をにぎっていた。

3ヶ月が経つと、2人で遊びに行った帰り際に背の小さい夏海は背伸びをして俺に軽くキスをした。

俺は感情がわいた。

ファーストキスだったから、怖かった。

でもそれも今終わった。大好きな夏海だったから嬉しかった。

もう1度したかった。もう2度目だから何も関係ない。

夏海からしたんだから、やってもいいんだと俺は思った。

感情が抑え切れなくなった俺は夏海に今度は俺からキスをした。

深く、感情のこもった、本物のキスを。

でも――・・・

「別れよう」

この一言が一瞬に俺の心を裂いた。

しかもこの直後、夏海は他の男子と付き合った。

俺よりも、優しくって、かつこよくて、完璧な人間と。

でも、そいつともすぐに別れたらしい。

こんな俺でも、何もかも初めてだった。

異性と感情的に手をつなぐこと。付き合うこと。キスすること。

何もかも、夏海に託した『初めて』を壊された。

後から知った。夏海は『たらし』だと。

『たらし』の研修族の俺が、遊ばれた。

もう、俺にとって大事なものなんてない。

『初めて』は、何もない。

付き合うことも、手をつなぐことも、キスすることも、本気で人を好きになることも。

大好きだった人に裏切られたショックは大きすぎてならなかった。

全ての感情も失ってしまった。

俺にとってはもう、誰にだって託しても変わらない。

もう、恋愛なんて、遊びなんだ。

かっこつけて女子に優しく接したら、勘違いヤローは俺のもとにほいほいついてくる。

“女”なんて、簡単だ。

人を本気で好きになることは、俺にはもうないだろう。

こうして、『たらし』は生まれた。

第40話* 『たらし』の誕生（後書き）

啓の過去の記憶の一部です。

第41話＊初めての出会い

2年生に進級する頃には、俺は夏海のことなんて忘れて女子とばかり話していた。

こんなこと言ったら、あんなこと言ったら、俺はそんなことばっか。

俺はもう、れきつとした『たらし』になっていた。

・ そっ、あの日も

・
・
・
・
・

「おっす、啓！」

「おゝはよ、海」

俺は眠い目をこすりながら朝のご挨拶。

「今年は同じクラスだったらいいなあゝ」

「そうだな」

そう、今日から中学2年生。

毎年こうれいのクラス替え。

1年生の時はクラスは1番離れていてしまっていた。

でも、今年はその逆にもなりそうだった。

ふと、夏海のことを思い出した。

今年も同じクラスになってしまふのだろうか。

別に、普通にあのあと話せたから。

今の俺なら大丈夫だろうと自分に勇気付けた。

「ラッキ〜!!同じクラスじゃん!!」

海は女子のように飛び回って喜んだ。

「よっしゃ〜ラッキ〜」

心の底からの喜びはなかったけど海に合わせて喜びを見せた。

2年3組。夏海も同じクラスだった。

仲の良い男子を先に見つけるより、女子の名前を先に見た。

「・・・つまんね〜の」

名前からしたらあんま目立たない女子ばかり。

おとなしい女子ばかりだった。

これならクラスで『たらし』でいる意味がないかもしれない。

おとなしく純粋な女子までに手は出せない。

でも、俺ならできる。その自信がどこから分からなかったけど出

てきた。

だらだら教室まで歩いて入っていった。

机に座ってだらけていても変わらない。

気分を変えようと後ろの棚まで行きよりかかって海と世間話で盛り上がった。

すると、教室のドアがゴロゴロゆっくりドアが開く。

ドアの擬音語からして教室に入るのが嫌なやつだろうと察知した。

俺は気になって一部始終を見ることにした。

入ってきたのはいかにもおとなしそうな女の子。

しかも周りにおどおどしてる。

ドンッ。

少し様子がおかしくなった。

その女の子が叫ぶ前に掃除用具箱からモップが飛び出してきた。

一瞬のうちに、その女の子を大量のモップが囲んだ。

俺はおもしろくなってしまった。

思わず近づいてモップを片している女の子にこう言った。

「何してんの？」

女の子の顔はさっきよりも恐怖に満ちて泣きそうだった。

俺は少しあせったがそのまま女の子を見下ろした。

「わ——ん——!!」

やっと声をだしたかと思ったが急に立ち上がってまたドアに向かった。

が、

ガラガラガラ……

ドアを開けた振動でまた掃除用具箱が開いてモップの大軍が襲ってきた。

俺は思わず噴出した。

「っもう!!モップのバカ!!」

彼女は1人そう叫ぶと教室を出た。

おっもしれえ。このクラスで良かったかも!

「プツ・・・何あの子？おもしれえ・・・てかかわいかったよな？啓」

海が入ってきて俺に問いかける。

「別に・・・興味ないし」

ない・・・ふり。第一印象じゃ決められねえし。

「まあ、た、そう言つて、この『たらし』。お前が1番始めに目え合つたじゃん」

海はにんまりこちらに笑いかける。

「だって、たまたま掃除工具箱の近くにいただけだって」

これは真実。別に興味があつて近くにいたわけじゃない。

「あんなの・・・ただのお子ちゃまだろ・・・」

俺は海から真実を語りそうな目を隠すように黒い前髪を上げた。

第41話＊初めての出会い（後書き）

ここからの話はほとんど啓の記憶になってきます。

第42話＊学級委員

俺は学校へ1人でとぼとぼ歩く。

昨日決まってしまったクラスを一言で言えば、『つまらねえ』

何でおとなしい女子ばっか俺のクラスなんだ??

しかも昨日のモップ（↑陸のこと）は俺におびえてたし・・・。

「・・・・・・・・」

このクラスでやっていくしかねえんだろうなあ。

靴箱に1人の女子がいたが俺のクラスだったので話す余地もなくボスンと手荒くシューズを床に置いた。

「!」

雰囲気で分かった。今俺の隣にいる女子は少し後ずさった。

・・・昨日のモップ（↑陸のこと）だな。

別に、どうでもいいし。

俺は無言でシューズのかかとを踏みながら教室へ向かった。

教室に入ると誰もいない。

まるで死んでいるようだった。

俺の心みたいに。

やっとのことで足をひきずり自分の席に腰掛けた。

まあ、廊下側の近い席だからよかったけど。

そのとき、重々しく教室のドアが開いた。

海か？それともさっきのモップ（↑陸のこと）か？

俺は無言でじっとしていた。

「やったあ！！教室だれもないなあーい！じゃあいいや！おっはよー
ー！！」

な・・・何だ！？

いきなりのテンション高い声に俺はいすから滑り落ちそうになった。
つつこみたいとこだけど、ここは冷静さを保って……。

「……何言ってるの？」

「え……、!!!!!!」

俺の予感的中。モップ（↑陸のこと）だった。

“そいつ”は何も言えなくなって顔だけが赤に染まっていった。

でも、おもわず噴出しそう。

あー、今訳分かんねえテンション見られて恥ツとか思ってたんだなあ。
」。

「あんたまさか俺いないと思って1人で盛り上がったの？」

大笑いするのもかわいそうだったので苦笑いで言った。

「あああああ……あたし……えと……」

きゆうに喋り方がもどかしくなった。

つい、夏海を思い出してしまふ。

全然違うと分かっているのに。

ドンッ！

“そいつ”はドアを勢いよく閉めた。

その拍子に・・・

ガラッ・・・

「っへ？」

俺は口を開けたまま見ていた。

「キャ——！！！」

“そいつ”はモップに昨日のように襲われた。

もう・・・たえられねえ！！

俺は大笑いした。

こんなにつけること久しぶりだ。

いつのまにバカ笑いするの忘れてた。

「くっ・・・お前・・・うける・・・」

腹を必死にこらえて声を出した。

“そいつ”はうんざりしていた顔からまたりんごみたいに顔を赤く染めていった。

笑いが収まると“そいつ”の周りにあるモップを片した。

「あ・・・ありがとう」

小さな声が、“そいつ”から出た。

「おっはよ——！！」

場の雰囲気壊す声は海だった。

今いい感じじゃなかった??

もおゝ海!!

「おお海、おはよ」

「あつれえ??教室2人だけだったの?あつやし」

コラ!!変なことぬかすな!!

ま、ここは冷静に・・・

「別に・・・2人だからって俺はボ——ってしてただけだし」

「啓のことだからさあ、ハハッ」

俺はそう簡単に女子に手えださねえよ!!

見ると、海は“そいつ”の机の前で質問攻めをしていた。

“そいつ”はいかにも困った表情。

おいおい・・・。

「海、やめとけて。そいつ困ってんじゃん」

俺はめずらしく止めた。

「あれ？今日お前らしくないじゃん。女の子と喋んないの？」

“そいつ”に俺の本性まだ見られたくない。

俺はどうどつとかわした。

「まっ、いつか・・・。そっぴやお前委員会何にすんの？一緒なら
うよあ」

海と一緒にするのは大賛成だった。

しかも肩ゆすつてくるし。

「俺は・・・一番楽しいやつかなあ・・・」

眠いのか、あくびが出る。

「やってみようかな・・・」

小さな声が聞こえた。

俺でもなく、海でもなく、“そいつ”だった。

「は？」

やってみるって、何をさ？？

はーん、そういうことか。

俺は確信した。

2時間目の委員会決め。いろいろな選択肢があるが俺はもうすでに決まっていた。

「ではまずは学級委員から決めましょうね・・・立候補から聞こうかしら？」

昨日までの俺は話すら聞かなかった。

でも、今から違う。

手を上げる気配がなかった。

でも、1人、勇気あるものがいた。

「あああ、あたし、学級委員やりたいです!!」

でも、視線は“そいつ”じゃなくて、“俺”にあった。

右手が上がっていた。

そして、自然と声が出た。

「俺、学級委員します」

みんなが見てる。

さすがに上げている右手が震えてきた。

「他に立候補はいませんか？」

先生は俺以外に助けを求める。

そりゃあ・・・な？俺は結構問題児だからな。

クラスに手が挙がる雰囲気が完全になくなると、先生は肩を落とした。

「川崎くん、学級委員頼んでもいいですか？」

先生は表面の笑顔で言う。

「大丈夫です。まかせてください」

きつさに耐え切れない手を左右にゆらゆら振った。

“そいつ”を見てみるとなんか絶望状態？

そんなに俺とが嫌なのかよ・・・。

「じゃあ学級委員は“川崎くん”と“神崎さん”に決まりでいいですね」

そのままその授業は終わり、担任からプリントの束をもらった。

「じゃーさっそく仕事だけど、このプリント2人で協力してねえ」

先生は説明書きの紙をプリントの束の上に乗せ、俺に渡した。

少しよろめいたがこのくらいチヨロイもんだ。

俺は教室へ向かった。

“そいつ”は俺の右斜め前の席。

先生の2人で協力して、という言葉を出して声をかけようとした。

「か・・・」

俺は名前を呼ぶのを止めた。

こいつ俺にびびってるよな・・・??

変に声かけたらこいつおびえるし・・・。

でも、そっちのほうがいい。

「おい」

俺は無愛想そうな声で“そいつ”呼びかけた。

「は・・・はひ?」

“そいつ”は予想通りの反応。

びくびくしながらこちら振り向いた。

「これに各専門委員の名前かけてさ」

“そいつ”はおそるおそる俺の持っていたプリントを受け取り机に向かった。

「あ、それ2人で協力してやれって言うからさ・・・」

神崎、反応なし。

「あんな、それ、2人で・・・」

反応なし。

「たたくもー!!」

気づいてもらえないならこうするしかねえだろ!!

俺は左手を“そいつ”の肩の上に置いた。

「神崎・・・だっけ？何度も呼んでのにシカトすんなよ!!」

俺は思わず手に力を入れてしまった。

同時に神崎の表情もゆがんだ。

やばっ・・・。

でも、違和感があった。

“そいつ”の体は小刻みに震えていた。

細くて白い腕には、鳥肌が立っていた。

猫のように反応が逆立っていた。

「お前・・・震えてんの？」

俺は少し気をゆるめて言った。

でも、神崎は答えなかった。

冷や汗をたらして俺の手に視線を集中させるばかり。

あ、この手が悪いんだな。

俺は手を離れた。

すると神崎は大きなため息をついた。

こいつ、何なんだ？

「お前全然喋らないじゃん、朝と大違い・・・」

“そいつ”と目を合わせたが、すぐにそらされる。

まさか・・・こいつ・・・。

「まさか、男嫌いとか？」

冗談で半分聞いてみた。

でも、その答えは本物だった。

首を縦に大きく振った。

・・・え？

うわっ、男嫌い？？俺、こいつと一緒にじゃ『たらし』なんてできないじゃん。

でも、なんか・・・。

「へーえ、おもしろいじゃんあんた。やっぱこの１年間楽しくなりそう」

俺は少し人目を気にしたが、『たらし』の本能を見せた。

“そいつ”の額にキスをした。

「？」

“そいつ”は眉を曲げて今俺がやったことが理解できないようだった。

「あれ？反応しないの？ならもう１回やってあげようか？」

もちろん、もう１度するつもりなんてなかった。

でも、とっさに言葉がでて、“そいつ”をもっ少しおちよくりたかった。

「1年間、ヨロシクな」

んゝこの言葉は俺には似合わねえかも・・・。

“そいつ”はまだ反応なし。

ホント、にぶいなあゝ・・・。

そして数秒後。

「うつきや———！！！」

想像以上の声が、“そいつ”から聞こえてきた。

「・・・ハハッ」

俺は思わず1人で笑った。

久しぶりに、笑顔をこぼして笑った。

第43話＊星屑の記憶

久しぶりに笑ったあの日。

あの日から“そいつ”にかかわりなくなってきたんだよねあ……。

おちよくるのが楽しくて、反応がメツチャうけて、しかも『男嫌い』
こんなに楽しいやつ、初めてだよ。

たしか、体育祭の話もしてくれたなあ……。

俺が汗まみれになって“そいつ”のタオル奪って汗拭いたんだっけ
??

“そいつ”内心怒ってただろなあ。でも、言ってくれたな。

『そそそ、それ……使っていいよ』

俺嬉しくなっつて“そいつ”抱きしめたんだっけ？

周りも結構じろじろ見てたな。まっ、俺は気にしなかったけど。

あいつの顔も赤くつてさ、俺調子に乗って短距離走ふざけて走ったら先生怒られたわ（笑）

1番だったんだからいいじゃねえよ！！それで優勝もしたし。

最高の運動会だったな。

“そいつ”が熱で倒れたときは優しい俺が保健室まで運んでやったなあ。

意外と“そいつ”重かった（汗）本人には言わなかったけど（笑）

何で先に体が動いたんだろうな。めんどくさかったのに。

夏休みは“そいつ”に会う時間が減ったよなあ・・・。

でもバスケの次の体育館使用がバレーの使用だったんだよな。

あいつが体育館に入ってくる頃には俺は汗まみれにボール付いて声も出せなかった・・・。

合唱コンクールでは“そいつ”は指揮をしていた。

頑張んなきゃ可愛そうだなあ。

俺のあいまいな同情が金賞につながったのかな？

俺初めてあんな大声で歌ったよ。

次々に思い出されること。

肝心なことが思い出せない。

“そいつ”とは、学級委員止まりだったっけ？

や、じゃあ何でこいつは泣いているんだ？

“男嫌い”のこいつが簡単に『好き』なんて言えるのか？

今の俺が好きだった？それとも、昔の俺？

今の俺なんか好きになっても元の俺に戻るだけで怖い。俺が怖い。

『不安なんだ』

よみがえる記憶。

この思いも……どこかにあったような……？

俺の思考は再び昔へと戻った。

それは、修学旅行の日だった。

第43話＊星屑の記憶（後書き）

久しぶりの投稿になってすみません。

これからもよろしくお願いします。

第44話＊修学旅行の記憶

「つく、だりいくな」

俺はエナメルバッグを持って家を出た。

「うえゝどつぷり夜みたいじゃん」

俺は家から1分も経たない学校へとフラフラ向かった。

「午前6時半・・・ゲツ、あと1時間は寝られるじゃん」

バスのライトが点滅している正門のほうへ向かった。

「おゝ川崎、早かったな。1番だぞ。お前ゝだるそうにして1番張り切ってるんじゃないかあゝ??」

「ち・・・ちやいますよ!!」

んなわけないじゃん。くそゝ誰も来てねえのかよ。

「ほら、3組のバス乗つとけ。くつろいでいいぞ」

俺はしぶしぶ乗り込んだ。

ガラーツと開いているバスの座席。

席は決まっていなかったので適当に後列のほうの窓際の席に座った。

「はーだる……。修学旅行なんて暇すぎじゃーん」

「え……。？」

「は？」

俺は固まった。バスの出口に“そいつ”がいたからだ。

「おゝ『男嫌い』お前も早いじゃん」

気軽に声をかけたのに“そいつ”は顔を赤らめて前列の席に座ってしまった。

「あ……。？」

少し分かった。“そいつ”は座席で少し震えていた。

「おゝい、そんな離れないでこっちこいよ」

俺は誘ってやったが動こうとしない。

「たつく……。？」

せつかく誘ってやったのに……。

ちょっとした期待は押しつぶされた。

人が来るようになりバスの座席が埋まってきた。

“そいつ”の隣の座席は空いたままだった。

多分夏海が来るまで待ってるんだろう。

後ろから“そいつ”を見てみると、寂しそうで見ていらなかった。

「・・・たつく・・・」

俺はエナメルバックを持って席を立った。

「あれ？啓どこ行くの？」

「海、お前も来い」

「え？ちよつ・・・ちよつと・・・！！」

ドスンッ！！

「！！」

「・・・よお」

“そいつ”は目を丸くして隣に座った俺を見ていた。

「啓、そこ俺が座りたかったのにい」

後ろの席で海がぶつくそ言っ。

それはともかく、何だよこの距離。

“そいつ”は窓際へばりついて俺との距離を少しでも長く置こうとしている。

「もうちょい近くに来てもいいだろ？」

首を振られた。

「あつれ〜?? 陸、啓と一緒に座ってるの? 仲い〜じゃん!」

夏海が来た。

「べべべ、別にそんなんじゃ・・・」

否定すんなよ!!

「え〜じゃあ陸の隣座れないねえ〜。海、隣いい？」

「お〜・・・別いいけど」

「陸いじめないでね〜啓」

こいつ・・・あんま関わりたくねえ・・・。

長いバスの時間は過ぎ、修学旅行先の京都に着いた。

「わゝ俺京都なんて来たことねえ。寺とか全然興味ねえもん」

「あたしは来たことあるよゝでも舞妓さんの格好してみたあゝいゝ」

そついやこいつらと同じ班だったな・・・。

あいつらが仲良く話してたら俺は神崎としか相手がいねえじゃねえゝかよ。

「神崎ゝお前自由時間どこ行きたい？」

一瞬体をビクつかせて俺の方を見た。

「き・・・金・・・闇・・・」

消え入りそうな声で答えた。

「じゃあ行こうぜゝほら！お前らも！！」

「うんゝ！！」

海と夏海はムチャクチャ張り切って俺らの前を速くも歩いた。

「うわっ・・・置いてくなよ。ほら、神崎行くぞ!」

「あっ・・・うん」

俺の隣を歩きたくないのか、一步距離を置いて俺の後ろを歩く。

早くしないとあいつらに遅れてしまう。

でも、神崎を置いてっってしまう。

「っく、早くこいよな!」

「・・・えっ!」?

俺は“そいつ”の腕を引っ張り手を握った。

「ひゃあ!」

俺は何も言わずに走り出した。

“そいつ”の顔はスイカの実のように真っ赤だった。

「お、お前が遅いからだよ」

俺はそっぽ向いて“そいつ”に言った。

『じめんなさい・・・』

俺の予想ではこう言うかと思った。

でも・・・

「ありがとう・・・」

“そいつ”は笑顔でそう言った。

ちよつと・・・ちよつとだけ俺の心が掴まれかけた。

そついつ思い出があったことを、今、思い出した。

俺はその時神崎のこと好きだった??

それとも女子だから??

『たらし』だから??

分らない。

俺だつて変な思い出思い出したくない。

つらかったこと・・・思い出したく・・・

『不安だ』

でも、それが唯一の鍵を握るかもしれない。

“そいつ”から告られた日を、思い出せた。

第45話* 傷つけないから

『不安だ』

俺が女子と付き合うことで悩んだのは初めてだったかもしれない。

多分、これからもないと思う。

好きじゃないやつにはきっぱり断るし、ちょっとしたでも良さげなやつにはOKした。

“そいつ”は、どちらにも入らなかった。

いや、入れられなかった。

『好きな人に言われても頑張れないし・・・』

それって、俺のこと？

その時、すっげー嬉しかった。

神崎が・・・俺のこと、そんな風に思ってたくれたなんて・・・。

俺、神崎のこといいやつって思ってる。だから・・・

でも、付き合うことはできなかった。

いや、付き合っではいけないんだ。

神崎が傷つくから。俺じゃ純粹すぎるお前を背負えない。

『たらし』な俺が、『男嫌い』なお前と付き合えるか？

純粹すぎるお前を見ているだけで汚れた俺はみじめに思える。

嬉しい顔を見たかったけど、辛い思いをさせるのが1番嫌だ。

『たらし』の俺じゃ、お前と長くは続かない。

白いままのお前を、黒く染め上げてしまいかもしれない。

断って辛い思いをする神崎を見たくない。

俺だって辛い。

でもよほど、OKして喜ぶ顔を見れても、別れを告げた時のお前の顔は見たくない。

だから……

『お前と付き合うのは不安だ』

そう答えるしかなかったんだ。

お前のこと大切に思ってるけど・・・いや、好きなんだ。

でも、俺だとお前を傷つけずにはいられない。

ほかの男と、幸せになつてくれよ。

俺は、1人で十分だから。

俺は神崎を、深く傷つけた。

俺のせいで・・・『男嫌い』ひどくなっただってな？

海にこっぴどく怒られたよ・・・。

ごめんな？神崎。

お前のこと好きだけど、この感情は伝えられない。

『お前のこと好きじゃない。だからって、嫌いってわけじゃないんだよ！！』

あの時、本当は『好き』って言いたかった。

俺の一言であいつが笑顔になれるなら、俺は喜んで優しい声をかけるよ。

神崎からもらったマフィンおいしかったあゝ。

また食いてえな・・・。

そういえばあいつ、放課後教室で寝てたよな。

『おはよう』

この言葉に努力してたもんな。

頑張ったもんな。

思わずジャージをかけてしまった。

思わず言葉が出てしまった。

『俺・・・お前のこと、守ってやれない。でも、好きだから』

あいつ、聞こえてたかな？？

第46話*形

俺はバレンタインのお返しを買いに来た。

結構数はもらったけど、たった1人のためだけに来た。

「これください・・・」

あいつが好きそうなのってこんなかなあ??

正直恥ずかった・・・。

周りはみんな女子ばっかでジロジロ俺を見ている。

包みを受け取るとそこからとっさに抜け出した。

「いつ渡そう、コレ」

迷ったあげく電話した。

『神崎 陸』に。

『もしもし?』

「今ドコ!?!?」

『役場前・・・』

おっしゃラッキーすぐ近くじゃん!!

「待ってる!そこ動くなよ!」

俺は神崎の返事を聞かずに電話を切った。

すぐに走った。

今日渡さないと、ずっと後悔すると思ったから。

役場前に着くとすでに俺の息は荒れていた。

「川崎・・・」

目の前で目を丸くして立っていた神崎。

「ゴメン、忘れてたんだ。コレ、あの時のお返し」

俺は今日買ったばかりの箱を渡した。

すると突然泣き出したので俺はあせった。

「泣くなよ・・・中身、開けてみ？」

とりあえず中身を見てくれよ。

俺が買った指輪を見ると、神崎はメツチャ嬉しそうな顔したから、思わず言葉が出た。

「それでさ・・・俺さ・・・」

俺・・・なんて言おうとしたんだ？

そのあと何を言葉にしようとしたんだ？

「あ、その前に・・・その指輪、俺が付けてやるから・・・」

十分な言葉で俺の気持ちを伝えなくてもいい。形で分かれれば、いいんだ。

「え・・・いいよ！自分ではめられるし！」

俺はひっくり返そうになった。

普通そこははめてもらうだろ！！

「俺がはめたいんだ」

俺はリングを手を取った。

今からすることを知っているなら、神崎も俺の気持ちができるだろう。

「お前、左の薬指につける指輪のコト、どどういう意味か知ってるか？」

あつと驚くような顔をされた。

「え・・・？」

眉毛は『ハ』の字。

何だ・・・知らないのか。

正直、ホツとした。

「あのな・・・エンゲージリングっていうんだよ・・・」

本当にいいのか？俺。

こんな中途半端な形で気持ちなんて伝えられ・・・

いや、伝えられなかったんだ・・・。

カシャン。

俺は思考に集中していたばかりに手の動きについていけなかった。

リングが落ちた。

「あ、やべ……。買ったばかりなのに……」

この時、指輪さえ追いかけていなければ、すべては始まらなかったのに。

痛かった。

神崎の声が聞こえた。

泣きそうな声。

俺がなぐさめてやるよ。

だから・・・泣くなよ？

俺が『男嫌い』治してやるって言っただろ・・・。

俺、このまま死ぬのかな・・・。

ならさっさと言った方がよかった・・・。

『お前のこと、好きだ』って・・・。

神崎・・・ごめんな・・・？

第47話*啓の気持ち

今でも覚えてる。

怖かった。

自分のことが何1つ思い出せない。

真っ白だった。

何も、考えられなかった。

そして今、俺は再び同じ人物から告られた。

思い出した。あの時あの場所での・・・できごと。

誰の手も借りたくなかった。

俺の記憶が塗り変えられそうだったから。

怖かった。

俺、こんなに弱かったんだな・・・。

『男嫌い』

懐かしい響き。

前は男の前では真っ赤で無言になって・・・可愛かったのに、

今ではなんか・・・たくましくなったな。

俺と違って。

『たらし』なんて、俺は過去の思い出から逃げただけだったのかもな。

本気な恋なんてものはどうでもいい。

女なんてたくさんいる。

昔はそうだった。

今は？

俺、本気でこいつに恋してる。

「俺、お前を傷つけるのが怖かった」

やっと、やっとと言える。

俺の、本当の気持ち。

「え・・・？それ、どういうこと・・・？」

いきなり話す俺に神崎は啞然としていた。

「夏海にされたことがムチャクチャくやしくてさ、俺は本気で好きだったのに。そんなときは『たらし』じゃなかったんだぜ？研修生みたいなもん。でも、夏海のこととは本気で好きだった。でも、すごい裏切られて俺はもう女子なら誰でもよくなった。普通に友達以上のことなんてできるし、誰に託したって構わなかった。俺、汚れてた。だから、純粹すぎるお前なんて背負えなかった。きつと、告白をこ
とわるよりずっとひどいことする。そう思ってた」

「川崎・・・記憶が・・・」

「俺は！！お前のこと、好きだった！！」

「えっ・・・・・・・・」

「でも、お前が傷つくのを見たくなかったから・・・・伝えられなかった！！」

「・・・・・・・・」

「今ままでつらい思いさせて、ごめんな？」

「じゃあ・・・・・・・・川崎・・・・・・・・この指輪の意味・・・・・・・・」

「ああ、知ってるさ」

「・・・うそ・・・」

「今度は俺から言っよ」

「え・・・?」

俺は神崎の手を優しくつかんだ。

「好きだ。俺と、付き合ってください」

「・・・ハイ」

またいつもの泣き虫。

泣くなよなあ。後始末は俺が困るんだから。

神崎の止まらない涙をおさえてやった。

そして、優しく唇に、キスをした。

第48話＊好きだから

唇をそっと離れたとき、思った。

『後悔してしまったらどうしよう』

一瞬思った。

でも

『俺は、後悔しないよ』

心がそう言っている。

「啓・・・」

わずかな陸の声が聞こえた。

陸の顔は桜のように火照っていた。

「傷つけないで、いてくれる？」

陸の不安に俺はちよつと戸惑った。

でも、誓ったんだ。

「大事にするよ。一生」

陸にしがみついた。

小さな体はちょうどよい温度を保っていた。

『たらし』は捨てるんだ。

無駄にカッコつけるのも、“こいつ”の前だけにするんだよ。

俺からは女子に話しかけないようにするし、笑いかけもしない。

あんまりやりすぎもよくないけど、託すんだ。俺の全てを。“こいつ”に。

一生??それってプロポーズ??

俺にはまだ早ええよ。

陸は物じゃねえけど、俺の1番に、大切なもの。

陸の“男嫌い”が消えている今、俺は“女好き”を消してしまわなければならぬ。

「お前・・・よく頑張ったな」

「当たり前じゃん・・・啓が楽しみにしてたんだから」

『俺はどんなふうに振り向かせてくれるか楽しみにしてるからな』

「たしかに・・・言ってたな」

笑みをこぼした。

「いっぱい聞きたいことがあるんだ」

「・・・分かってる」

「たくさん分かってもらいたいことがあるんだ」

「・・・分かってる」

俺は強く陸を抱きしめた。

「俺も、たくさんのが、いっぱいある」

「・・・分かってる」

「陸、お前変わったな」

「啓と出会ってからだよ」

「俺と？」

「あんたと出会ってからの一言一言で、あたしは変わったんだ」

「なあ陸」

「ん？」

「俺のこと、いつから好きだった？」

陸は、静かに目を閉じた。

「多分、啓と出会った時から」

その目からは、1粒の雫が落ちた。

第49話*今でもあなたを

「啓ー!!」

制服に身を包み、啓に向かって手を振る。

「んゝ???その笑顔、クラス一緒だったとかあゝ??」

「いいから見てよ!クラス替え!!」

あたしは啓の背中をぐいぐい押す。

「おゝ3組ねえ・・・陸一緒じゃん」

「しかも見てよ!!海も・・・真奈美も一緒なんだよ!!」

「プッ、懐かしいな。中学校に戻ったみたいだな」

「そうだね・・・もう高校3年だもんね」

あんま啓と進展ないけど・・・。

「陸!!!久しぶりに一緒のクラスじゃん!!!4年ぶり!!!啓も!!!」

「うん4年ぶり!!」

「陸、あんたが“男嫌い”治ったからあたしは安心して過ごせるよ」

少し大人っぽくなった真奈美。

背が伸びても中身は変わらない海。

3年生はみんなそれぞれ違うクラスだったけど、友情の関係は変わらない。

ただ1つだけ変わったことがあった。

真奈美と海がくっついたことだ。

このことにはあたしもびっくりした。

なんかずっと一緒にいられそうですごく嬉しかった。

そして、あの時とは変わってしまった啓。

『たらし』は完全に無くなり、あたしだけにつくしてくれる。

あたしも、啓のためにならつくせるよ。

「まだキス止まりなのぉ??」

ニヤニヤしながら聞いてくる真奈美にあたしは赤面した。

「なっ・・・やらしいわね!!それ以上できるわけないじゃない!!」

「そんなんだからぁ。啓はしたいって思ってたんじゃないのぉ??」

真奈美は勝手に啓に話題をふった。

すると啓は動揺する様子もなく、

「陸が許してくれたらな」

その言葉に真奈美はあたしの背中を啓に向かって押した。

「わっ」

タイミングよく啓はあたしを受け止めた。

「じゃあ、あたしたちは先に教室入ってるねえ」

手を振りながら姿を消す。

「ちよっ・・・真奈美!!」

手を伸ばしたその時、

スポッ

まぬけな効果音を出してあたしの左てのエンゲージリングが抜けた。

「あつ、啓！！それはあたしの・・・」

啓は天を仰ぐように指輪を持っている手を振り回す。

「ん？あたしの？」

「っ・・・。1番大切なものっ・・・」

「ばーか、1番大切なものと言ったらこの俺だろ？」

たらしこむような笑顔で言われる。

「ふふっ、ばーか、あんたが1番だよ」

「よくできました」

あたしの頭をなでてくれる。

「じゃ返し・・・」

「ダメ」

「ええ？」

「だって、俺からはめさせてくれなかったじゃん。」

「えっ・・・だってそれは・・・」

「神崎陸。あなたは川崎啓を一生愛し続けることを誓いますか？」

「・・・え？」

「誓いますか？」

「あ・・・はい」

けどまだ指輪ははめてくれない。

あたしも言えって？？

「えと・・・川崎啓。あなたは神崎陸を一生愛し続けることを誓いますか？」

啓はその言葉に笑顔たっぷりで言った。

「誓います」

すると、指輪をはめてくれた。

4年たった指輪は傷は増えていたけれど、一際きれいに輝いていた。

「結婚式みたいだねっ！」

「だって、いつかはあげるんだぜ？ 予行練習♪」

「え？ それって・・・」

啓は両手であたしの手をつかんだ。

「陸・・・」

「はい？」

「結婚しよう」

その言葉に反応が遅れた。

「っ・・・??」

「俺たち高校生だからまだ早ええかもしれないけど・・・陸のこと大切にしていくな自信はある」

え？あたしなんかで、本当にいいの？

「俺じゃあ、物足りないか？」

そんなことない！！

「啓・・・」

「ん？」

「これからよろしくお願いします」

精一杯の笑顔を見せた。

それにつられて啓も笑った。

「陸」

「なに？」

「愛してる」

『たらし』？『本気』？疑ってしまつような軽い言い方。だけれど、なぜか許してしまう。

そして優しく、キスをした。

最終話* Dear Love Propose

『結婚しよう』

あのプロポーズから、3年が過ぎ、桜が咲く季節となった。

「——準備できたか？」

白いドアの向こうからおずおずとこちらを見てくる啓。

「……できたよ」

こんなに歩きにくいとは思わなかった。

ふわふわに包まれて、空に浮いている感じ。

ずっと、憧れてた。

「——きれいだ」

啓が見てつぶやいた。

その言葉にあたしは顔が火照った。

「ありがとう」

「川崎様。そろそろお時間ですよ」

今日からあたしは『川崎 陸』

真っ白な衣装に身を包み、儀式を挙げる。

思い起こせば今のこと。

桜が咲く季節に川崎に出会った。

最初の川崎は怖かった。

まああたしが“男嫌い”なだけだったけど……。

「陸」

「ハイ？」

「幸せにするからな」

「……ハイ」

あたしが今でも1番聞きたかったことがある。

『啓はいつからあたしのこと好きだった？』

ずっと疑問として残している。

そして今日、やっと聞ける。

「啓」

「ん？」

「啓は、あたしのこといつから好きだった？」

啓は少しためらって、少し笑みを浮かべた。

「多分、出会った時から」

「明^{ミシ}!!遅刻するわよ!!」

「は、はい!!」

朝日がさんさしている。太陽の光がまぶしい。

台所に行くと朝ごはんの匂いが鼻に入ってくる。

「も、中学生になって早々遅刻するつもり?今日は入学式でしょ?」

「はあ。い。分かってるよママ」

あたしは食パンをほおばる。

「また遅くまでメールでもしてたんだろ??男子と」

「パパ!!」

パパは余裕そうに新聞を広げてくつろいでいる。遅刻するわよ!!

「だつ、男子なんてメールできるわけじゃないの!!女子と

よ！お・ん・な・の・こ！！」

「どこでもいいけどあんた遅刻するわよ」

「ゲッ！！もうこんな時間！？」

あたしはカバンをつかむと玄関に向かった。

真新しい制服に身を包んで真新しいカバンを持つ。

中学生の実感がぐんとわいてくる。

「い・・・行つてきまゝす！！」

あたしは返事も聞かずに家を出た。

「女の子とメールかあ。陸も女の子としかメールしなかったのか？」

「もっ、もちろん！男子なんてとんでもない！明と同じようなもん
「よ」

「へーじゃあ俺が初めての男子だったんだあ。なんか感激」

「今さら何よ」

「中1か・・・明にも、新しい出会いがあるだろう」

「そうね。あの『男嫌い』は治してきてくれるかしら」

「それが、どこの誰だか――」

「きっと、啓、あなたみたいな人ね」

神崎陸は、川崎啓。あなたに恋をしてました。

『たらし』でどうしようもなかった“あいつ”呼ばり。

でも、本気であたしを大事にしてくれた。

傷つけないからって、わざと避けるようなことした。

それが十分な優しさだよ。

あたしには、それ以上いらなかった。

でもあなたはそれ以上にあたしを大事に・・・いや、愛してくれた。

昔の“あいつ”も、今の“あなた”も、愛してます。

* * * * *

E N D

* * *

D e a r l o v e P r o p o s e * * *

最終話* Dear Love Propose (後書き)

完結いたしました。

みなさんがどのようなことを思っただいたかには分かりませんが、陸と啓の恋の仕方を理解していただけたらと思います。

番外編も用意しようと思います。

『Dear Love Propose』を、今までありがとうございました。

番外編3*北島 真奈美（前書き）

本編ではない真奈美と海のちよつと進んだ新婚生活のお話です。

番外編3＊北島 真奈美

ハイ。あたし、南園^{ミナモト} 真奈美^{マナミ}。

あ、今は北島 真奈美なんだっけ??

憧れの結婚式は1週間前に終わりました。

婚姻届も出して、あとは2人きりの新婚生活を楽しむだけ。

あ、あの幼かった海も^{カイ}、すっかり大人になりました。

でも成長したのは外だけで、中身は全然成長する様子がない・・・
(笑)

陸たちにも憧れてたけど、あたしはそういう海が好きだな。

陸たち赤ちゃんできたんだってね。

かつわいゝかなあ??

あたしも早く見たあゝい。

「ただいまあゝ」

あ、海が帰ってきた。

やばい！！夕飯の仕度まだだ！！

「入ってきちゃだめえ——！！！」

思わず叫んだ。

「えっ？」

海は疑問的な笑顔であたしを見る。

ハッ！！あたし何言ってたんだか！？

元と言えば夕飯の用意しなかったあたしがいけないんでしょう？

それに海は仕事から疲れて帰ってきているのに・・・新婚生活はラブラブなんだよっ！！（陸・啓を参考に）あ、の2人は今でもラブラブ。

「えっ、まだ夕飯の準備できてないの？」

あたしが妄想に取り付かれてる間に海がキッチンに入ってきていた。

「ごっ、ごめんね！！今すぐ作るから！！」

あたしはあわててなべとフライパンを取り出し冷蔵庫を開けた。

「・・・・・・・・」

おかずになるらしき食材が入っていない・・・。

卵やベーコンは朝食に使うもんだろこりゃ・・・。

あとはフルーツしかないし・・・。

乾燥食材の棚を開けるとレトルトカレーや即席ラーメンなどいっぱい出てきた。

でもレトルト食品とか・・・もう海あきちゃったよね・・・。(3
日目)

「ゴメン・・・今日は外食にしようか？」

「え？何で？」

「だってもうレトルト食品飽きたでしょ？買い物もしてないし・・・」

あたしの声はだんだん聞こえなくなってきた。

「いいよ。俺も手伝うし」

「へ？」

「レトルトでも真奈美が手をかけて作ったものなら俺1週間でも食えるよ」

海は昔と変わらない無邪気な笑顔で言う。

「海・・・」

「ほら、ベーコンも卵も使おうぜ!」

海は冷蔵庫から取り出す。

「どんなものができるだろうなあ」

「って理科の実験じゃないからね!!」

「ゴメンね。疲れてるのに・・・明日はちゃんと用意するから」

「あ、用意はいいからお買い物して来て」

「え?だってまた今日みたいに・・・」

「だって俺と真奈美で作ったほうが2倍にうまいんだもん」

そのはずみで卵を全面的に砕いてしまった。

「ゲッ・・・」

「うわっ・・・グショグショ・・・」

「プッ、アハハハハハハ」

笑いが止まらなくなってきた。

新婚生活ってこんなもんなんだあ。

相手の欠点見つけれないや。

バカみたいっておもってたけど、案外悪くないね。

トントントンッ。

包丁の音が響いていた時。

「海」

「ん？どした？」

「~~海~~つる」

番外編4＊啓の浮気発覚！？前編（前書き）

陸と啓の中学校3年生のクラス替えの出来事ですな。

ところどころに（ ）でつつこみ入れています。

楽しんで読んでもらえたらと思います。

番外編4＊啓の浮気発覚！？前編

「もう絶対許さない！！別れる！！」

バンッ！！

「・・・・・・・・」

放課後の教室で、勢いよくドアを閉めた音が響いた。

俺の心にも、『別れる』という言葉が響いた。

えと・・・・俺、こういつつもりじゃなかったのに・・・・。

中学3年生に進学したと同時に俺は変わった。

『たらし』を卒業して、“あいつ”だけに俺を託すんだと、誓ったはず。

でも、つい口がすべってしまった。

——中3の始業式

「はよー」

正面玄関には人だかりができていた。

今年のクラス替え表はA4のコピー用紙に小さく文字が印刷されているので遠くからじゃミミズ文字にしか見えない。

「見に行くのもめんどくせー」

しばらくその場に突っ立っていた。

「啓ー!!」

俺の隣に現れたのは、俺の“彼女”、神崎陸だ。

『男嫌い』からはとくに卒業し、今では昔とは違いすぎる最高の笑顔を見せる。（前のも良かったけど!）

「陸、今来たところ？クラス替え見た？」

「ん〜ん、見てない。今真奈美と来たところなの」

隣には南園がいた。

「啓〜。今年も陸と同じクラスだったらいいわね」

ニヤニヤしながら俺の胸をひじで突く。

「やったなあ〜!!当然真奈美も同じクラスがいいよ!!」

「いや〜あ、あたしゃ遠慮しとく。2人の熱々ぶり見たくないし」

南園は顔を仰ぐように手をひらひらさせる。

そうこうしているうちに人だかりが消えてきた。

「あ、すいてきたよ！見に行こ！！」

南園は一足先に走って行った。

「・・・俺らも行こうぜ」

「・・・うんっ！！」

「どうだったー？？真奈美ー！！」

「んゝあたしは5組だったけど・・・陸と啓はいないやあゝ」

「えゝ！！真奈美違うクラスとかやだあゝ！！」

「って言われてもねえゝ・・・」

おいおい肝心なのは自分のだろ！！

早く探せよ・・・。俺も気になるんだから・・・。

「ちえゝ・・・あたしはゝ・・・あ、い、う、え、お、か・・・」

陸が探している背中越しに俺も自分の名前を探す。

「俺もゝ・・・あ、い、う、え、お、か・・・」

数十秒経過。

「あつた!!」

陸と声がハモッてしまった。

「え・・・何組？」

「そっちこそ、何組よ？」

お互い顔を見合わせて質問をぶつける。

「3の2・・・」

「えっ・・・、あたし3の4・・・」

ちよつとだけ期待してたんだけどな。

俺の強運は命だけか・・・。

陸と離れ離れか。1年生の時は意識してなかったからいいけど・・・
やっぱ意識すると寂しいな・・・。

陸は眉毛をハの字にしたまま戻さなかった。

泣きそうな顔して俺をビビらせる。

「おっ、おい・・・。クラス離れたからって泣くなよ・・・？」

「うう・・・だって、だって・・・」

陸の表情は曇るばかり。

俺と離れてそんなに嬉しいなんて感激・・・。

「せめて真奈美とは一緒に良かったあゝ。また1人ゝ!!」

俺の肩は落ちた。南園かよっ!!

まあ、陸のクラス見てみるとだ、れも元3組で仲よさそうなのやっ、いねえしなあ……。

「しかも2組夏海いるしい」

南園が口をはさむ。

「うわぁーん!!」

おいおい、もっと泣かすなよ。後始末は俺なのに。

「大丈夫だつて。夏海とはもう仲良くしねえよ。安心しろ」

そう言つて俺は陸の頭をなでた。

少し泣き止んだ。汗

「じゃあ少しでも俺と一緒にいたいのか？」

俺はいばつて言う。

「うん」

陸はあつさり答える。

「よし。よく言った」

俺は陸の頭の上に手のひらをポンツと置くと言う。

「学級委員になれ！」

「・・・ハ？」

俺の唐突な言い方に陸は目を点にする。

「えっと・・・それはつまり・・・？」

「委員会やなんやかんやあるだろう！！その時に一緒に過ごせる！」

陸の表情は明るくなってきた。

「し・か・も！！生徒総会の議長は3年学級委員から立候補で出らしいぞ！クラスは全く関係ないからその時にまた一緒に仕事ができるんだぜ！！」（なんとなくスゴそうな言い方）

陸の表情は太陽のように輝いた。

「それって、また啓と学級委員・・・」

「おう！！できねえけど一緒にいられるんだぜ！！」

俺は熱くなってきた。

「あ、お二人さん。早く教室入りましょう??」

「え、．．．？？学習部長？？」

俺は頭が真っ白になった。

「3年になったらやたら学級委員に立候補する人多くて．．．。あたし1度やったから断られちゃった．．．」

悲しい表情の陸。朝と同じ。

言えるのか俺．．．？

「あ、啓は？啓も学級委員無理だったじゃない？？」

俺実は教室入った瞬間から、『おう、新・学級委員』って言われた程だぜ？？

しかもあつさり決められたし・・・。

「あのさ俺・・・」

「やつぱ3年になりと難しいよね」

アハハとギャグみたいに笑う陸。

言えねえ！！つか言い損なつた！！

俺学級委員なつちまつたんだよ！！しかも即効で！！

おまけに相手は誰だと思うか！？『第2の夏海』と俺が呼ぶ学年女子『たらし』2号の須加^{スガ}明海^{アケミ}だぞ？！やつと俺の『たらし』が消えかかってきたと思ったのに・・・（消えかけかよ）このままじゃ『たらし』（旧・たらしただけどね）の俺がたらされるー！！あいつ俺に前までムチャクチャしつこかつたし！！今日だつて席隣でマジビビった！ずっと隣からぺちゃくちや喋るんだもんあいつ！俺が犯されるかも！！つか夏海よりぜってえーやばいって！！（頭の中うるさい）

「ん？啓なんかあつた？」

「えっ？」

汗まみれで息が荒くなっている（コレどう見ても不審者だろう）俺の顔を覗き込んだ。

「えっ、いや・・・何でもない・・・」

ここで言ったらますます陸が落ち込む。てか泣く。しばらく日が経ってからにしょ・・・。

陸の晴れない表情に俺も曇った。

これからどうしよう・・・。

「啓」

出た。俺の天敵！！（昨日からだけどね）

「ねえ・・・このプリント先生に頼まれたんだけど・・・？一緒配るお・・・？」

慣れてるのか、上手い上目使いでを見てくる。

「ゴメ・・・今、忙しいんだ」

俺は必死にシャープペンを動かして英語のノートに単語を書く。
（逃げてるだけじゃん）

「もーお、てかさあー啓って変わったよねえー3年になってえー」

「ハッ??」

「正確に言つとあー2年の3学期くらい??前まで構ってくれたのにいーそのくらいになってたらさなくなつたつて言つかあ??」

俺の予言は思わぬ方向へ行つた。

やばい・・・コレが全部陸の更生だとして俺が陸と付き合ってるつてばれたら・・・

『てめえーあたしの啓取つてんじゃねえーよ!!』（ものすごい顔で）

『ふわああああ!!?ゴッ、ごめんなさい!!啓とは別れますからね!!』

とか言つて・・・

『啓つてばやつぱたらしなおしてくれなかったの?もうお別れだね。バイバイ』（陸去る）

陸

!!!!!! (BGM・失

恋ソング)

とかなったらせってえー俺の人生狂う。

「啓る??」

やぜらしく須加は俺の顔を覗き込んでくる。

「まさか・・・」

須加の表情は曇った。

「か・の・じよ、できたとか・・・?」

俺の顔は青ざめた。

その時、須加の目に炎が見えた。

「・・・できたのね? 彼女??」

「えっ・・・ええ?!」

答える俺！！これ以上俺が苦しむこともない！！

『いるんだな、実は』と言え！！俺――！！

「いないよ」

俺のアホ――！！！！！！

「あ、そうなんだ♪じゃあまだ『たらし』でいてくれるよねえ？」
「？」

「そつ、それは・・・!!」

「今日放課後遊ぼうよぉ」

「だつ、だめだ!!」

陸に殺される!!

「えゝん??どうしてえ??」

「い・・・引退試合近いから」(理由じゃなく言い訳)

「なゝゝに言つてんの♪今日は外練だから早く終わるでしょ??」

ギクツ!!

「待つてるからねん」

そして俺に投げキッスをした。

俺は取り残された。

また取り残された？？

俺・・・どうすればいいの？？

番外編4＊啓の浮気発覚！？中編

俺のバカ・・・。

何でハッキリ言わねえんだよ。

逆に陸が傷つくだろうが。

俺のバカバカバカバカバカ・・・。

てなわけで放課後になってしまった。

ああ・・・俺の人生が今日で狂ってしまう。

「啓、顔色悪いぞ」

海が俺の顔をのぞきこんでくる。

思わず海の表情にキュウンとくる。

「べっ、別に・・・断じて陸に隠し事しているわけでは・・・」

「あほ、バレバレだよ」

俺は事情を海に全部話した。

「バカ」

「・・・バカって言うな」

「バカだろ。何言ってるんだよ」

「ハイ・・・」

俺は沈んだ。

「ハッキリ言えや。『俺には彼女がいるんだ』って」

「えと、俺・・・」

だんだん海表情がだんだんと赤くなってきた。

「え、海・・・？」

「お前、『女たらし』なおさないのかよ？」

「え・・・俺・・・」

パンツ！！！！

「へっ?!!」

海の表情がいつもより、今までよりものすごい。

「俺が陸ちゃん取っていいのかよ?!」

口は笑っているが目は笑っていない。

「啓?」

・・・陸。

「もう放課後だよー・・・」

「ああ・・・」

陸・・・俺の女神。

俺はその体に抱きつきたくなった。

手を広げようとした、その瞬間、

「けーい！！」

「！！！！？」

明海い！！

陸を見ると硬直している。

「は？」

明海が陸を見つけて眉をよがませる。

「あんた、あたしの啓に何か用？」

明海の表情は背筋がよだつ。

陸を見ると少しひるんでいる。

「あ、あたしは・・・」

「啓、早くデートしよ・・・よ」

明海は陸の言葉をさえぎって俺の腕を引っ張る。

「け・・・啓??」

陸は口を手で抑えて俺を見ている。

「啓ッ!!--早く!!--」

「おっ・・・おい!」

俺は引っ張られるがまま陸を置いていつてしまった。

「啓、どうしたのよ?暗い顔して」

公園のベンチに無理やり座らせられてニコニコしてられっか。

「たく。。啓の『たらし』ぶりにも困ったものよねえ」

背筋がぞくつとしたと思ったたら明海が俺の手に手を重ねてきた。

「ねえ・・・啓、あたしね、ずっと前から、啓のこと・・・」

つぶらな瞳で俺を見つめてくる。

まさか・・・この状況は何度も体験したことある。

いや、でもまさか・・・このセリフは・・・

「啓・・・」

どうしたのかな？

あたしにらまれちゃったよ？

誰、あの人？

あたし、彼女じゃないの？？

『たらし』、直すんじゃないの？？

「もう絶対許さない！！別れる！！」

パンツ！！

「・・・・・・・・」

放課後の教室で、勢いよくドアを閉めた音が響いた。

俺の心にも、『別れる』という言葉が響いた。

えと・・・俺、こういつつもりじゃなかったのに・・・。

中学3年生に進学したと同時に俺は変わった。

『たらし』を卒業して、“あいつ”だけに俺を託すんだと、誓ったはず。

コメン、
陸。

番外編4＊啓の浮気発覚！？後編

「陸……」

俺が早くにハッキリ言わんばかりにこんなことになっちまった。

ゴメン、陸。

でも、ちゃんと俺……

「ええっ！！別れたのあんたたち！？」

「そ、よ、前にあんなセリフ言われても信じたあたしが馬鹿だったわ」

「ん……」

せつかく、あたしが初めて好きになつた人なのに。

こんな形で終わってしまうなんて……。

でも、啓は『たらし』のまんまだし……。

しかもあたしの前で他の女子といちゃつくなんて……。

え、これって焼きもち??違う違う。

「あたしは、もう……啓には……」

「はいはい。どーせまったくつきそうだけど」

「なっ、絶対ないから!」

バンツ!!

「!?!」

教室のドアがいきなり開いた。

あ、昨日啓と一緒に帰った……。

「あんたが神埼陸?ちよつといい?」

ものすごいぴりぴりした顔。

やばい……怖い……。

廊下に出されてあたしはおそろおそろ声をかける。

「あ……あのおう……?」

背中を向けていたがくるとあたしの方に向き直った。

「あたし、須賀 明海。昨日啓と一緒に帰った女よ！」

は、はぁ……。

「で、あんた。単なる啓の優しさにつけこんで近くにいただけかと思っただけど……彼女だったとはねえ……」

め、目が笑っていませんよ……。

「ふんっ、ま、合格ね」

は？

「啓、なかなか積極的なあたしに断れなかったらしくってあんたに誤解されてそうとう反省してるみたいよ？」

え？誤解ですか？？

「あたしが昨日告白したときにやっと白状したわ。『俺には陸がいる』って」

あ、あたし理由聞かずに別れちゃった……。

「啓、やっぱり今回本気らしいから、あたしはどうていかなわないわほら、行っただけなさいよ」

え、でも……ひどいこと言ったあとだし……。

「行かないと、本気であたしが啓を取るわよ」

いっ・・・行ってきます・・・。

でも啓、何で言ってくれなかったんだろ？

あたしならすぐに聞いてあげたのに。

走っているうちに啓の姿が見えた。

でもそこであたしの足は自然と止まった。

「陸！！」

啓も気づいたらしくあたしに向かって全速で走ってくる。

「ハアハア・・・ゴメン」

「・・・知ってる」

「俺、告られた」

「・・・知ってる」

「ちゃんと、断ったぜ？」

「うん、知ってる」

「俺ちゃんと、陸のことだけしか好きじゃねえんだからな」

「分かってる！！」

あたしは啓に飛びついた。

さつきまでの感情が真っ白に消えた。

「俺絶対、完全に『たらし』消すから」

「・・・え？まだ消えてなかったの？」

「え、いや・・・そのお・・・」

あせっている啓の顔を見て思わずあたしはふきだした。

「頑張れッ！！」

ま、応援するしかないでしょ。

「ゴメンな」

啓のひどく反省した顔。ずっと見つめてられる。

手を繋いで学校を出る。

そして、長い長い通学路を2人で歩く。

2人の心のように赤く輝いた、夕日に向かって。

「俺の女神はいつまでも陸だからな!!」

「フッフ・・・何言ってるの?」

啓、
大好き。

最後に*川崎 陸 本気の恋のプロポーズ

あたし、神埼陸。

いえ、今日から川崎陸になります。

啓、川崎啓に出会ったのは中2の4月の始業式。

最初はモツプ騒動から始まりました。

当時『男嫌い』だったあたしは啓の視線にいちいちびくびくしていたのを覚えています。

“あいつ”と急接近した唯一のきっかけは、学級委員でした。

あたしが決意を決めて上げた右手。でも、クラスみんなの大半は、“あいつ”を見ていました。

だるそうに重い右手を上げて『俺、学級委員します』とか、驚いちゃった。

その分仕事はまじめにやってくれてあたしが足引つ張ってたみたい。

『男嫌い』がバレて、『その『男嫌い』、俺が直してやるよ!』と

か、でかいこと言っちゃって・・・でも、すごくうれしかった。

メールも初めて“あいつ”とやって、でも『好き』と伝えるのは苦しかった。

それからだね。あたしの薄れてきていた『男嫌い』が大きくなったの。

『好きじゃないけど、だからって嫌いなわけじゃないんだよ!!』

あの言葉があたしの『男嫌い』を動かす言葉だった。

あたしはあなたに勇気をもらった。

無縁だったバレンタイン。

不器用に作ったマフィン。

“あいつ”にやっと渡せた。

喜んでくれてたかな？

でも、ホワイトデーに悪夢は起きたね。

あたしが意味を知らなかった『エンゲージリング』。

“あいつ”は形であたしに言葉を伝えようとしていたね。嬉しかった。

でも、あたなはその後、何もかも忘れてあたしを敵だと思ったね。

辛かったよ。

切なかったよ。

あたしだけ何もかも知ってるみたいだった。

啓の言葉一つ一つが凶器になっていた。

エンゲージリングの意味を知ったとき、あたしの心はどしゃぶりだったよ。

夏海を信じていたね。

夏海を彼女と思っていたね。

ホント、辛かった。

『協力する!!』

2度目もあたしの『男嫌い』に協力してくれるなんて、思ってもいなかったよ？

啓は、真っ白なままでも、ちゃんと心の中にいたんだね。

でもあたし、勝負負けちゃった。

勝負でキスなんて使えないよ。

無意識にあたしにあやまるなんて、涙が出そうになった。

でも、啓からもらったエンゲージリング、海からもらったものだと勘違いしてたね。

違うよ。啓からのものだよ。

あたし、啓が好きなの！！

啓は思い出してくれた。

あたしに、『好き』って言うてくれた。

わざわざ傷つけないために、ひどいこと言っ
て自分から避けさせようとしていたんだね。

十分な優しさだよ。

・・・ありがとう。

「結婚しよう」

啓からのプロポーズから、ついにこの日が来た。

ふわふわの白い衣装。

ずっと、憧れていたウェディングドレス。

「きれいだ・・・」

啓の慣れた言いかた。

思わず笑った。

これかれは、ずっと、啓のそばにいれる。

大好きな、世界で一番、愛しい人のそばに。

啓、愛してる——。

最後に*川崎 陸 本気の恋のプロポーズ（後書き）

Dear Love Proposeを最後まで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6902b/>

Dear Love Propose

2010年12月2日15時10分発行